

明海日本語

19

2014. 2

論文

ポライトネスの歴史地理学

—Google Ngram Viewer とGoogle trendsによる言語史—

..... 井 上 史 雄 (1)

新語・流行語の使用の経年変化

—Google Trendsと新聞記事データベースを用いて—..... 上 村 健太郎 (11)

公共施設の言語使用実態と考察 —東京23区を中心に—..... 張 海 燕 (21)

日本語類義語の教授法研究 —『基礎日本語辞典』の動詞を事例として—

..... 岩 佐 靖 夫 (33)

日本語学習者にとっての留学の利点

—日本語能力試験聴解における誤答の要因から—..... 西 川 寛 之 (45)

第二言語喪失における「do + NP」使用のケース・スタディ

—グーグル・エスグラム・ビューワーを活用した—考察—..... 平 井 清 子 (53)

「確信犯」の意味・用法の変遷について —誤用から意味変化へ—

..... 佐々木 文 彦 (65)

研究ノート

日中バイリンガル幼児のコードスイッチングについての考察

..... 高 源 (81)

ポライトネスの普遍性に関する日西比較 —日常会話における依頼を中心に—

..... Miguel Ortega Pereira (85)

2013年度卒業研究（論文）題目一覧..... 荻 原 稚佳子 (89)

編集後記..... 西 川 寛 之 (96)

明海大学日本語学会

執筆者紹介（掲載順）

井上 史雄	明海大学外国語学部日本語学科	客員教授
上村健太郎	明海大学応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
張 海 燕	明海大学応用言語学研究科博士前期課程	大学院生
岩佐 靖夫	明海大学総合教育センター	専任講師
西川 寛之	明海大学外国語学部日本語学科	専任講師
平井 清子	北里大学一般教育部	教授
佐々本文彦	明海大学外国語学部日本語学科	教授
高 源	明海大学応用言語学研究科博士前期課程	大学院生
ミゲルオルテガ・ペレイラ	明海大学応用言語学研究科博士前期課程	大学院生

明海日本語

19

2014. 2

明海大学日本語学会

〈論 文〉

ポライトネスの歴史地理学

—Google Ngram Viewer と Google trends による言語史—

井 上 史 雄

キーワード：ポライトネス，社会言語学，Google Ngram Viewer, Google trends

1. 言語学の学術史的位置

近年グーグル検索には様々な種類ができた。そのいくつかを使うと，単語や表現の歴史や世界的な地理的分布が分かる。これまで不可能だった情報がたちどころに得られる。検索の元データが違いうし，統計手法もブラックボックスなので用心すべきではあるが，大量データを扱っている点が画期的である。これまで1,000を超える数の単語や表現を検索したが，その結果はおおむね納得のいくものだった。地理学の一分野の「歴史地理学」をグローバルに拡大して（またはある国家全体に適用して）考察できる。また「方言地理学」と区別した「言語地理学」の考察には，データ収集に膨大な時間がかかっていたが，グーグル検索を上手に活用すると，思いがけない言語現象について「言語地理学」的研究が可能になる¹。

以下，敬語，ポライトネスにかかわる現象を紹介しよう。Google Ngram Viewerで検索してみる²。Google Ngram Viewerは無指定で検索すると1800年から2000年の区間の推移（トレンド）を表示するが，年を指定すると1500年から2008年のトレンドが表示される。1800年より前は，Google Booksのデータが少なく，OCRによる文字の読み取り精度や，発行年の指定などにも問題があるので，一般公開を避けているようである³。しかし用心して使えば，有用な情報が得られる。

まず，言語学とその関連分野の学術史を再検討しよう。トレンドグラフによれば（本論文では省略），psychology, economics, sociology, linguistics は19世紀以来ほぼこの順番で登場し，その順番のまま21世紀にも人気を保っている。psychology, economics, sociology は，1930年代に盛んになったが，第2次世界大戦で下火になり，終戦後復活した。後発の言語学は1970年代にピークがあり，その後は右下がりである。学問の順位は，大学の制度とも関わる。先行した分野が大学の学科として座を占めると，拡大再生産が行われ，研究者層がつかなくなる。後発の分野もそのパターンを踏襲するが，先行の分野を追い越すことは難しい。工学などの応用科学で，社会の（就職の）要求に応じることのできる分野は，在籍学生数を増やすなどして，先行の分野を追い越すことがある。しかし人文・社会科学ではまれで，既得権が幅を利かせる。言語学の近辺に位置しそうな研究分野は，この半世紀，同じような変遷を見せた。21世紀には，このすべてが下降気味である。他の（娯楽関係

の) 語などは上昇しているのに対し、まじめな学問用語などは、インターネット検索の世界で影を薄くしている。

2. 言語学の諸分野の盛衰

2.1 20 世紀の言語学の諸分野 Google Ngram Viewer

次に、言語学内部の専門分野の名称について Google 検索で試してみた(井上 2013.9)。結論だけ示すと、この半世紀ほどの学問の流行をよく示している。

Google Books Ngram Viewer によるグラフは、井上 (2013.9) 参照。構造言語学 structural linguistics は、1950 年代に現れはじめ、1970 年代にピークに達して、その後下火になった。変形文法 transformational grammar と心理言語学 psycholinguistics は 1960 年代に登場し、1970 年代に大流行になったが、その後勢いを失った。社会言語学 sociolinguistics は、1970 年代に広がり、その後も隆盛を続けている。応用言語学 applied linguistics は、後発であるが、勢いを増している。

これまでの体験による印象と一致する。Google Books でデジタル化されて読み取れるようになった膨大な出版データの集計だから、世の中 (の本の中身) をよく反映している。

2.2 21 世紀の言語学の諸分野 Google trends

Google trends を使うと、その後 21 世紀の様子が分かる (図 2-1)。結論から言うと、言語学の研究分野の出現順番とその後の隆盛はほぼ比例する。2008 年までの Google Books Ngram Viewer の傾向はそのまま Google trends に受け継がれた。

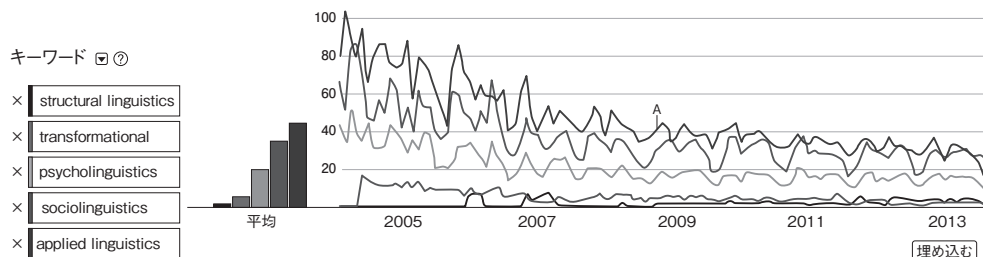


図 2-1 structural linguistics, transformational grammar, psycholinguistics, sociolinguistics, applied linguistics by Google trends

構造言語学 structural linguistics は、今は有効な検索対象にならないほどに、人々の関心を引かなくなった。変形文法 transformational grammar も下火である。心理言語学 psycholinguistics も一時の勢いはない。社会言語学 sociolinguistics は、その後も隆盛を続けていたが、下降線をたどる。応用言語学 applied linguistics はこの中でトップだが、やはり下降線をたどる。

なお Google trends を使うと、地理的分布も分かる。図 2-2 a～c に示す。構造言語学 structural linguistics と変形文法 transformational grammar は、アメリカのみ。社会言語学 sociolinguistics は、

インドネシアとパキスタンと北アフリカ。(図は略すが、心理言語学 psycholinguistics はなぜかインドネシアと北米、応用言語学 applied linguistics はイスラム圏に目立ち、中国も色が濃い。) 現代の国ごとの社会的要請が違うのだろう。



図 2-2a structural linguistics



図 2-2b transformational grammar



図 2-2c sociolinguistics

3. ポライトネスの盛衰

3.1 20世紀のポライトネス理論 Google Ngram Viewer

次に英語のポライトネス politeness という単語の500年間の使用状況を調べ、その周辺の語とくらべて、言語外の事象として産業や文化、世相との関連を指摘する。

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論の影響は日本では大きい。世界全体ではどうだろう。Google Books Ngram Viewerで手がかりがつかめる。二つの術語 politeness strategy, politeness theory を手がかりにした。図3-1によると、論文集に採録された頃(1978)に使われはじめ、1987年の単著刊行のころから急上昇した。それ以前も他の先行研究があったが、その影響は見られない。また21世紀に入っても上昇を示している。

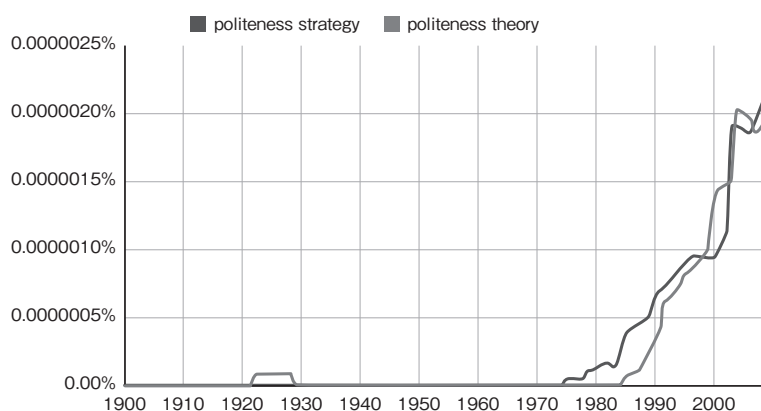


図3-1 politeness strategy, politeness theory by Google Books Ngram Viewer

3.2 21世紀のポライトネス理論 Google trends

ポライトネス関連語の最近の使われ方については、Google trendsで分かる。結論を先取りして言えば、英語の politeness は英語国で使われるのみでなく、東アジアでもよく使われる。ただしこの8年間でやや使用率が落ちる傾向が見える。またフランス、ドイツなどでも地域差を示しつつ使われる。フランス語の politesse, ドイツ語の Höflichkeit は、他の国でも使われる。その地域差は政治体制や、人々の(人間関係への)関心のあり方の違いと対応するように、読み取れる。

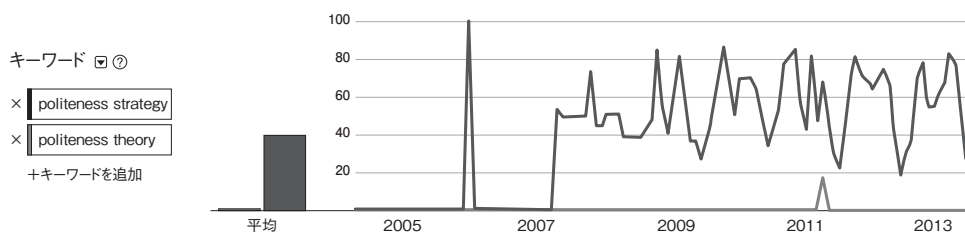


図3-2 politeness strategy, politeness theory by Google trends

まず“politeness strategy”, “politeness theory” という連語について検索した (2013.7.27)。全世界でみると politeness theory は2006年から検索で使われる (図3-2)。politeness strategy は2011年に検索で使われたのみである。

politeness theory が検索で使われるのは、イギリスとアメリカではパターンが似ていて、2009年からである。politeness strategy は十分に検索で使われていない。また politeness theory も、地域差を示せるほど十分に検索で使われていない。これを手がかりに、politeness theory という術語が一般に検索で使われるほどにポピュラーになったのは、ごく最近、21世紀と推定できる。なお他の国で (英語で) 検索しても、「検索ボリュームが十分でないためグラフを表示できません。」という表示が出る。ちなみにカナで「ポライトネス」と検索窓に入力しても同様である。術語・専門用語は、Google 検索でそれほど多くないのだろう。

3.3 ポライトネスという用語の500年間 Google Ngram Viewer

さて、術語としてでなく、一般用語としての politeness をみると思いがけないカーブが浮かび上がる。Google Books Ngram Viewer で標準 (デフォルト) とする1800年にすでに相当の使用率に達している。最大期間である1500-2008の間に拡大したら、1750年ごろに急増している。その理由を探るには、他の語の様相が手がかりになる。類義語として、politeness, courtesy, etiquette を同時に検索した (図3-3)。



図3-3 politeness, courtesy, etiquette 英語

Courtesy が16, 17世紀によく使われたが、その後影をひそめた。1750年代以降急に politeness が使われ、100年ほど続いて、その後も細々と使われた。しかし、19世紀になると変って courtesy が再び勢力を盛り返す。なおフランス語からの借用語 etiquette は19世紀に現れ、今も続く。

この politeness の突然の登場は不思議である。何か理由があるに違いない。Google Books Ngram Viewer は英語について、細分した情報も与える。まず英米の違いをみよう。アメリカ英語では politeness の浮上がやや早く、1750年直前である。またイギリス英語では politeness の浮上は遅れ、1760年代にずれこむ。また英語フィクションに限ると、politeness は、ちょうど1750年である。なお courtesy は、18世紀以前にはあほとんど使われておらず、19世紀に盛んになる。なお遅れて etiquette も19世紀に現れる。table manner を調べたら (図3-4)、politeness の使われ方と似た点があったが、

強い関係とはいいいにくい。how to write, how to speak, how to eat などは、18世紀の使用率が低い。

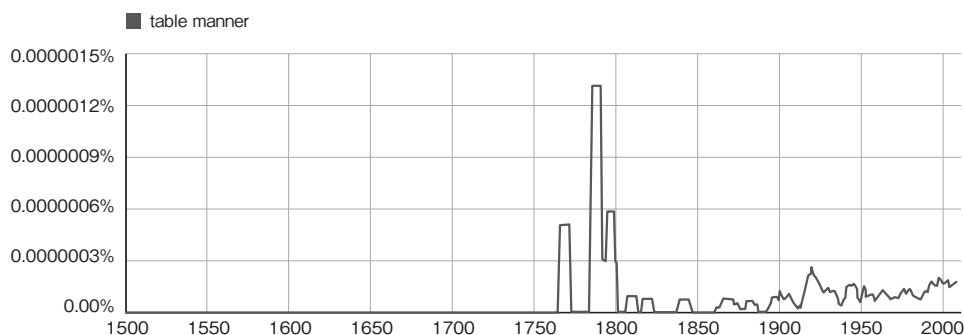


図 3-4 table manner 英語

他の関連語で同様の傾向が出るか、調べてみた（図省略）。社会階層・職業に関わる語では、1700年代後半から使用率が上がる。Aristocrat, farmer, merchant, worker, class, king, queen, kingdom, empire, money, market など、1700年以前には散発的に使われていたのが、1700年代後半に回復する。また Christ と God は1700年前後の200年ほどの使用率がかなり高い。religion の使用率は1700年代前半から急増して1750年から1850年にかけて高原状を呈する。人間に関わる名詞に、違いが出る。English language, French language, German language, Spanish language, Japanese language の結果でも、1700年代前半の用例は少なく、1750年を境に急増する。

ただし、the, they, thou, you や前置詞の類だと、この傾向は現れない。また live, die, go, come, make, walk, fix, set のような頻度数の多い動詞（または一般的意味の名詞）、および pretty, hot, good, bad, large, big, small, white, black, red, green のような頻度数の多い形容詞では、1700年代前半の下降は現れず、前後の時代と連続的な盛衰を示す。

宗教的対世俗的の変化であろうか⁴。これこそ culturomics (Michel et al. 2010) の本領を発揮する点であろう。politeness の1750年前後隆盛の理由は、世相にあると見当がつく。

英語の中だけでは politeness の1750年前後隆盛の説明がつきにくい⁵。（インターネットの翻訳機能を使って）フランス語とドイツ語に訳して、検索してみた。図 3-5、フランス語 politesse は、17世紀から徐々に使用率を増やし、1750年の直前にピークがある。

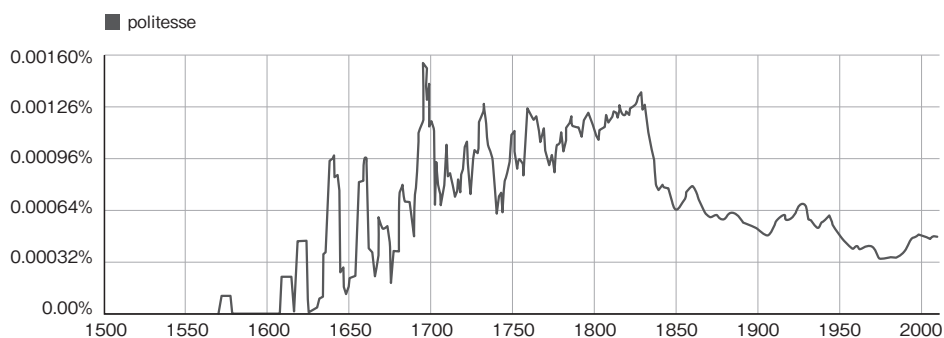


図 3-5 politesse フランス語

図3-6, ドイツ語 Höflichkeit は, 1700年代前半に突如大きなピークを示し, その後減少し, 19世紀には横ばいを示す。



図3-6 Höflichkeit ドイツ語

ここから考えられるのは, ヨーロッパ諸国でのマナー関係用語の伝播である。単純に Google Books Ngram Viewer での使用状況を手がかりにすると, フランスからドイツへ, アメリカへ, イギリスへと広がったことになる。フランスのルイ王朝の時期にフランス語 *politesse* が盛んに使われたのは, 当時の世相を示すと考えてよい⁶。

1700年代前半は, フランスではルイ王朝が繁栄を誇ったが, その一方でイギリスははじめ周辺諸国との戦争が続いた時期でもあった。アメリカ大陸進出でも英仏が勢力を競った。英仏7年戦争は1763年のパリ条約で, 収拾が付いた。この頃, フランス宮廷の礼儀作法の *politesse* が *politeness* と訳されてイギリスに取り入れられたと, 説明できる。

なお産業革命の影響も考えられる。イギリスの産業革命は1760年代から1830年代までという。ちょうど *politeness* の使用時期と重なる。社会階層(労働者, 中産階級)が複雑化し, 階層移動が始まる時期になる。このときに *politeness* が問題, 話題になることは十分に考えられる。市場経済の興隆がさらに背景にある。

以上で考えたのは, 時期の一致の説明である。論理的証明にはまだ遠い。Google Books Ngram Viewer では, 年代別に個々の書籍にもジャンプできる。1750年前後の *politeness* を使った本の性格を見れば, 論理的に証明できる。Google Books に飛んで個々の本をみると, 18世紀には, *politeness* と名乗る実用書らしきものが数冊出ている。*Of Politeness* 1738; *Galateo Or A Treatise on Politeness* 1774; *An Essay on Politeness* 1775; *Principles of Politeness* 1784 などである。また多くの本の *politeness* の用例が数行単位で表示される。一般書の中の記述でも18世紀後半に *politeness* の使用が盛んになったと読み取れる。

以上のように個々の本の用例にまで立ち戻って, 1750年前後の英語の *politeness* 急増の背景を探ることができた。フランスの宮廷マナーの伝播, イギリスにおける産業革命に寄る社会階層分化の開始という, 非言語的要因を指摘できた。Google Books をはじめとする様々なインターネット上のデータを, 高速で検索できるようになったおかげである。かつては数カ月かかっても不可能に近かった作業である。

3.4 21世紀のポライトネスという用語 Google trends

以下ではPolitenessという語について、最近8年間の盛衰をみる。徐々に使用が減っている。1年の間の繰り返しもある。図3-7の世界地図で見ると、本来の英語国以外に東アジアに目立つ。「アジア的敬語」の発達した国といえる（井上 2012.10）（中国は例外）。

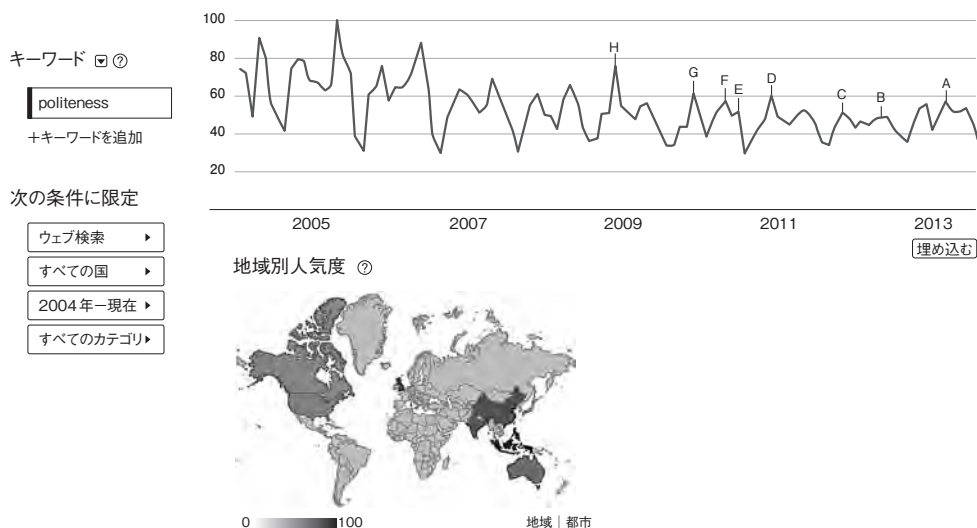


図3-7 politeness Google trends すべての国

4. 結論：ポライトネスという用語の社会経済的背景

以上、最近可能になったGoogle検索技法を使って、社会言語学の研究動向を見、かつその中でも敬語に関する「ポライトネス」という用語の使用状況について考察した。500年における動向とともに、21世紀の約8年の動向を探ることができた。学問研究の動向については、これまでの文献や国際会議での発表動向から見たものとはほぼ同様な傾向が見出された。一般用語としてのpolitenessについては、1750年前後に急な使用増加が認められ、フランス語の影響と社会階層の変動という社会的、経済的要因で説明できた。

この種の情報を得るためには、従来例えば出版物の書名を集計するなどの手段があった。しかし書名が中身を忠実に反映するとは言えない。他の分野の本の中である単語が言及され、使用されているかは、自分の読んだわずかな本で知るしかない。上にあげたトレンドグラフは、筆者の印象を裏付けるものだった。これほど、きれいにかつ極端に変遷があったとは認知できなかった。Googleデータの強力さは、印象的である。

Google Books Ngram Viewerを作った研究者の代表Jean-Baptiste Michelは“culturomics”という名称を付けた⁷。年別のトレンドグラフも、かつて作成が困難だった。現在は各種の分布地図が数秒で、手軽に出力されるようになった。新しいことが言えなくなったら、研究者としての資格がなくなったと考えたとすれば、このGoogle言語学の手法によって、ほぼ永続的に研究者の資格を持ち続けることができそうである。

<注>

- 1 「言語間方言学」と呼ぶ分野もある（井上 2007.2, 2011.2, Inoue 2013.4）。
- 2 Google Ngram Viewer は、Google 社がスキャンした書籍 500 万冊をもとに構築された 5000 億語からなるデータベース。Half trillion（半兆）語であり、整備されたコーパスに比べ、語数は圧倒的に多い（前川 2013）。日本語版は公開されていないが、他の言語を日本語研究に役立てることができる。外来語および外行語の研究である（井上 2012.10）。
- 3 しかし保留、限界を考慮に入れた上で、活用する価値がある。Google Ngram Viewer ホームページ参照。
- 4 ただし 1700 年代前半の（Google Books 所収の）文献の内容に偏りがある可能性がある。
- 5 名詞の politeness の初出は、図 3-3 によれば 1500 年代なので、1750 年頃に成立したわけではない。フランス語の politesse の初出も古い。
- 6 ここでは 1750 年ころの急増を真実の現象ととらえて説明を試みた。War, peace などいくつかの語でも 1700 年代前半の使用率が低いことが気になった。しかし noble などは 1600 年代以降 1700 年代も多く使われているので、この時期の収録文献の少なさや偏りによるのではないと思われる。なお、出版年代の認定に問題が残ることについては、以下のホームページを参照。1800 年以前の文献については、点数が少ないだけにさらに問題がありうる。
- 7 インターネット上では以下のような試みが公開されている。
<http://google.akjava.com/google-ngram-viewer>
<http://readingmonkey.blog45.fc2.com/blog-entry-538.html>
<http://www.informationisbeautiful.net/visualizations/google-ngram-experiments/>
<http://isyoichi.seesaa.net/article/366136914.html>
<http://www.theatlantic.com/technology/archive/2012/10/bigger-better-google-ngrams-brace-yourself-for-the-power-of-grammar/263487/>
<http://tomaki.exblog.jp/19765129/>
<http://justlikecooking.blogspot.jp/2013/06/more-fun-with-google-ngram.html>
<http://www.macmillandictionaryblog.com/googles-ngram-viewer-2-0-a-new-bag-of-tricks>
<http://beyondpaperediting.blogspot.jp/2013/04/use-googles-ngram-viewer-to-craft.html>
<http://www.motherjones.com/kevin-drum/2010/12/google-unveils-fabulous-ngram-viewer>
<http://stancarey.wordpress.com/2012/11/21/googles-ngram-viewer-and-wild-treacle/>

なおデータの加工についての手法も紹介してある。

http://blogs.yahoo.co.jp/igproj_fusion/17367647.html

参考文献

井上関係の現段階文献情報は、以下の Web サイトで公開された。

http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/person/inoue_fumio/index_eng.html

井上史雄(2007.2)『変わる方言 動く標準語』筑摩新書

井上史雄(2011.2)「Google 言語地理学入門」明海日本語 16 pp.43-52

<http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/16/043inoue.pdf>

Inoue, Fumio (2012.1.30) "Improvements in the sociolinguistic status of dialects as observed through linguistic landscapes" *Dialectologia* 8 pp.85-132

www.publicacions.ub.edu/revistes/ejecuta_descarga.asp?codigo=725

井上史雄(2012.2)「日本語世界進出のグーグル言語地理学ーグーグルインサイトにみる外行語総合分布ー」明海日本語 17 pp.29-42

<http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/17/inoue.pdf>

- 井上史雄 (2012.10) 「日本語の世界進出—グーグルでみる外行語—」『外来語研究の新展開』おうふう
- 井上史雄 (2012.10) 「日本語敬語の変化とアジアの敬語」『社会言語科学シリーズ 1 「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房
- Inoue, Fumio (2013.4) Google Linguistic Geography and Worldwide Borrowings— Interlingual dialectology in Japanese and Spanish — (Special Lecture) Universitat de Barcelona
- 井上史雄 (2013.9) 「言語学の流行」日本語学 32 巻 9 月号 <ことばの散歩道 184 >
- 井上史雄 (2013.12) 「外行語と外来語 (日本語の攻防)」日本語学 32 巻 12 月号 pp.70-79
- 前川喜久雄 (2013) 『コーパス入門』朝倉書店
- Michel, Jean-Baptiste et al. (2010). Quantitative analysis of culture using millions of digitized books. Science (Published online ahead of print: 12/16/2010).

〈論 文〉

新語・流行語の使用の経年変化

—Google Trendsと新聞記事データベースを用いて—

上 村 健太郎

キーワード：Google Trends, 新聞記事データベース, 新語・流行語大賞, 経年変化

1. はじめに

本研究は、新語・流行語の使用の経年変化を調査する新たな手法として、Google Trendsと新聞記事データベースを用いたものである。Google Trendsと新聞記事データベースを用いて、新語・流行語が実際に使用されたデータを取り出し、新語・流行語の使用実態の経年調査・分析結果を述べる。

2. 先行研究

新語・流行語の経年での使用実態調査に関する先行研究は、管見した限り存在しない。本章では、流行語に関する先行研究である、伊藤(1975a,b), 御園生(1989), 寺川・浅井(2001)を記す。新語・流行語の世代別認知度や使用についての意識、衰退する語に関する先行研究である。

伊藤(1975a,b)は、昭和元年から昭和50年までの50年間によく使われたことばについて、どのようなことばが印象に残っているのかを質問紙法により調査したものである。伊藤は調査データを、年代別、年齢層別、時代別、性別に分け分析を行った。結果、伊藤は流行語の盛衰についてI型からV型の5つに分類した。I型は、年齢が高いほど知っており、最近のことばは属さない型のことである(例、ステッキガール等)。II型は、青年層は知らないが、中老年層は知っており、当時の生活語が多く属する型のことである(例、ラッパズボン等)。III型は、青年層は知っていて、老年層はまだ知らない、新しい時代のことばが属する型のことである(例、アッパッパ等)。IV型は、学生において人気のあることばの属する型である(例、バイコロジー等)。V型は、全ての世代によく知られており、社会的現象として実態が存在し、マスコミに頻繁に登場することばが属する型である(例、ハイジャック等)。

御園生(1989)は、埼玉県内の私立大学において学生1,064人を対象に「同じ年頃の親しい友人と話すとき、好んで流行語を使うか、使わないか」「使う場合は、使う理由」を、質問紙自由記入方式で回答させたものである。流行語を使うと回答した学生は、55.5%であり、使わないと回答した学生は44.5%であった。使う理由としては「表現上の効果」との回答が34.1%、次いで「無意識」が

23.1%、「伝達上の効果」が13.6%であった。御園生は、流行語を使う方だと回答した学生の約4分の1が無意識で使っていることから、「流行語を知らないから使わない」と回答した人も、気づかぬうちに流行語を使っている可能性があるとしている。

寺川・浅井(2001)は、昭和6年発行の『新語辞典』所収語が60年後の平成3年発行『広辞苑第4版』に掲載されているか否かを調査し、使われなくなる言葉にはどのような特徴があるかをまとめた。調査の結果、60年の間に娯楽や機械に関する語が使われなくなる傾向があるとしている。

上記のように先行研究では、「流行語の世代別認知度」「流行語を使うか否か」「新語が辞書に記載されるか否か」は判明する。しかし、新語・流行語が実際にどの程度使用されたか否かや、経年での使用実態は判明していない。

3. Google Trendsについて

本研究で用いる、Google Trends について述べる。Google Trends は、ある特定の語が Google で検索された語の総体と比較してどの程度の量があるのかをグラフ化、数値化できるサイトである。検索が行われた期間のうち最も使用の多かった時点を 100 と指数化し、他の期間の使用数を相対的に表したグラフが表示される。検索対象とする期間や地域を指定することも可能であり、国や地域内における検索データも把握できる。Google Trends において検索が可能な期間は 2004 年 1 月 1 日から、検索を行った当日までである。検索結果のデータは、表計算ソフト Excel の csv ファイルとしてダウンロードすることが可能である。検索結果を csv ファイルとしてダウンロードをするには、Google のユーザー登録を行いアカウントを取得し、ログインする必要がある。ダウンロードした csv ファイルでは、Google Trends において表示されたグラフのデータを、数値データとして得ることができる。Google Trends のデータは、同じ通信端末において短期間に繰り返し検索された語は除外されているため、検索量の値が作為的な操作の影響を受けることは少ない。Google Trends を用いることで、ある語の検索数の増減傾向が把握できる。

Google Trends で検索対象地域を日本に指定して「流行語」を検索した場合、次頁の図 3-1 のように表示される。検索を行ったのは 2013 年 12 月 9 日であるが、検索対象期間は 2004 年 1 月から 2013 年 11 月までとした。2013 年 11 月までとしたのは、検索日が 2013 年 12 月 9 日であるため、12 月の 9 日間のデータを排除し、他の 1 ヶ月毎のデータと期間を揃えるためである。

図 3-1 の検索結果を見ると「流行語」は、流行語大賞が発表される毎年 12 月ごろに検索が多くなる傾向があることがわかる。このグラフの数値は検索の実数ではなく、サンプリング調査に基づく推測値である。数値は調査した期間における検索ボリュームの最大値（図 3-1 では、2010 年 12 月の値）を 100 とし、その他の値を相対的に表示している。このグラフは、Google におけるインターネット検索の全体量の増減の影響を加味して計算されている。例えば、ある特定の一期間に「流行語」という語の検索実数に変化がなくても、Google におけるインターネット検索の全体量が増加していた場合、相対的に「流行語」という語が検索される割合が低くなる。図 3-1 中のグラフの下降線は、検索回数が少なくなることを意味しているのではなく、インターネット検索の全体量と比較し、検

索される割合が低くなっていることを示している。

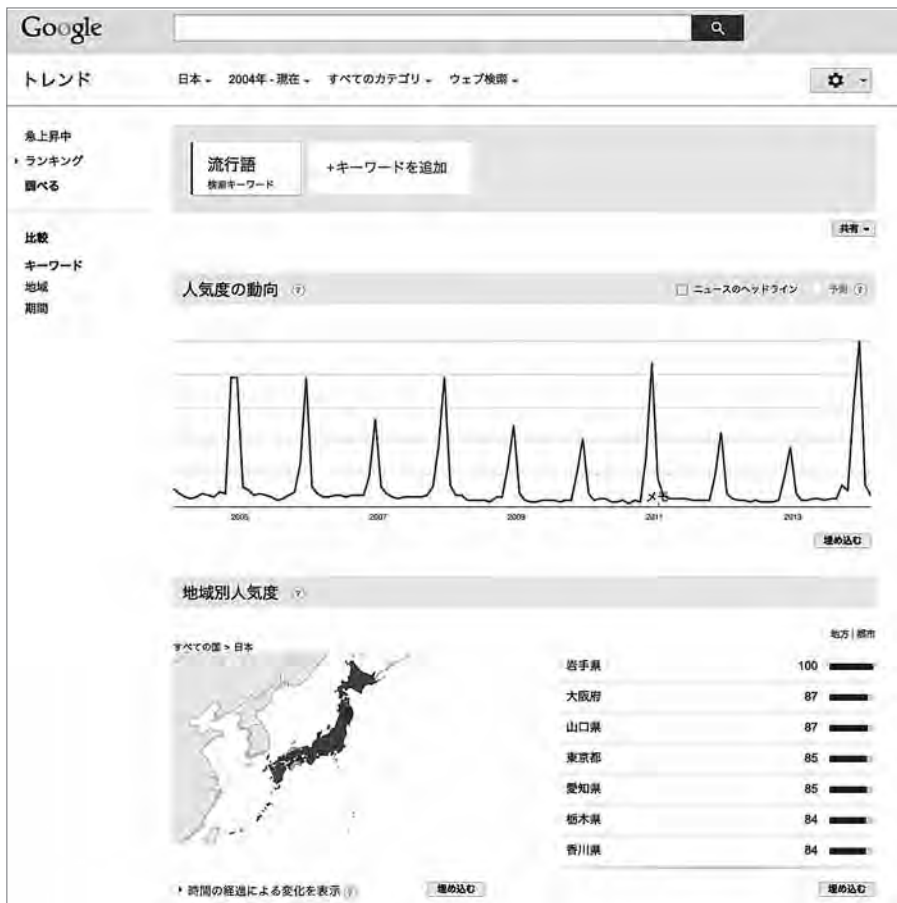


図 3-1 「流行語」の Google Trends 検索結果

4. インターネット調査の意義

第2章で挙げた先行研究では、質問紙法と辞書記載の有無によって調査を行っていた。両調査法では、実際に語が使用されたデータは得られにくい。質問紙法では、特定の人物を対象とした調査となるほか、インフォーマントの先入観が影響して回答が変わる恐れがある。Google Trendsと新聞記事データベースを用いたインターネット調査では、インターネット検索や新聞記事で実際に使用されたデータが得られる。Google Trendsで調査する場合、調査対象となるインフォーマントは全世界のGoogleを使用したインターネットユーザーであり、質問紙法よりインフォーマント数が増える可能性が高い。また、調査とは無関係の状況で使用されたデータであるため、インフォーマントの先入観で回答が変わる恐れも質問紙法に比べ低くなる。以上が、インターネット調査の意義である。

5. 調査方法

調査方法は、まず調査対象語と調査対象期間を選定する。次に、調査対象語をGoogle Trendsと新聞記事データベースの双方で1年毎に調査期間の指定を行って検索を掛け、1年毎の使用数を収集する。収集した使用数を図式化し、経年での使用実態を明らかにする。新聞記事データベースに収録された記事は、新聞社による校閲が行われた文章である。一方Google Trendsは、インターネットユーザーがGoogleを用いて検索が行われた語のデータであり、校閲は行われない。新聞の発行にあたり校閲が行われた場合と、校閲が行われないインターネット検索の場合という性質の異なったデータを用いるため、新聞記事データベースとGoogle Trendsの双方で調査を行うことにする。

本稿では、上記調査方法を用いた調査結果を記す。本稿の調査対象語は、「現代用語の基礎知識選ユーキャン新語・流行語大賞」の、2005年から2007年の受賞語30語のうち、25語の調査を行う。2005年から2007年の受賞語のうち、25語を選定した理由は、以下のとおりである。第一に、本調査は2010年に筆者が行った、新聞記事データベースによる新語・流行語調査を基にしていること。第二に、Google Trendsの仕様のため、2004年以降のデータしか得られないこと。第三に、2010年に筆者が行った新聞記事データベースによる新語・流行語調査により、受賞前年から受賞3年後の5年間に語の使用の増減が見られると判断したため。第四に、エクスクラメーションマーク(!)や波形(～)のような特殊文字が含まれる語は検索時にエラーが起き、正確な検索結果が得られない恐れがあり除外したためである。新聞記事データベースは、朝日、毎日、読売の3社を用いた。

6. 調査結果

6.1 新聞記事調査結果

まず、新聞記事における調査対象語の使用記事平均数を、次頁の図6-1に記す。

新聞記事においては全ての語で、受賞前年から受賞年にかけて使用件数が増加した。受賞1年後の使用数が受賞年の件数を上回った語は12語であった。受賞2年後の使用数が受賞年の件数を上回った語は6語、受賞3年後は5語であった。調査を行った5年間に使用件数が増加し続けた語は、「ブログ」「富裕層」の2語であった。「ブログ」は他の語に比べ使用件数の増加率が高く、受賞3年後には対受賞年比368.2%であった。「猛暑日」は、受賞1年後から受賞2年後にかけて使用数が減少したが、受賞3年後には使用数が増加に転じた。「猛暑日」の受賞3年後の使用件数は、調査を行った5年間で最も多かった。

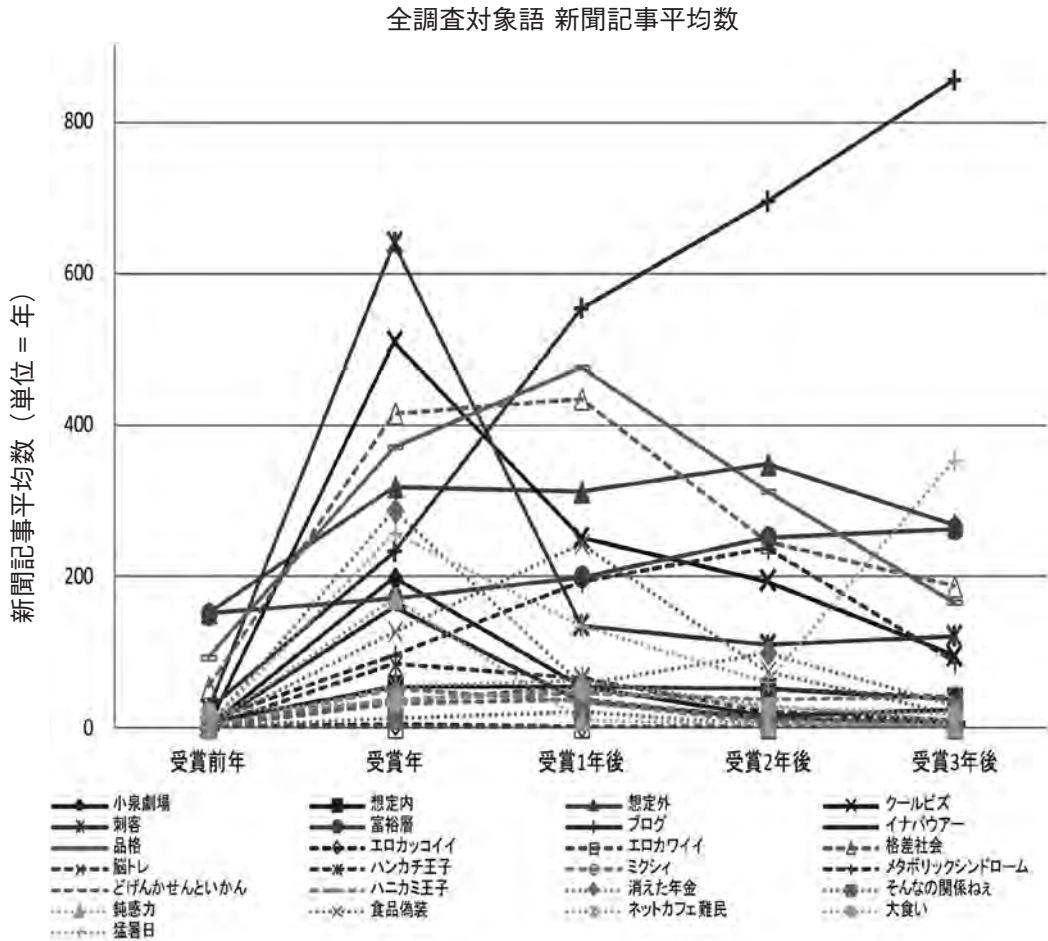


図 6-1 全調査対象語の新聞記事平均数

6.2 新聞記事と Google Trends 調査結果

新聞記事と Google Trends における調査対象語の使用の増減は、次頁の図 6-2 の通りである。図 6-2 は受賞年の平均使用件数を 100% とし、各年の平均使用件数の増減を表した。実線が新聞記事の調査結果であり、破線が Google Trends の調査結果である。新聞記事と Google Trends の双方で、受賞 1 年前から受賞年にかけて使用数が増加した。受賞 1 年後には受賞年に比べ使用数が減少し、受賞 2 年後にかけて減少率が増加した。受賞 1 年後から受賞 2 年後にかけて、新聞記事の使用数は約 30% 減少し、Google Trends では約 35% 減少した。

全受賞語 平均値（新聞記事×Google Trends 100=受賞年値）

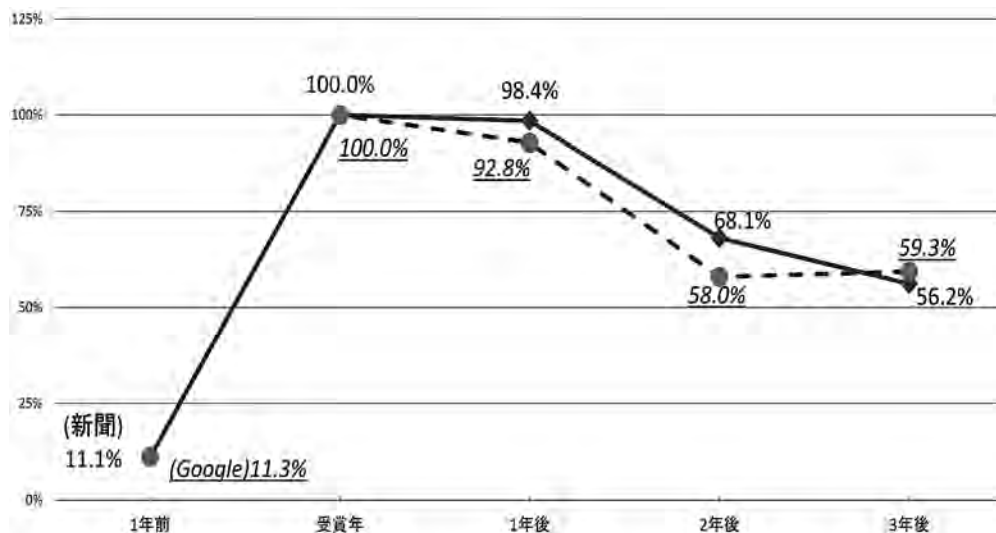


図 6-2 新聞記事と Google Trends における調査対象語使用の増減

受賞 1 年後（新聞記事×Google Trends）

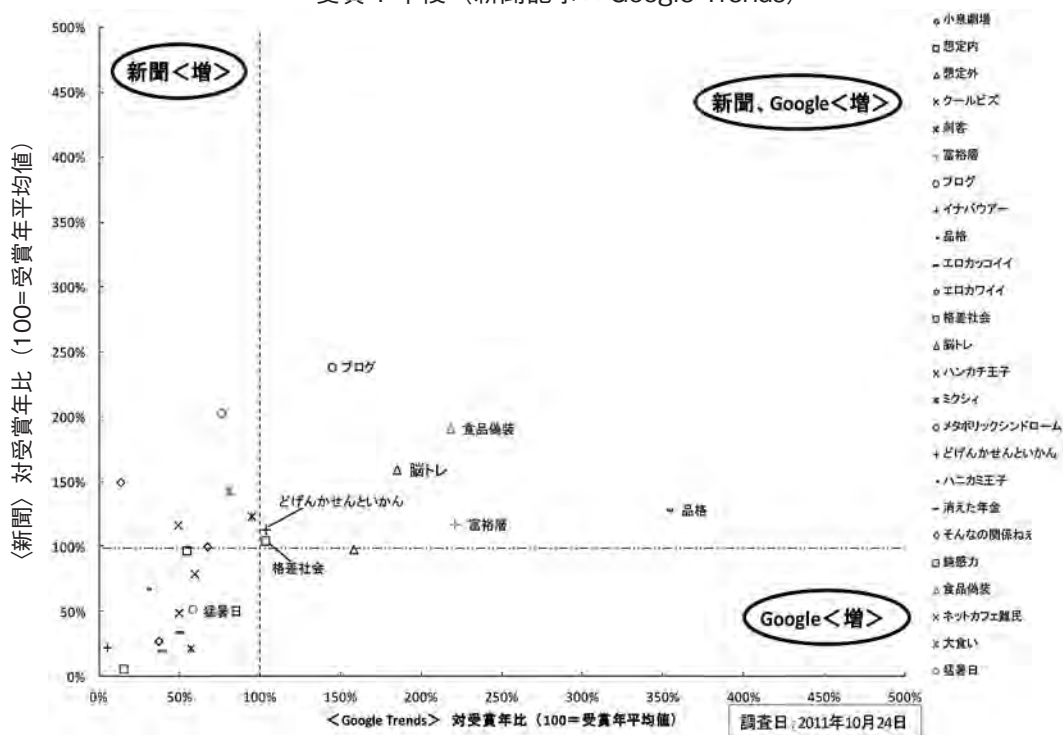


図 6-3 受賞 1 年後散佈図（新聞記事と Google Trends）

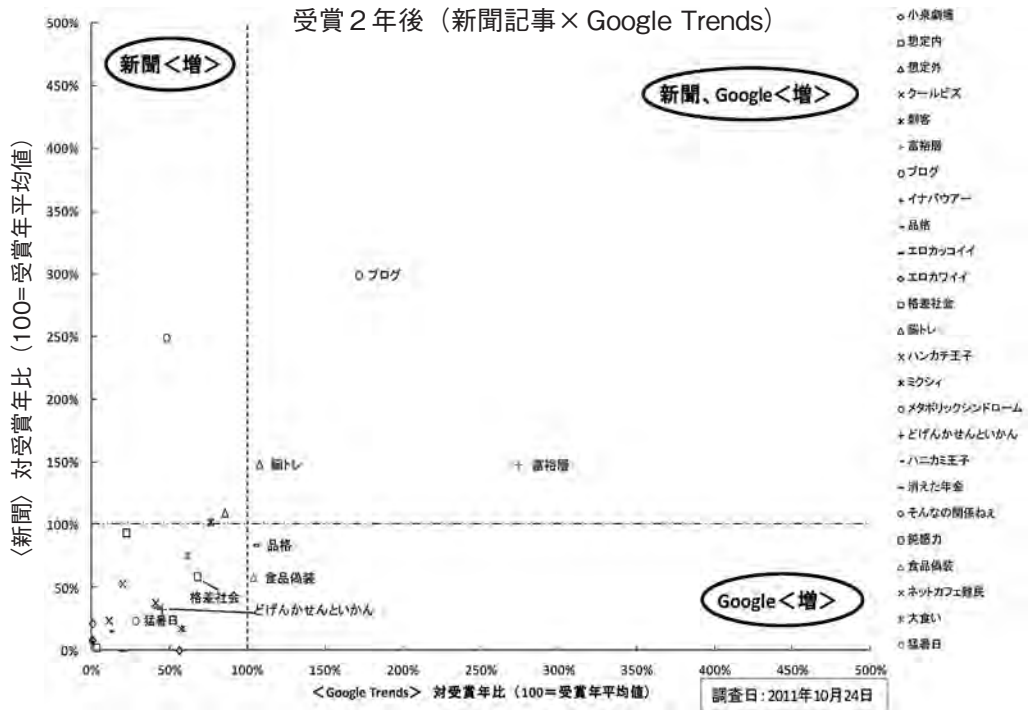


図 6-4 受賞2年後散布図（新聞記事と Google Trends）

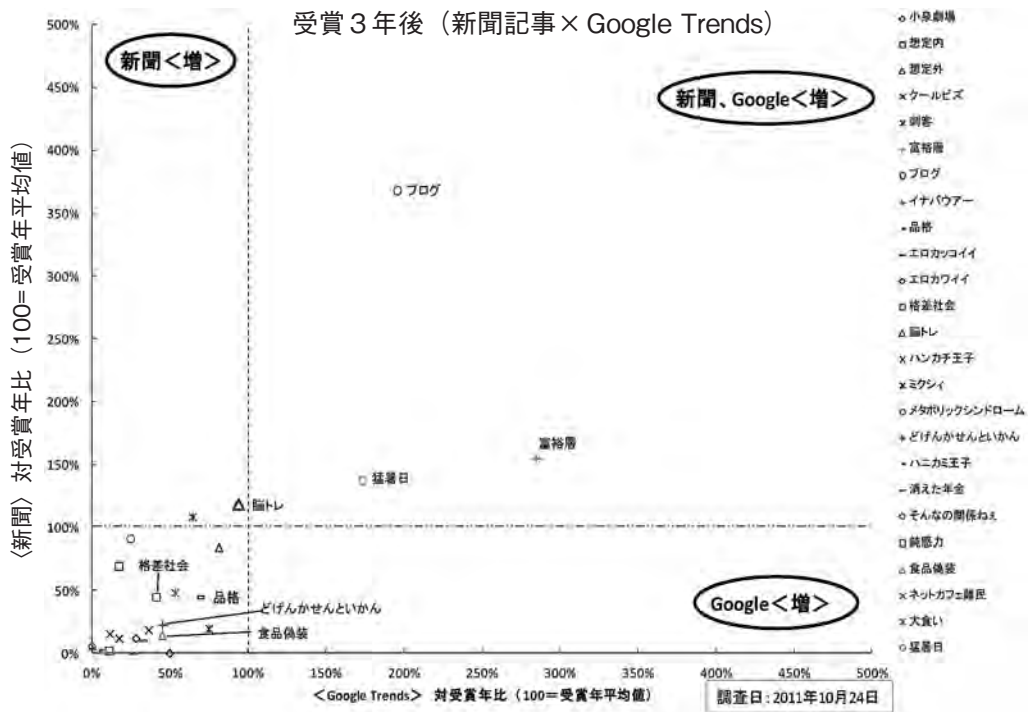


図 6-5 受賞3年後散布図（新聞記事と Google Trends）

図6-3から図6-5までの散布図は、受賞年以降の各年における調査対象語の使用数を表している。縦軸が新聞記事の使用数であり、横軸がGoogle Trendsで調査したGoogleでの検索指数である。縦軸横軸ともに、受賞年の使用件数と検索数の平均値を100%としている。散布図内の100%の値の部分に破線をひいた。散布図左上の区画にマーカーがあれば、新聞記事における使用数が受賞年に比べて増加した事を表す。同じく散布図右下の区画にマーカーがあれば、Googleでの検索が増加した事を表す。散布図右上の区画にマーカーがあれば、新聞記事とGoogleの双方で使用数と検索が増加した事を表し、左下の区画にマーカーがあれば、新聞記事とGoogleの双方で使用数と検索が減少したことを表す。調査語のラベルが付いたマーカーは、受賞年から受賞1年後にかけて使用数と検索が増加した語である。

新聞記事とGoogleの双方で使用数と検索が増加した語について記す。使用数受賞1年後に受賞年の値を超えた語は7語であった。受賞2年後に受賞年の値を超えた語は「ブログ」「富裕層」「脳トレ」の3語であった。受賞3年後に受賞年の値を超えた語は「ブログ」「富裕層」「猛暑日」の3語であった。「ブログ」と「富裕層」は新聞記事とGoogleの双方で使用数と検索が増加し続けた。「猛暑日」は受賞2年までは新聞記事とGoogleの双方で受賞年の値を超えなかったが、受賞3年後に受賞年の値を超えた。

図6-3から図6-5までの3つの散布図を比べると、受賞1年後から受賞3年後にかけてマーカーが散布図の左下方向に移動する傾向があった。つまり、新聞記事とGoogleの双方で使用数と検索が減少した。

6.3 考察

当調査により定着傾向にある語と衰退傾向にある語の特徴と、新語・流行語の半減期が認められた。

定着傾向にある語は、「代替語が存在しない語」と「行政により制定された語であり、使用の必要性のある語」という特徴があった。前者の例は「ブログ」「富裕層」であり、後者は「猛暑日」である。「ブログ」という物を表す語の代替となる語が存在しない場合、必然的に「ブログ」を使用することになる。「猛暑日」は、最高気温が35度を超えた際に用いる語として2007年4月に気象庁が制定した語である。最高気温が35度を超えた際には「猛暑日」を用いる必要性がある。

衰退傾向にある語は、「娯楽、スポーツ、政治に関する語」である。これらは、ある一時的な事象が発生したために、語が用いられたと考えられる。一時的な事象であるため、語が継続的に用いられることはないと考える。

調査対象語のうち、受賞年の値を受賞3年後まで維持できなかった語、つまり使用が減少した語の、受賞年に対する半減期は、概算で1年から2年であった。1年から2年で、人々の新語・流行語に関する新奇さや関心が薄れていくものとする。

7. おわりに

本研究に用いた調査法は「使用実態の経年調査が可能」「質問紙法や辞書記載調査の問題点を回避できる」「経済的かつ効率的な調査が可能」という利点がある。Google Trendsと新聞記事のデータは、実際に語が発行物に記されたり、インターネット検索の文字入力として使用されたりした結果のデータである。語を検索に掛けることで、語の経年での使用実態が判明する。質問紙法や辞書記載の有無による調査では得られ難い、語の経年での使用実態が本調査法により得られる。また、質問紙法や辞書記載調査では、調査経費や時間がかかる。本調査法では、パソコンを用いてインターネット検索を行うだけで調査が行え、質問紙法や辞書記載調査と比べて調査経費や時間を節約できる。

本調査法の課題として「サイトの仕様変更や閉鎖」がある。Google Trendsや新聞記事データベースの仕様が変わった場合、調査期間の指定やデータのダウンロードができなくなる恐れがある。また、サイトが閉鎖されれば本調査法は行えなくなる危険性がある。

今後の研究の課題は、各調査語の使用の盛衰原因についての分析である。社会的事象の発生や変化、人々の興味関心の変化、ある事物について新たに発生した新語の影響、音韻的要因など、複合的に語の使用の盛衰について分析を行う。

<付記>

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」の共同研究発表会（2013年6月23日）において行った口頭発表「新語・流行語の使用の経年変化—新聞記事とインターネット検索における使用実態から—」をもとに作成したものである。ご指導を賜った諸先生方や、ご意見を賜った方々に深く御礼申し上げます。

参考資料

「朝日新聞記事検索サービス 聞蔵Ⅱビジュアル」

<http://database.asahi.com/library2/main/start.php>（2013年12月24日最終アクセス）

「Google Trends」<http://www.google.com/trends/?hl=ja>（2013年12月24日最終アクセス）

「毎索」

<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?uji.verb=GSHWA0190&serviceid=WMNP>

（2013年12月24日最終アクセス）

「ヨミダス文書館」<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>（2013年12月24日最終アクセス）

『現代用語の基礎知識 2005』（2005）自由国民社

『現代用語の基礎知識 2006』（2006）自由国民社

『現代用語の基礎知識 2007』（2007）自由国民社

参考文献

石井正彦・小沼悦（1997）「流行語と語彙」『国文学解釈と教材の研究』第42巻14号、學燈社、pp73-78

糸井通浩（1997）「流行語の修辞・造語法（生成過程）」『国文学解釈と教材の研究』第42巻14号、學燈社、pp.84-

- 伊藤菊子 (1975a) 「昭和の流行語の盛衰 (上)」『言語生活』282号, 筑摩書房, pp.70-76
- (1975b) 「昭和の流行語の盛衰 (下)」『言語生活』283号, 筑摩書房, pp.72-79
- 井上史雄 (2008) 『社会方言学論考－新方言の基盤－』明治書院
- (2012) 「日本語世界進出のグーグル言語地理学—グーグルインサイトにみる外行語総合分布—」『明海日本語17』明海大学日本語学会, pp.29-42
- (2013) 「日本語の国際進出—グーグルインサイトにみる外行語のトレンド—」『明海大学外国語学部論集』25, pp.1-15
- 木下幸男 (2006) 『「流行語大賞」を読み解く』日本放送出版協会
- 篠崎晃一 (1997) 「流行語の発生と伝播」『国文学解釈と教材の研究』第42巻14号, 學燈社, pp.52-56
- 寺川みち子・浅井里美 (2001) 「流行語—何が残り, 何がなくなったか—」『東海学園国語国文』第59号, 東海学園女子短期大学国語国文学会, pp.14-30
- 夏井邦男ほか (1997a) 「若年層における世相語・流行語の理解の実態 (1)」『教育情報科学』第25号, 北海道教育大学, pp.11-20
- 夏井邦男ほか (1997b) 「若年層における世相語・流行語の理解の実態 (二)」『函館国語』第13号, 北海道教育大学, pp.30-39
- 林 大 監修 (1982) 『図説日本語 グラフで見ることばの姿』角川書店, pp.159-168
- 水原明人 (1997) 「消えた言葉・消えない言葉」『国文学解釈と教材の研究』第42巻14号, 學燈社, pp.57-61
- 御園生保子 (1989) 「大学生の流行語意識」『東京農工大学一般教育部紀要』第26号, 東京農工大学一般教育部, pp.213-220
- 米川明彦 (1989) 『新語と流行語』南雲堂

〈論 文〉

公共施設の言語使用実態と考察

—東京23区を中心に—

張 海 燕

キーワード：首都圏，多言語化，外国人，公共機関

1. はじめに

グローバル化にともない文化行動，経済行動が全世界で活発になってきた。日本でも世界各地からきた外国人がますます増えてきている。日本は今後，今以上に多言語社会になっていくと思われる。そのため，いろいろな，社会の変化が必要だが，公共機関の多言語表示は非常に重要なキーワードになる。また日本社会で必要な情報をどのように得るかということも考える必要がある。2011年3月11日に東日本大震災が起きたとき外国人が震災の情報，生活の情報などをどのように得たかという問題もある。また，多言語の放送はどのようになされるべきだろうか。今後，多くの外国人が日本に来て生活するにあたって，不安がなくなるように安全に関しても十分な多言語の表示，標識も非常に重要である。

在日外国人にとって日常生活に密接に関わっている諸機関の言語使用実態はどうなっているのだろうか。本稿の目的は東京都の23区の各区役所と5つの主要な駅構内の言語使用の実態に注目し，現在の多言語表示の状況を明らかにし，問題点を指摘することにある。

2. 先行研究

言語景観に関する研究として，さまざまな角度から研究がなされている。言語景観の先駆的な研究は正井（1969）が新宿の看板について調査を行った。正井は新宿にローマ字の看板が多く見られると述べている。時代が進むにつれ，ますます言語表示の多様化も進んだ。田中・上倉・秋山・須藤（2007）はデパートの多言語化について調査し，地域によって用いられる言語の違いについて述べている。

一方，日常生活に密接に関わっている研究の例として，劉・大橋・岸江（2012）は中国・青島市における交通機関の言語景観を調査し，多言語化の進む状況はグローバル化と一体化した現象だと述べている。田中・秋山・上倉（2007）は，ネット上の言語状況について調査し，現実空間の言語景観もネット空間も同様であることが確認されたと述べている。

また，山下（2010）は，外国人集住都市の言語景観について調査し，地域の在日外国人人口が地

域全体の5%を超えると景観表記に影響を与えると述べている。

3. 研究方法

3.1 研究対象

地域に進む住民にとって区役所や交通機関は生活に欠かせないものである。そのため、在日外国人にも日常生活に密接に関わる23区の各区役所、交通機関の多言語化がどのように進んでいるのかを研究対象とした。また東京駅、新宿駅、池袋駅、上野駅、渋谷駅の5つの駅の多言語化を研究対象とする。

23区の区役所を取り上げたのは区役所については日本人だけではなく、外国人、留学生にとっても日常生活に関わる重要な公共機関だからである。23区にいる在住の外国人数は以下のとおりである。外国人在住者の数に応じた多言語化の対応が必要である。

平成25年東京都総務局の総人口が多い順に国籍をあげると中国(161,169)、韓国・朝鮮(99,880)、フィリピン(27,929)、米国(15,901)、ネパール(8,669)、インド(8,313)、タイ(6,906)、英国(5,522)、ミャンマー(4,781)、ベトナム(4,669)である。中国人は外国人総人口の41.2%を占める。韓国・朝鮮人は外国人総人口の25.6%を占める。英語系の外国人は総人口の14.7%を占める。その他の外国人人数は外国人総人口の18.5%を占める。

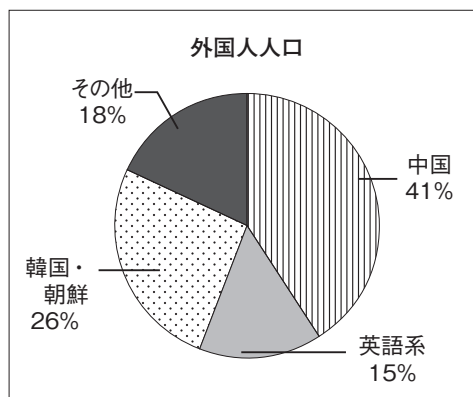


図1 外国人人口

東京駅、新宿駅、池袋駅、上野駅、渋谷駅の5つの駅の多言語化を研究対象とする。東京は日本の首都であり、多言語化の実態を明らかにすることは意義がある。東京駅をはじめ、新宿駅、池袋駅、上野駅、渋谷駅の4つの駅はすべて、山手線に沿って存在すること、池袋、新宿、渋谷は山の手3大副都心であるためである。2012年度の1日の利用者数の平均値によると上位から新宿駅、池袋駅、渋谷駅の順である。また、上野は有名な博物館、美術館、動物園がある。在住の外国人が多く利用する。多言語の充実が必要である。そのため、これらの5つの駅を研究対象として取り上げることとした。

3.2 調査方法

3.2.1 区役所

調査は23区の各区役所は面接方式で行った。しかし、時間的に窓口が忙しかったり、窓口で対応してもらえない場合はメールで質問書を送付し、回答をしてもらうという方法をとった。調査を依頼したのは23区の外国人の利用者数が多い窓口（文化生涯課、交流促進課、広報課、外国人相談窓口、区政相談課、総務部総務課、文化観光課、文化国際課、多文化共生推進課、国際都市・多文化共生課、地域振興課などの窓口）である。

交通機関については5つの駅へ筆者が出かけて行って交通表示の写真を撮り、それらを文字化して、言語種を調べた。

3.2.2 調査期間

23区の各区役所は2013年6月から8月まで調査した。交通機関は2013年1月から2月までの間に調査を行った。

3.2.3 公共機関の定義

本稿で扱う地域は東京23区である。ここでいう東京23区の公共機関は地方自治法で定められた東京23区およびその出先機関、区立と名のつく全ての機関を指す。そして、公立の施設としては市立、町立、村立、公立と名のつく全ての機関であるが、ここでは公共機関を区役所と駅構内に絞った。ほかにも公共機関に含まれる国会、裁判所、消防・警察組織、公的医療機関などがあるが、これらの機関の調査については今回行わず、次の機会にする。

4. 23区の各区役所の調査結果

以下、調査票の質問項目の順に従って述べることにする。

項目はパンフレット、通訳、トイレ、フロアマップ、ホームページであった。

「1. 窓口に関カ語のパンフレットを用意していますか。言語別にあるものに○印をつけてください。」と聞いたところ回答の結果は表1のようになった。

4.1 パンフレット

表1 パンフレット

順位	言語数	言語名	区 名
1	4	日英 中(簡) 韓	江戸川区、足立区、中央区、新宿区、台東区、世田谷区、千代田区、渋谷区、文京区、豊島区、港区、墨田区、江東区、目黒区、品川区、板橋区、練馬区、大田区、北区、杉並区、荒川区、葛飾区
2	1	日	中野区



図2 パンフレット

4.2 通訳

「2. 通訳はいますか。いる場合は言語別にあるものに○印をつけてください。」と聞いたところ回答は表2のようになった。

表2 通訳

順位	言語数	言語名	区 名
1	10	英, 中, 韓, 独, 仏, 西, ポ, ミャンマー, タイ, イタリア	豊島区
2	6	英, 中, 韓, 西, タイ, タガログ語	荒川区
3	4	英, 中, 韓, タガログ語	目黒区
4	3	英, 中, 韓	墨田区, 新宿区, 世田谷区, 練馬区, 杉並区, 足立区
5	2	英, 中	港区, 千代田区, 文京区, 江東区, 板橋区, 大田区
6	1	英	中央区, 台東区, 渋谷区
6	1	中	北区

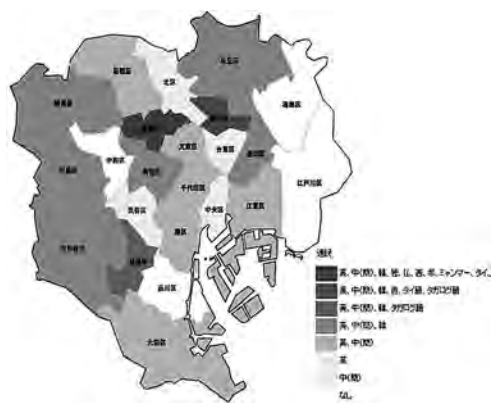


図3 通訳

4.3 トイレ

トイレについて「3. 区役所構内のトイレに何ヵ語で表示をしていますか。言語別にあるものに○印をつけてください。」と聞いたところ回答は表3のようになった。

表3 トイレの多言語表示

順位	言語数	言語名	区 名
1	4	日, 英, 中 (簡), 韓	江戸川区, 足立区
2	2	日, 英	中央区, 新宿区, 台東区, 世田谷区, 千代田区, 渋谷区, 文京区, 豊島区
3	1	日	港区, 墨田区, 江東区, 目黒区, 品川区, 板橋区, 練馬区, 大田区, 北区, 杉並区, 中野区, 荒川区, 葛飾区



図4 トイレの多言語表示

4.4 フロアマップ

「4. 区役所のフロアマップは何カ語で表示していますか。言語別にあるものに○印をつけてください。」と聞いたところで回答は表4のようになった。

表4 フロアマップ

順位	言語数	言語名	区名
1	4	日、英、中（簡）、韓	新宿区、板橋区、荒川区
2	3	日、英、中（簡）	豊島区
3	2	日、英	港区、足立区、世田谷区、千代田区、渋谷区、目黒区、大田区、江戸川区、葛飾区、杉並区
3	2	英、中（簡）	北区
4	1	日	中央区、墨田区、台東区、文京区、江東区、品川区、中野区、練馬区



図5 フロアマップ

4.5 ホームページ

「ホームページ(調査項目8)」については、筆者が独自にインターネットを通じて調べた。全ての区がホームページを開設している。

ホームページの多言語表示に関しては23区の各区役所全てが日本語、英語、中国語(簡)、韓国語の4言語の自動翻訳システムがある。そして、文京区と品川区は、中国語の簡体字と繁体字両方の翻訳システムがある。

表5 ホームページ

順位	言語数	言語名	区 名
1	5	日, 英, 中(簡・繁), 韓	文京区, 品川区
2	4	日, 英, 中(簡), 韓	江戸川区, 足立区, 中央区, 新宿区, 台東区, 世田谷区, 千代田区, 渋谷区, 目黒区, 板橋区, 北区, 杉並区, 荒川区, 葛飾区, 中野区, 大田区, 練馬区, 豊島区, 江東区, 墨田区, 港区



図6 ホームページ

以下ではパンフレット、通訳、トイレ、フロアマップについて簡単にまとめる。

パンフレットについては東京都23区の全区役所の言語使用実態の調査結果によると、窓口では中野区は日本語のパンフレットしか用意されていないことが明らかになった。ほかの22の区役所の窓口では日本語、英語、中国語(簡)、韓国語の4言語のパンフレットが用意されていた。

ほかの19区役所には通訳がいる。豊島区の10言語をはじめ、6言語そろっている区は荒川区などであった。区によっては多言語の通訳を配置している区もある。一方で、英語のみ、中国語のみの区も見られた。

トイレはだれもがすぐわかる表示が必要となる。ところが実態は1言語表示が多く13区で対訳がない形となっている。

フロアマップは、「2言語の日本語と英語、もしくは日本語のみ」の区が大半を占めている。そうした中で新宿区、板橋区、荒川区は4言語で表示されている。他の区と比べて充実していると言える。

ホームページは多言語表示に関しては23区の各区役所が全て日本語、英語、中国語(簡)、韓国語の4言語の自動翻訳システムがあった。そして、文京区と品川区は中国語の簡体字と繁体字両方の翻訳システムがあった。

4.6 都内区役所の言語使用実態についての考察

4.6.1 区のスローガンとの関連における考察

23区の各区の多言語対応の状況は一樣とは言えないことが明らかになった。その原因の一つとして考えられるのは各区のスローガンとの関係である。各区のスローガンは異なっている。スローガンとは企業や団体の理念を表す。23区のスローガンをみると主に3種類のスローガンに分類される。一つは国際都市であることをアピールするスローガンである。二つ目は歴史と文化を中心に掲げたものである。三つ目は魅力あふれる街に住み続けたいという内容のスローガンである。

例えば、港区のスローガンは「やすらぎある世界都心・MINATO—誰もが誇りに思える街・港区—」などである。大田区のスローガンは「地域力が区民の暮らしを支え、未来へ躍動する国際都市おおた」である。これらのスローガンから港区と大田区の2つの区が国際都市を目指していることがわかり、多言語表示についても当然努力しているものと考えられる。しかし、言語使用実態の結果と照合すると、かならずしもスローガンの精神が反映されていないことがわかった。大田区と港区は国際都市であるスローガンであるが、ほとんど日本語と英語の2言語で表示されるパターンである。

文化と歴史をスローガンに掲げている区は千代田区、文京区、墨田区、江東区、渋谷区、新宿区、豊島区、杉並区、板橋区、江戸川区である。中央区、台東区、品川区、目黒区、世田谷区、中野区、北区、荒川区、練馬区、足立区、葛飾区は環境を重点にしている区である。スローガンの面からみると文化と歴史を中心にしてしている区のほうがむしろ多言語対応は進んでいた。一方、住民が住みやすい、道路などの環境づくりを重視している区は多言語対応が遅れているように思われる。たとえば、中野区、北区などがそれにあたる。スローガンから見た場合、大田区や港区においては「国際都市」としての対応が特に望まれる。

4.6.2 外国人の在住人口との関連における考察

平成25年国勢調査（総務省統計局）都道府県・市区町別主要統計表によると23区に在住の外国人口と日本人人口は以下のとおりである。上位10位まで取り上げることにする。

表6 23区の外国人人口の実数

順位	区域	人口総数	日本人数	外国人数（比率）
1	新宿区	321,172	287,598	33,574（10.4％）
2	江戸川区	675,325	652,210	23,115（3.4％）
3	足立区	669,143	646,861	22,282（3.3％）
4	江東区	480,271	459,382	20,889（4.3％）
5	豊島区	268,959	249,894	19,065（7.1％）
6	港区	231,538	212,685	18,853（8.1％）
7	大田区	696,734	678,534	18,200（2.6％）
8	板橋区	537,375	521,141	16,234（3.0％）
9	荒川区	206,457	191,144	15,313（7.4％）
10	世田谷区	860,749	845,922	14,827（1.7％）

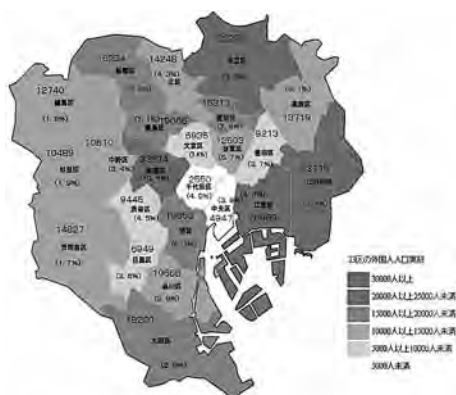


図7 23区の外国人人口の実数

23区の外国人人口の実数からみると、全体的には、人口数の多少より、外国人人口が占める割合が高い方が多言語化が進んでいることが明らかになった。外国人人口の総人口に占める比率の高い区は多言語が比較的に進んでいる。しかし、中に例外もあって、江東区、大田区の外国人人口数が多いが多言語化は進んでいると言えない。

4.6.3. 公共機関の数との関連における考察

東京23区にある学校、病院、公園、観光・レジャー（水族館、博物館、美術館、植物館、昆虫館、資料館などを含む）、消防署、郵便局、警察署の公共機関の数は以下の表7のとおりである。

表7 東京23区にある公共機関

番号	23区	学校	病院	公園	観光 レジャー	消防署	郵便局	警察署	合計
1	千代田区	448	4	30	396	15	50	6	949
2	港区	217	6	85	493	11	53	5	870
3	世田谷区	420	10	92	26	14	79	4	645
4	新宿区	388	10	28	112	10	55	5	608
5	文京区	312	6	28	124	6	34	5	515
6	練馬区	239	7	154	28	11	62	3	504
7	渋谷区	291	7	23	115	6	37	4	483
8	中央区	55	2	28	326	9	48	4	472
9	足立区	190	17	70	89	12	67	4	449
10	大田区	216	16	69	38	18	72	5	434
11	江東区	116	10	106	91	12	42	4	381
12	江戸川区	158	10	118	13	10	56	3	368
13	杉並区	210	7	68	14	12	52	3	366
14	台東区	85	2	17	206	9	34	5	358
15	墨田区	77	8	104	132	7	26	3	357
16	品川区	195	4	49	41	11	43	5	348
17	板橋区	183	14	40	29	10	48	3	327
18	豊島区	192	8	26	51	7	35	3	322
19	目黒区	157	8	70	35	5	24	3	302
20	北区	119	7	32	26	11	42	4	241
21	葛飾区	111	8	40	23	9	45	3	239
22	中野区	123	7	17	9	8	30	2	196
23	荒川区	87	5	14	52	8	20	3	189

以上の表によると、公共機関の数が多い区は多言語表示が比較的に進んでいるという傾向は見える。中野区が多言語化は比較的に遅れているが、その原因は中野区にある公共機関の数が少ないということも一因と考えられる。副都心に近い住まい町して中野区は発展してきた。しかし、公共機関は充実しているとはいいがたい。

4.6.4 観光との関連における考察

外国人観光客が訪れることによって多言語表示も増えると考えられる。つまり、外国人観光客が訪れる地域が多言語表示が増えて、在日外国人住民にとっても住みやすい環境になると考えられる。「東京・ミュージアムぐるっとパス 2013」を例に施設めぐりについて考察する。「東京・ミュージアムぐるっとパス 2013」は東京都歴史文化財団から助成を受けてパスに綴られている、東京都内 77 の美術館・博物館・動物園・水族園・植物園など、各施設指定の展示を 1 回ずつ利用できるチケットである。そのパスの使える施設があるのは 16 の区である。パスが使える施設がない区は品川区、板橋区、大田区、葛飾区、杉並区、中野区、荒川区の 7 つの区である。

地域の多言語化は観光の視点からみると直接ではないにせよ、観光客の確保にかかわっていると言える。多言語表示は外国人が行く場所が増えて、しかも大勢の外国人が来ればその必要性が高まり、相互作用が起こる。逆に観光客が少なければ多言語表示の必要性が低下する。つまり、単言語化するのである。中野区が多言語化が遅れている原因の一つは地域に外国人観光客が訪れる施設がないことも一因として考えられる。

4.7 交通機関の言語使用実態

日本国内では、非日本語母語話者の短期在住者や留学生の人口が増加していく一方である。これらの外国人は、毎日仕事や、学校へ行くため徒歩や自転車通勤の人もいて、交通手段を利用している人もいる。交通機関という限定された空間で、人々に必要不可欠な情報を与えることは非常に重要である。以下は、東京都の代表駅とも言える東京駅と、山手線内の新宿駅、上野駅、渋谷駅、池袋駅の合計 5 つの駅を選んで言語使用実態を調べ考察した。

5 つの駅での調査結果によると、路線案内表示は東京駅の場合、新幹線と地下鉄は、日本語、英語、中国語、韓国語の 4 言語で表示されているが、ほかの路線案内表示はすべて日本語と英語のみの表示であった。

改札口案内表示は池袋駅だけは日本と英語で表示されているが、ほかの 4 つの駅の改札口案内表示はすべて、日本語、英語、中国語、韓国語の 4 言語で表示されている。

駅構内の注意書きはすべて日本語でのみ表示されている。

トイレの多言語表示については東京駅、池袋駅の 2 駅は日本語と英語で表示されている。上野駅、渋谷駅、新宿駅の 3 駅はすべて、日本語、英語、中国語、韓国語の 4 言語で表示されている。

禁煙マークの表示は、池袋駅を除き、日本語、英語、中国語、韓国語の 4 言語で表示されている。池袋駅と上野駅のトイレに貼られた禁煙マークは日本語と英語で表示されている。

自動販売機の使用方法は日本語のみで表示されている。以下、項目ごとの言語表示を表8で示す。

表8 駅構内の多言語表示

項目 駅名	路線表示 (新幹線)	路線表示 (在来線)	路線表示 (地下鉄)	出口案内 表示	切符 売り場	注意 書き	トイレ	禁煙表示	自動 販売機
東京	日英中韓	日英	日英	日英 中韓	日英	日	日英	日英中韓（ト イレ内）日英 （構内）	日
新宿		日英	日英	日英 中韓	日英	日	日英	日英中韓	日
上野		日英	日英	日英 中韓	日英	日	日英中韓	日英中韓（構 内）日英（ト イレ）	日
渋谷		日英	日英	日英中韓	日英	日	日英中韓（ト イレ案内）日 英（トイレ内）	日英中韓	日
池袋		日英	日英	日英	日英 中韓	日	日英	日英	日

4.8 交通機関の言語使用実態の考察

日本で人がよく利用する交通手段は鉄道である。そのため、鉄道駅の案内板、切符売り場の利用方法、トイレの案内などに、多言語表示の必要性が高いと思われる。

今回の調査結果は、予想通り多言語化が進んでいた。特に首都東京の玄関口である東京駅は最も進んでいた。多くの案内表示は日本語、英語、中国語、韓国語の4言語で表示されていて鉄道を利用する客への配慮は認められるが、注意書きなどに単語のみの表示もあることから改善の余地は十分ある。

4.8.1 各駅の利用者数と商店数の関連における考察

表9 各駅の乗降客数（1日当たり）

順位	駅名	定期外	定期	合計
1	新宿	346,974	395,859	742,833
2	池袋	229,005	321,700	550,756
3	渋谷	194,407	217,602	412,009
4	東京	189,621	212,655	402,277
5	上野	96,155	87,455	183,611

2012年のJR東日本による各駅の乗車客数のデータは表9のとおりである。

定期外とは、不定期に来る買い物客である。定期の人は、学生をはじめサラリーマンなど仕事のために毎日出勤する人々などである。

表9の1日の乗車人員は、日本人と外国人のすべてが含まれるが、外国人がどのぐらい占めるのか明らかではない。

駅周辺の大規模店舗数を参考にしたサイトはYAHOO!JAPAN ロコ (<http://loco.yahoo.co.jp/>) である。表10は、百貨店、ショッピングセンター、デパートなどの大規模店舗数を示す。駅構内の多言語表示は、駅の周辺にある大規模店舗数との関

表10 駅周辺の大規模店舗数

順位	駅名	大規模店舗数
1	新宿	14
2	渋谷	10
3	池袋	6
4	東京	6
5	上野	1

連性があると考えられる。新宿駅、渋谷駅の周りに大規模店舗が多いので買い物客も多く来ると思われる。そのため、多言語が充実すると買い物客の外国人が利用しやすくなる。

表9と表10の順位は同じである。つまり、乗降客及び大規模店舗の数と多言語化は比例している。

5. 結論

- ① スローガンの理念は、各区の多言語化に影響を与える。
- ② 外国人人口が占める割合は、多言語化に比例している。
- ③ 公共機関の数が多ければ、多言語化も進む。逆に少なければ、多言語化も遅れる。
- ④ 地域の多言語化は観光客の数に比例している。観光客がよく行く場所は多言語表示が進んでいる。逆に観光客が少なければ、多言語表示は遅れている。
- ⑤ 交通機関乗降客数と駅の周辺にある大規模店舗数は多言語化に比例している。

6. おわりに

2020年に東京オリンピックを開くことで、東京都内の言語景観もどんどん変わっていくだろう。首都圏における公共機関の言語使用実態では、地域によって明らかな差異が出た。今後、この結果を踏まえて、大阪などの大都市の役所と交通機関の言語景観を調べ、比較していきたいと考えている。

謝 辞

本稿の執筆の際には、貴重なご指摘とご教示を賜った山下曉美先生、助言いただいた柳澤好昭先生、佐々木文彦先生に心から感謝を申し上げます。

参考文献

- 井上史雄 (2000)『日本語の値段』大修館書店
- (2001)『日本語は生き残れるか—経済言語学の視点から—』PHP新書
- 河原俊昭 (2004)『自治体の言語サービス・多言語社会への扉をひらく』春風社
- 田中ゆかり・秋山智美・上倉牧子 (2007)「ネット上の“言語景観”—東京圏のデパート・自治体・観光サイトから—」『言語』大修館書店, pp.74-83
- 田中ゆかり・秋山智美・上倉牧子・須藤央 (2007.9)「東京圏の言語的多様性—東京圏デパート言語景観調査から—」『社会言語科学』pp.5-17
- 江 源 (2008)『言語景観から見る日本の多言語化状況』明海大学大学院応用言語学研究科修士学位論文
- (2009a)「言語景観の成因に関する社会言語学的考察—東京と上海の比較研究を通じて—」2009年上海外国語大学日本学研究国際フォーラム
- (2009b)「言語景観研究の現状について」『明海日本語 第14号』明海大学日本語学会
- 本間勇介 (2010)『エスニック地域における言語景観』明海大学大学院応用言語学研究科修士学位論文
- 井上史雄 (2009)「経済言語学からみた言語景観—過去と現在」『日本の言語景観』三元社, pp.53-78
- 金 美善 (2009)「言語景観における移民言語のあらわれかた—コリアンコミュニティの言語変容を事例に—」『日本の言語景観』三元社, pp.187-205
- 庄司博史 (2009)「多言語化と言語景観—言語景観からなにがみえるか—」『日本の言語景観』三元社, pp.17-45

- ベット・バックハウス (2009)「日本の言語景観の行政的背景—東京を事例として—」『日本の言語景観』三元社, pp.145-170
- 山下暁美 (2010)「外国人集在都市の言語景観—言語表示サービスの現状—」『明海大学外国語学部論集』第22集, pp.17-34
- ロング・ダニエル (2010)「奄美ことばの言語景観」『東アジア内海的环境と文化』桂書房, pp.174-200
- 金 順任 (2011)「日本語と韓国語の言語景観における禁止表現」『明海日本語 第16号』pp.53-62
- 本間勇介 (2011)「コリアンタウンの多文字化・多言語化状況」『明海日本語 第16号』pp.63-69
- 江 源 (2011)「言語景観に関する計量的研究」『明海日本語 第16号』pp.71-80
- 米麗英・岸江信介 (2012)「2010年上海における言語景観について」『言語文化研究』pp.165-181

〈論 文〉

日本語類義語の教授法研究

— 『基礎日本語辞典』の動詞を事例として—

岩 佐 靖 夫

キーワード：類義語，語源的慣用，同一索性，派生語，教室語義

1. はじめに

森田良行著『基礎日本語辞典』（角川書店）¹には見出し語²で総数619の単語³が掲載されている。このうち172語の語が動詞⁴であり，その中で101の動詞⁵に本文内で『関連語』の項目が立てられている。『関連語』には類義語，対義語，見出し語に関連する態の単語が掲載され，説明が加えられている。本稿ではこのうち繰り返し使用されることが多く，日本語学習者や日本人の日本語教授法学習者にその語の相違や区分の理解が必要となる類義語について，系統的な指導原理に向けての素案を提出する。

日本語を日本語非母語話者に教えたことがある人は経験的に認識していることであるが，日本語の指導は「あく」「ひらく」，「冷たい」「寒い」，「きつと」「恐らく」⁶などのような類義語の指導が現場で最も困難を生じやすい。学習者の理解状況の差異はあるものの発音，表記，文型の指導は定型化した指導を行うことが可能であり，そのため誰が教えても指導の要諦をつかみやすい。しかしながら，語彙指導，特に類義語の指導においては形式を持った指導はできないため，学習者が紛らわしく分かりにくいと思う類義語の相違は，スムーズな定着に繋がられない場合が多い。現実問題として類義語の使い分けをどう指導するかという問題は，前提として語の意味分析を含まざるを得ない事情を有するため，個人の教員が辞書の記述や類義語についての先行研究を比較・考察し，その中から個別的・断片的に検討の結果，個々のケース毎に答えを出していくことが指導の基本的な対処法であったと言える。本稿ではそうした状況を鑑みつつ，日本語教育における類義語指導についての一提言を行いたい。

2. 『基礎日本語辞典』の語義記述

『基礎日本語辞典』の著者・森田によると，日本語の語義記述に興味を持ったのは現代語の文法研究に端を発しており，自身の研究軌跡を描いた背景に，過去二十年にわたる各種国語辞典の執筆協力者として語義記述を手掛けてきた経験と，外国人に対する日本語教育者としていやというほど語義説明や用法説明のむずかしさを身にしみて感じてきた生活にほかならなかったという趣旨の

記述が見られる⁷。『基礎日本語辞典』の語義記述は、初めに当該する語の語義記述があり、続けて『分析』の項目⁸に語義記述と関連する語が示され、それらの語を含む例文や慣用表現が提示されている。紛らわしい語義や類義語の説明には絵や図表が挿入されている場合が多い。ここで本稿の内容の中心となり、前記二点目の語や類義語を日本語非母語話者にどう教えるかという点で『基礎日本語辞典』に掲載の三語（「す（済）む」「ながめる」「なまじ」⁹）の『分析項目』の語義記述を見てみたい。

分析1

- 「すむ」 「済む」は「澄む」から転じた語。「濁る／澄む」で、不純な状態であったものが、混じり気が失せ、透き通った清らかな状態に変わるのが「濁る→澄む」である。
- 「ながめる」 “長く見る”が語源で、古代語では、物思いにふけてぼんやりと一所を見詰める意味であった。現代語でも「見る」と違って、対象に心を奪われて見とれる気持ちで外や物をしばらく見続ける行為。
- 「なまじ」 「生強い」から派生した語である。「生強い」は、まだ十分な状態に達していない（つまり）生であるにもかかわらず、ある目的を実現するために、無理に自分自身に対し、あるいは他人に対して、それを強く推し進めること（つまり強いること）である。不十分な状態であるにもかかわらず強いて進めるところから、中途半端で不徹底な事態をまねくことになる。

『基礎日本語辞典』の語義記述中注目すべき語義記述は、「す（済）む」は「澄む」に通じ、「ながめる」は「長く見」、「なまじ」は「生強い」といった、一般的な国語辞典に見られがちな循環定義¹⁰によらない語義記述が見られることである。複数の例文を提示しても学習者が理解し得ない場合、「なまじ」は「生強い」から来たことを提示し、その後の記述にあるように不十分な状態を強いて進め、中途半端で不徹底な事態を生じることを説明すれば、学習者の語義理解が促進される。「す（済）む」、「ながめる」の語も同様のことが言える。

「なまじ」を「生強い」に、「ながめる」を「長く見」に分けるという語義の記述方法は、単語を元となる語に分け語源的慣用に弁別・区分した説明である。大野ら（1974）は、このように日本語の単語は親の語の意味の血筋を引き、その親の語もさらにさかのぼれば古い二つの親の語の結合として分析できることが多い¹¹ことを述べている。語源的慣用が現在の語法的慣用と一致しているという保証はないが、「なまじ」を「生強い」に、「ながめる」と「長く見」に分けるという語義記述は、ある語を更に基礎となる語（一層重要な基礎語）に分けることになる。したがって、こうした語義記述に基づいた類義語教授法は、初級から上級までの学習者の広い関心を引きやすくなる。更に語の合成の元となる語がわからなくとも、「す（済）む」が「澄む」に通じるといった出自が同一の語の提示でも学習者は類義語の整理をつけやすい。

学習者のニーズが多様化し脱教授法時代を迎えてが言われて久しくなり、現実の教授場面では教

員はクラス内の学習者のレベル差にどう対処して教えていくかが重要になる。この場面を前提にし、単語の語源的慣用や同一素性である語を重視した指導で、以降に類義語教授法の確立に結び付く系統的な指導原理への素案を提出したい。

3. 『基礎日本語辞典』の見出し語

『基礎日本語辞典』の見出し語の掲載上注目すべき点は、619の見出し語は全て日本語固有の和語で、漢語、外来語¹²、混種語の語種が見られないこと、また掲載されている和語は全てかなで掲載されている点¹³である。

見出し語がすべてかなで掲載されている点は、使用する外国人日本語学習者の便宜もはかつてのことであるが、「よ（読）む」、「み（見）る」、「てあし（手足）」等いわゆる日本語の基礎的な意味を示す和語は、そもそも漢字が日本に輸入された奈良時代以前から日本語として確立していた語であり、「読」、「見」、「手」、「足」などの漢字はこうした語に後から宛てがわれたものである。また現代語で同一の語形ではないが、「赤」と「明るい」、「押す」と「教える」、「二十歳」と「果てる」¹⁴などは、和語としては同一に近い語であったものが音韻交替を主とした音声変化現象を経て漢字が後から付けられたものであり、こうした語の歴史的な視点から類義語の指導法を検討することも重要である。

漢語や外来語、例えば「学生」、「手紙」、「コップ」、「テスト」なども当然のことながら基礎語になる。しかしながら、これらの語は和語としての概念の不足を補うためのことばとして日本語に借用され造語されたものであり¹⁵、先の「読む」、「見る」、「手足」の和語のような日本人の思想の根底を成している語の種類とすることはできない。「日本」¹⁶は元来「やまと」であり同様に「日本語」は「やまとことば」であるが、こうした例もこの事実を証明している。

以上のことから、学習者が疑問を感じ誤用を冒しやすく、またどの学習者にもほぼ共通して習得すべきである類義語は先ず和語であるといえる。「あく」と「ひらく」、「だく」と「いだく」などの語である。こうした語は日本語の語彙の中で使用率が最も高く、そのため延べ語になり、日本語の基礎を形作る重要な言葉になっているからである。こうした視点を前提に、次節で『基礎日本語辞典』内で学習者に習得が必要であると考えられる重要な類義語を選び抜きたい。

4. 『基礎日本語辞典』から検討する類義語

『基礎日本語辞典』で動詞見出し語として掲載され、続いて1節に記した分析項目の関連する語に別の語が記載されている箇所は全て101¹⁷ある。このうち、「あう」の関連する語で「わかるる」、「落ちる」の関連する語で「落とす」等、対義語や態の相違といった紛らわしい意味特徴を有さないと認められる語を除くと、類義語であると認められる箇所は55ある。

この55箇所の選出方法は、前節に記した語彙の中で使用率が極めて高く、そのため延べ語になっている確率が高いものに拠っている。「あがる」・「のぼる」、「いう」・「のべる」、「おおう」・「かくす」などである。しかしながら、この55箇所の中には「いそぐ」・「せく」、「とる」・「とれる」等が

存在し、前者は「せく」が「いそぐ」に比べ使用率が低く延べ語数の多くなり得ない語であること、後者は既述した通り「とれる」は「とる」の態変化であり（終止形から可能形に変化）、学習者に類義語としての差し迫った学習の必要性はないものであると考えられる。こうした箇所は11あり、以下にこの11箇所を除いた44箇所の個別の類義語を記載したい。初めの語が『基礎日本語辞典』内の見出し語で、[] の語がその関連語として提示されているものである。

あがる [のぼる]	すむ [くらす]	のぞく [とりのぞく]
あまる [のこる]	たす [くわえる]	のぞむ [ねがう]
いう [のべる, かたる, はなす]	たずねる [とう]	はしる [かける]
うく [うかぶ]	たのむ [たよる]	ひえる [さめる]
うらむ [にくむ]	たべる [くわえる]	ひく [ひっぱる]
おおう [かくす]	ためす [こころみる]	ふく [ぬぐう]
おこる [いかる, いきどおる]	ちがう [ことなる]	ふれる [さわる]
おどろく [びっくりする]	つかまえる [とらえる, とら	まじる [まじえる]
おもう [かんがえる]	われる, にぎる]	まわる [めぐる]
かく [えがく]	つかれる [くたびれる]	やける [もえる]
きまる [さだまる]	とどく [つく, 達する,	やぶる [やぶく]
きる [さく, たつ]	およぶ, いたる]	よごれる [けがれる]
こえる [こす, すぎる]	とまる [とどまる]	よぶ [まねく]
したがう [そう]	ながめる [みる]	わる [きる]
しらせる [つげる]	なく [なる, さけぶ, わめく]	
しる [わかる]	なくす [うしなう]	

上記44箇所の類義語について、2節までに記述した日本語類義語の有効な教授法¹⁸を確立するため、各語の語源や成り立ち、同一語源となる語を中心とした辞書内の具体的な記述を見てみたい。

5. 語の成り立ち・語源・同一語源の語からとらえた類義語

—『日本語語源広辞典』内の語義記述を事例として—

1節で少し触れたが、一般的な国語辞書の語義記述は基本的に類義語や対義語との違いの説明はされていず、特に類義語に関してはその相違を明確につかみ取ることでできない説明がされている場合が多い。柴田(2002)は国語辞典のあり方に触れ、「類義語辞典を一般国語辞典に」という主張を行っている¹⁹。柴田によれば、日本の伝統的な国語辞書は「節用集」など類義語辞典的なものであったが、語形を掲げるだけで語の意味説明や語義記述はなかった。

現代の辞書にもこの歴史的な流れは受け継がれ、国語辞典以外の類義語辞典といえは語句を意味によって分類したシソーラスが思い浮かぶが、シソーラスには通常の意味説明や語義記述はない。

柴田はそれに対し、語釈付きの類義語辞典を現行の一般国語辞典に代替することを提案している。

『基礎日本語辞典』の著者・森田良行は合計七種類の先行辞書を『基礎日本語辞典』作成時の参考としている²⁰。ここで類義語の語源や成り立ち、同一語源となる語を中心として考察するため、この七冊以外で2010年に出版された単一の現代語日本語語源辞典としては恐らく最多の収録語数²¹を持つシソーラスによらない増井金典著『日本語源広辞典』（ミネルヴァ書房）の語義記述から、上記44箇所の語についてその説明を見ることにしたい。最初に中心となる語源的な説明をまとめ、同一語源の語があれば提示し、説明の最後に有用と思われる意味説明を（……意）として括弧書きで示した。

- ・あがる 「上ぐ」の自動詞のアガル（位置、段階が一気に高い方へ移る意）
- ・あまる アマ（数多）。アマ・アメ（天）+動詞化のル
- ・いう イ（息）+（唇音の）プ
- ・うく ウク（浮く）。本来の二音節語。
- ・うらむ ウラ（心）+ム（相手に不満を持ち、相手の心をじっと見ている意）
- ・おおう オフ（覆・負う）+フ（継続）（背に負うようにかぶる、かぶせる意）
- ・おこる オコル（発る）（発生し、しだいに勢いが強くなる意）
- ・おどろく 1.（怖ズの転）怖ドロ+く 2.擬音「ドロ」の動詞化
- ・おもう 1.オモ（面）+フ（継続・反復・動詞化） 2.重+フ
- ・かく 搔く、ひっかく
- ・きまる キム（規則を定めたり、作る）の自動詞化（一般的な決断の意）
- ・きる キ（切断・分断）+ル（切り離して分ける意）
- ・こえる コ（方向、場所）+ユ（動詞化）の口語化
- ・したがう 1.下+ガフ（動詞にする接尾語） 2.下+支（ツカ）フ
- ・しらせる 1.シルシ（著し）の転（大言海説） 2.シル（占ル、領ル）の転（大野説）
- ・しる 上記「しらせる」と同
- ・すむ 澄む（人が建物の中で心が安定し、澄んだ状態にあることの意）
- ・たす タ（十分・満足）+ス（満ち足りるようにする、加える意）
- ・たずねる タドル、トフの約。
- ・たのむ タ（手）+ノム（祈る）（手を合わせて祈るから「願う」意）
- ・たべる タブ（賜ぶ・給ぶ）が下一段化した語
- ・ためす 撓め+す。タワメテ試みる（大言海説）
- ・ちがう タガウ（違う）の音変化。タ・チ（手法、手段）+カフ（交ふ）で手違いが語源
- ・つかまえる つかま（ツカム（束+む）の未然形）+える（他動詞語尾）
- ・つかれる ツ（津・唾・エネルギーの源）+カル（枯る）が下一段化した語
- ・とどく テ（手）+ツク（付・着）（手が目的物にやっと着く意）

- ・とまる 止マル（移動しないようにする意）
- ・ながめる 長+ムの下一段化した語（長い時間一つの物を見る意）
- ・なく 音（ネ・ナ）+く
- ・なくす ナク（無）+ス（するの略）。「亡くす」も同源
- ・のぞく ノ（除）+ソク（退去）
- ・のぞむ 「ゾ（距離を置いて対す）+ム（遠くから遥かに見る意）。「覗く」も同源
- ・はしる ハシ（肅・ひきしまる）+る（早く進む，勢いよく早く動くなどの意）
- ・ひえる 冷ユの下一段化した語
- ・ひく 本来の二音節語（手にとって引き寄せる意）
- ・ふく 1. 吹き払うの音変化 2. 払の音（フッ）を動詞とした語
- ・ふれる フル（触る）の下一段化した語（内部に至らず，表面に接触する意）
- ・まじる マズ（混・交）が上一段化した語（入り交じる。別の物が入る意）
- ・まわる ワ（目の回転）+ル
- ・やける ヤク（焼・焚・燃）の下一段化した語（物が焦げ，燃え広がる意）
- ・やぶる 大言海説で「ヤリコボツ」（裂いて駄目にする意）。「敗る」も同源
- ・よごれる ヨゴル（汚る）の下一段化した語（汚くなる意）
- ・よぶ 感動詞「ヨウ，ヨヤ」が変化した語（ヨウと相手に声をかける意味）
- ・わる ワ（破壊・分割）+ル（語尾）（こわす，うすめる，基準や相場が下がるなどの意）

以上が『日本語源広辞典』に掲載のある『基礎日本語辞典』内類義語44箇所の語源的な観点による説明である。

6. 語の成り立ち・語源・同一語源の語から考察した教室語義

語義記述の代表例は国語辞書の定義であるが，国語辞書の定義が必ずしも満足できるものでないことについては，従来多くの人が具体例をあげて指摘している²²。そして，この点は恐らく国語辞書に限らず，類義語辞典や語源辞典に関しても同様に指摘されるはずである。学習者に対する類義語の有効な教授法を考える場合，一冊の辞書の説明を参考または重視しないことは当然のこととして，辞書にある説明は決して無謬ではありえず，修正の可能性を含むものと認識されて然るべきであり，またそうする必要があると考えるべきであろう。例えば，学習者に「うれしい」は瞬間的で受動的，「楽しい」は持続的で能動的と定義すること²³は，ことばの意味記述，語義記述ではなく，五感によって認知できるようなわかりやすい説明，いわゆる教室語義の説明を与えていることになる。改めてこうした視点が学習者に対する類義語の教授法として有効である。

前節の『日本語語源広辞典』の語義記述を見ると，「かたる」は「形」が語源で「話す」は「放す」であるなど，こうした類義語の有効な教授法を示唆する部分が多数存在している。繰り返しになるが，外国人学習者にとって正しい語義記述即ち分かりやすい説明ということにはならず，教員

は学習者の日本語レベルに合わせた独自の説明を工夫しなければならない。そのため、あらかじめ語義説明の妥当性、有効性、限界などを確認しておく必要があるが、この視点から分類できる教室語義を以下に取りまとめたい。

教室語義

1. (ア) 事象の過程が結果よりも重視されると考えられる語
のぼる, うかぶ, こえる, すぎる, くわえる, たずねる
1. (イ) 事象の結果が過程よりも重視されると考えられる語
あがる, うく, こす, たつ, たす, とう
2. (ア) 目的語が明確性を持つと考えられる語
かたる, かんがえる, つかまえる
2. (イ) 目的語が曖昧性を持つと考えられる語
はなす, おもう, とらえる
3. (ア) 動作対象となる語に継続性があると考えられる語
のべす (かたる, はなす), いきどおる, わかる, さだまる, とどまる, ながめる, はし
る, ふれる, ぬぐう, もえる
3. (イ) 動作対象となる語に瞬間性があると考えられる語
いう, おこる (いかる), しる, きまる, とまる, みる, かける, さわる, ふく, やける
4. (ア) 動作対象に精神性が強いと考えられる語
たよる, ころもる, けがれる
4. (イ) 動作対象に実際の行動性が強いと考えられる語
たのむ, ためす, よごれる
5. (ア) 動作対象となる語の動作に全体性や大きい変化があると認められる語
たっする (およぶ), ことなる, くたびれる, さく (わる)
5. (イ) 動作対象となる語に動作に部分性や小さい変化があると認められる語
いたる, ちがう, つかれる, きる

2節最後にあげた「あく」、「ひらく」は上記5の分類に、「だく」、「いだく」は上記2の分類に相当すると考えられる²⁴。このような種類別の教室語義の設定は、学習者に対する紛らわしい類義語の定着のために有効であると考えられる。

さて、こうした教室語義の設定は、学習者に理解できる説明を与える点で、いわば予めふさわしい説明や定義を考えておかなければならない。『日本語源広辞典』を観察して注目すべき点は動詞の末尾の語形である。「あがる」、「のぼる」、「のこる」などの動詞の末尾が「る」の語は、推察されるように基本的に多く現代語の「ある」、「いる」に関連する存在の意味を表している。「浮かぶ」、「及ぶ」、「叫ぶ」など末尾が「ぶ」の動詞は行為・動作が一定にわたって継続する事象を表す。「かく

す」、「たす」、「なくす」などの末尾が「す」の動詞は現代語の「する」に通じ、対象となる行為・動作を多く主語となる本人が意志を持って行う旨を要約した記述がある。「抑える」、「支える」、「迎える」などの動詞の末尾「える」は「あえる」に通じ²⁵、前記の動詞末尾「る」が存在の意味を表すことに加え、語源的慣用からは現代語で「合（合）える、合（会）うことができる」と解釈されてほぼ差し支えない。「うく」、「かく」、「のぞく」、「ひく」などの動詞の末尾「く」は造語成分としては「ク（含）」²⁶が考えられ、助動詞の成分として考えた場合、確実な記憶に基づく自己の体験であるとする記述²⁷がある。

こうした動詞の共通する語形を考察すれば、例えば「やぶる」と「やぶく」の相違を指導しなければならない場合、「やぶく」を方言であると教え得ない時にも「やぶる」は動作が一定以上にわたって存在することが中心的な教室語義であり、「やぶく」少なくともはそうではないことが指導できる。これは前節で見た語の事例で「ひく」と「ひっぱる」、「たのむ」と「たよる」のような類義語の前成分の文字が共通し、末尾が変わる時に应用する必要がある効果的な類義語教授法であるといえよう。

以上をまとめ、次節で日本語学習者に対する類義語の有効な教授法について取りまとめたい。

7. まとめ ―類義語教授法の系統的な指導原理に向けての素案―

これまでに見た日本語学習者に対する類義語の有効な教授法をまとめると以下の通りである。

1. 類義語を語源的慣用に弁別・区分した説明を行う。

例：「ながめる」は「長く見」、「なまじ」は「生強い」、「語る」は「形（型）がある」、「怒る」は「息がある」などのように単語の元となる親の語に分け、指導を行うようにする。

2. 類義語の素性・祖語が同一であると考えられる語の提示を行う。

例：「赤」と「明るい」、「押す」と「教える」、「二十歳」と「果てる」、「上る」と「上せる」、「怒る」と「生きる」、「告げる」と「継ぐ」といった関連である語の素性・祖語が同一であると考えられる語の提示を行い、学習者に類義語の整理をつけやすくする。

3. 類義語の同源語を提示する。

例：「咲く」の場合は「裂く」、「無くす」は「亡くす（る）」、「燃える」は「萌える」、「破る」は「敗る」のように類義語の同源語を提示する。

4. ことばの意味記述・語義記述ではない教室語義による説明を行う。

例：「のぼる」と「あがる」、「うかぶ」と「うく」が事象の過程が重視されるか結果が重視されるかで異なることを示し、「のべる」と「いう」、「さわる」「ふれる」が動作対象となる語に継続性が見られるか瞬間性が見られるかで異なることを示す。

5. 末尾の語形に注目し、その語尾に共通する語義の説明を行う。

例：「あがる」、「たつする」、「やぶる」は「ある」、「いる」に通じ、動詞の対象となる事物が存在する場合に使われることを示し、「うく」、「かく」、「やぶく」などの「く」は「フク

(含)」に通じ、存在や継続が重視されるのではなく主体的な動作体験を行っている場合が多いといった語義説明を行う。

教室の授業では、一般に教科書か教員が作成した資料類を使って教える。類義語も教科書や資料類に出て来たものを、それが使われている文脈と一緒に教えることになる。この場合、学習者の語義や類義語の理解不足や質問は、予め考えられていたものの他に、教室で教えるべき様々な事項からの関連で疑問を抱くことが多い。類義語に関して学習者が抱く疑問事項は予測され得ない場合が多いが、この点を考えた場合、5, 3, 2, 1, 4の順で妥当な指導が行いやすいのではないかと考えられる。まず、5の動詞の末尾の共通は複数の語の提示が行いやすいこと、次に、3の同一形式の同源語は「合う」「会う」、「書く」「搔く」など比較的予想が行いやすいことである。更に、2の素性・祖語が同一の語を検討することは、日本語母語話者にとっては一旦「二十歳」が「果てる」に、「上がる」が「奢る」に繋がるなどということが調べ得られれば、自己の中に生き続けている言語の連続性の視点から先ず忘れ去られることはない。この点は、「支える」が「指し」+「合える」に、「迎える」が「向き」+「合える」になるという1の語源的慣用から語や類義語を弁別・区分した場合も同様である。最後に、教員にとって最も綿密な事前準備が必要なものはふさわしい教室語義を定める2であるが、これは実際の授業時間内で類義語学習を主要学習項目と位置付けで行えば一層ふさわしいと考えられる。繰り返し、上記のような教室語義は無謬ではあり得ず、修正を含む余地のあるものと検討されて然るべきものであるが、学習者に対する効果的な類義語教授法を検討するに当たり、有効な試案になると考えられる。

8. 終わりに —『基礎日本語辞典』からの更なる類義語指導の考察—

『基礎日本語辞典』に動詞見出し語として掲載され、3節で見たその語の分析項目中紛らわしい類義語となると判断される55カ所の他に、「おこなう」と「する」と「やる」や「える」と「もらう」など、学習者が紛らわしく判別しにくいと思われる類義語について、見出し語の分析項目にその語がない場合が少なからず存在する。また、「あける」の分析項目には「ひらく」と「とじる」があるが、本来自動詞「ひらく」の類義語である「あく」が見出し語や分析項目の語にないケースなども存在する。辞書に完全な見出し語や解釈は求められないが、学習者に対する教室語義や有効な類義語教授法を考える場合、今後こうした課題を検討する必要がある。

また「入る」の訓は一般的に「はい」であるが文脈により「い」になり、「行う」の訓は「おこなう」であるが、過去形になると「おこな」と「い」の二つの訓が生じるといった事例は辞書の観察のみではとらえ難い。この学習者が文字と語を混同し、漢字の読み分けを類義語の使い分けと同一視する形で漢字の誤読と類義語の誤用につなげていることは日本語の場合には特質上顕著であり、教室語義や有効な教授法の開発が必要である。また類義語は品詞別に見て当然のことながら動詞のみでなく、形容詞や副詞をはじめとする別の品詞の他、「ように」「ために」のような機能語も学習者にとって紛らわしく習得の難しい類義語であり、教員による指導が必要なものとして取り上げら

れる必要がある。こうした場合も、日本語は和語が語種として重要なことの原点に立ち返れば、前節で見た5分類は教室語義や類義語教授法に寄与できる部分はあると考えられる。「はじめに」の節に書いた繰り返しになるが、学習者に対する類義語の指導は従来個人としての教員の熱意に委ねられてきた。これまでの慣習が一朝一夕に変わるとは思われないが、前節までに見たように類義語の指導を体系的・系統的な指導原理で語彙指導の一部として定着させ、各教員がそれを基にする指導を定常的に行えるようにすれば、学習者の語彙習得の効率化が進むことは間違いない。個別的な記述をまとめ得られていない反省の余地はあるが、以降の稿では、本稿で検討した論を進め更に詳細な考察を加えていきたい。

＜注＞

- 1 平成17(2005)年12月発行の第10刷版。
- 2 独立して項目が立てられている単語であるが、巻末の語総数は1,848語である。
- 3 「おいそれと」「ひるがえって」等の一部単語として認めにくいものを除けば、全て単語である。
- 4 補助動詞49語を含めれば221語である。
- 5 補助動詞13語を含めれば114語である。
- 6 「きっと」「おそらく」は筆者が非常勤教員として勤務校しているフランス人教員による疑問である。
- 7 森田良行(2005)『基礎日本語辞典』角川書店 1259
- 8 項目が複数設けられているものが多い。
- 9 『基礎日本語辞典』内の見出し語は「なまじっか」である。ちなみに、この語は中級用日本語教科書、対外日本語教育振興会編(1980)『Intensive Course in Japanese Intermediate Course volume 1』プロスパーの第八課 用例(148)中に主要学習項目として記述がある。
- 10 「冷たい」を引くと「寒い」とあったり、「寒い」を引くと「冷たい」とあったりする語義記述のことである。
- 11 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎(1974)『岩波古語辞典』岩波書店 1。ちなみに、『基礎日本語辞典』の語源解釈・語義分類・整理・用法作成にあたり、この『岩波古語辞典』を入れ合計七種類の辞典を参考にしとの記述がある(『基礎日本語辞典』角川書店 1261)。
- 12 本稿では「カタカナ語」としても差し支えない。
- 13 例えば「会う」を見る場合、初めに「あう」の記載があり、続けて「合う、会う」という記述がある。ちなみに、こうした辞典上の特徴とも言える記述手法については辞典内に説明がない。
- 14 こうした語源的見解・意味素性の観点から見られる語については、古語辞典を参照すれば枚挙に暇がない。
- 15 加藤彰彦・佐治圭三・森田良行(2006)『日本語概説』おうふう 83
- 16 音は当時の漢語(中国語)の音が日本語化したものである。
- 17 「-おとす」、「-もらす」等の補助動詞13語を含めると114語ある。ちなみにこれらの動詞(補助動詞)の関連語としてあげられている語は二、三の例外を除き全て動詞である。
- 18 別の言い方をすれば学習者の類義語に関する語義理解が促進され、類義語の整理がつけやすい、誤用を起こしにくい教授法である。
- 19 一般の国語辞典を類義語辞典のようにするべきだとしている。
- 20 大槻文彦著『言海』(六合館)、大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』(岩波書店)、時枝誠記著『角川国語大辞典』(角川書店)、西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波国語辞典』(岩波書店)、文化庁編『外国人のための基本語用例辞典』(文化庁)、広田栄太郎著『類義語辞典』(東京堂)の七点である。

ちなみにどの版を参照したかについては記述はない。

- 21 異なり語数で約2万9000語あり、基礎語の語源についてはほぼ網羅されている。
- 22 説明や語釈不備の指摘以外にも、三重県の熊野市(2013)が『広辞苑』記載の「那智黒(なちぐろ)」の記述が誤りであることを指摘し、出版元の岩波書店が見解を発表した事例もある。
- 23 寺村秀夫編(1989)『講座 日本語と日本語教育 第13巻 日本語教育教授法(上)』明治書院 195,196より一部抜粋 当該部分は浅野百合子氏の論説である。
- 24 「あく」の動作対象となる主語の動作が部分的で変化が小さく「ひらく」は全体的で大きく変化し、「だく」は主語が具体的なもので「いだく」は抽象的なものである。
- 25 「おさえる」、「ささえる」、「むかえる」は造語成分の「あえる」を除くと、それぞれ「おす」、「さす」、「むく」が語源成分である。(大野晋・佐竹昭広・前田金五郎(1974)『岩波古語辞典』岩波書店)
- 26 増井金典(2011)『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房 268
- 27 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎(1974)『岩波古語辞典』岩波書店 1460

参考文献

- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎(1974)『岩波古語辞典』岩波書店
加藤彰彦・佐治圭三・森田良行(2006)『日本語概説』おうふう
森田良行(2005)『基礎日本語辞典』角川書店
増井金典(2011)『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房

〈論 文〉

日本語学習者にとっての留学の利点
—日本語能力試験聴解における誤答の要因から—

西 川 寛 之

キーワード：日本語能力試験，国内受験者，国外受験者，馴染み，意図の理解

0. はじめに

本稿では、日本語能力試験の聴解問題に焦点をあて、市販されている各年度の『日本語能力試験分析評価に関する報告書』に挙げられている国内国外受験者の点数差の要因を分類しまとめる。

日本語能力試験における聴解試験は、市販され公開されている資料では毎年、国内受験者の平均得点が海外受験者の平均得点を上回っている。このことは、楊 (2010: 72) などでも指摘されている。日本語能力試験の他の科目では、平均得点は同等もしくは国内受験者の平均得点を海外受験者の平均得点が上回る傾向を見せている。

聴解試験の問題に関する分析を行った研究としては、三門 (1995)、青山他 (2003) がある。受験者の側に着目した研究として、音声的な知覚に関する要因を指摘する山本 (2004)、聴解の解答のストラテジーに関する指摘として、楊 (2010) がある。山本 (2004) では、破裂音の出現頻度が高いことを指摘した上で「これは、日本語の音声言語で生起頻度の高い[t][k]音の知覚に上級でも困難な音が残る北方方言話者は、視覚的に理解している文法・語彙知識がたとえ豊富にあったとしても、それらの言語的知識が聴覚を通して理解できないために、上海母語話者ほどに聴解力が伸びないことを意味していると考えられる。」(山本 2004: 77) と、母語干渉が要因となることを指摘している。楊でも「ここは手がかりだと分かっているけども、聞き逃し及び誤聴によって、不正解になったことが明らかになった。」(楊 2010: 73) と、音の知覚が誤答につながることを指摘している。

日本語能力試験の「聴解」が測定しているものについて、森 (2012) では国語の聞き取り試験との比較考察を行っている。その中で、日本語能力試験の聴解試験結果が示す小学生と中学生の差について、「当然ながらこれはそのまま小学生の聴解に関する言語能力を示唆するものではなく、ニュースなどでの専門語彙やグラフの読み取りなど、聴解能力以外の要因が関係している可能性も高い」(森 2012: 104) と指摘するなど、国語の聞き取り試験、日本語能力試験の聴解が何を測定しているのかを検証する必要性を指摘している。

本稿では、日本語能力試験の聴解の得点が示す国内外受験者の得点の差が示すものを、留学し日本国内で学習するものが、留学することによって得られる日本語力であると想定し、日本語能力試

験の聴解試験が何を測定しているのかを明らかにすることで、日本語の習得上、何が留学の利点として考えられるかを考察したい。ただし、ここでは日本語能力試験の結果を分析した報告書がこれまでどのようなことを指摘しているかをまとめ、今後の研究の手がかりをつけることを目的とする。

1. 分析対象について

分析に用いる資料は、『日本語能力試験分析評価に関する報告書』として公開されている2002年から2008年まで各年度の報告書である。(以下、『平成14年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』を『2002年』のように、年度を『 』で括って記す) また、考察の中心的な資料として、各年度の1級の聴解の結果に関する分析を用いる。1級を対象とする理由は、以下、「無回答率」(問題項目に対して解答がされなかった、もしくは複数の選択肢を選んだ割合を示す。(『2002年』:124))についての分析が次の(1)のように、受験者の年齢や試験形式への対応力による誤答の影響を排除するためである。受験者属性は上位の級の受験者の平均年齢が高くなること、出題形式による誤答が下位の級で多く見られることを考慮し、本稿での資料を1級とする。

- (1) 1999年度から問題Ⅰと問題Ⅱとで解答形式が変わり、このことが日本語力も低く、テストの解き方にも慣れていない十代後半の比較的若い層が相対的に受験する割合の多い4級に影響しているのではないだろうか。(『2003年』:124-125)

「聴解」を対象とするのは、(2)にあるように「聴解」が語彙や文法の知識量の得点とは異なる傾向があるに着目するためである。

- (2) また、表1から聴解の得点は国内と国外で差が大きいことがうかがえる。この差は1級に比べて2, 3, 4級で相対的に大きくなる傾向がここ数年続いており、2002年度では1級から順に国内・国外の得点差は、14.2, 21.7, 22.0, 19.1, となっている。日常的に日本語に接している時間を考えれば、国内・国外受験者の聴解力の差が大きくなることは当然と考えることができる。(『2002年』:121)

「日本語能力試験は幅広い層の人の日本語力を測定し、認定することを目的とし、判定結果は、現在でも、就職や進学、昇級などの大きな影響を与えている」(市嶋 2013: 118) という指摘があるように、受験者にとって社会的意味を持つ試験を資料としたい。(2)が指摘するように、「国内・国外受験者の聴解力の差が大きくなることは当然」であることという指摘を、今後検証する目的で、本稿では国内受験者に有利な理由を明らかにするための分析の基礎資料づくりを行う。

2. 分析

各年度の『日本語能力試験分析評価に関する報告書』では、問いごとの正答率、識別力の分析の

他に、重ね問題の分析、正答率や識別力の分析で特徴的な項目を取り出して分析を行っている。特徴的な傾向を示す理由について『分析評価に関する報告書』ではその理由について、正答もしくは誤答に結びついた原因について分析文をつけている。この分析を参考に、今後、国内で学習するもの、すなわち留学しているものの日本語習得上の利点を探すための検証項目とする。ここでは、それらの典型例を列挙して分類の結果を示す。そして、最後にまとめとして今後検証する項目を列挙する。

2.1 語彙

語彙に関わるものとしては、「馴染みのないもの」、「聞き取りができない」という表現で表されている。いずれも国内の正答率が高いことから国内と国外を生活圏ととらえると、生活の中で耳にする機会があるかないかが「馴染み」に影響を与えと考えられる。具体的な分析の文章は以下の通りである。

- (3) 正答を得るためには、発話の後半「大型自動車の起こす振動が…」の「振動」というキーワードを選択肢の中にある「ゆれ」という言葉と結びつけることが必要とされる。音声で与えられた「シンドウ」という情報の意味が取れなかった受験者が、前段階で発話された「幹線道路が開通してからというもの、大型車が起こす…」という箇所から「空気の汚れ」という推測を行い、結果的に誤答選択肢2を選んだ結果となったのでないだろうか。

あるいは、選択肢が文字で示されているため発話を最後まで丁寧に聞こうとせず、前半部「幹線道路が開通してからというもの、大型車が起こす…」を聞いた段階で、一般常識を働かせ選択肢の中にある「空気の汚れ」を選択した受験者がいた可能性もある。(『2002年』I-(9))

- (4) 設問にある「正午の天気」の正午という語彙も2級レベルの語彙ではあるが、日常あまり使われない語彙であるためとまどった受験者がいたのかもしれない。(『2005年』I-(9))

- (5) テキスト中で、人形の作り方の説明で使われている語「胴」と「瞳」は、それぞれ1級と2級の名詞であるが、受験者にとってはあまり馴染みのない語で、テキスト全体の意味理解ができなかった受験者が、完成状態の人形(選択肢4)を除いた3つの選択肢をランダムに選んだ可能性がある。また、語レベルだけでなく、指示詞や語の省略「胴に手足をつけてポーズを決めたら、それ(ポーズ)に合わせて目鼻の表情をイメージして(顔に目鼻を)かき込んでいくの。それから、それ(頭)を胴につけて…」も、テキストの意味理解を難しくしていたと考えられる。(『2007年』I-(11))

- (6) 文末の下線部「…いちばん嫌かなあ。」は発話でよく用いられる表現であるが、習得して

いない受験者が多かったかもしれない。またテキストの「言って第3章 試験問題の内容と分析もしかたがないことをいつまでもぼやいてる」ことが、選択枝では「愚痴」(1級レベル)と言いかえられており、ほかの選択枝(2級レベル)に比べてあまり馴染みのない語だったことも影響していると言えよう。(『2007年』Ⅱ-(2))

- (7) 正答を選ぶためには、焼失し再建された建物を正確に聞き取る必要があるが、テキスト中に「塔はその後、火災により、惜しくも失われました。」とそのキーワードは一度しか提示されていないため、聞き逃してしまった可能性が高いと思われる。キーワードが「塔」というあまり馴染みがなく、かつ2モーラの短い語であったこともキーワードが聞き取れなかった受験者を増やしてしまったのだろうか。(『2007年』Ⅱ-(4))

- (8) 選択枝2と3のイラスト上の違いは、刺繍がすそにあるか前立ての部分にあるかの違いであるため、正答を得られたかどうかは「すそ」という語がわかるかどうかのポイントとなってしまうと言える。得点段階9までは、「えりが丸みをおびている」「そでにちょうの刺繍がある」ということを理解できた受験者がランダムに選択枝2と3を選んだ可能性が高い。表5は、国内、国外別に正答率と識別力をまとめたものであるが、国内と国外の間で正答率に大きな差はなく、国内の受験者にとっても「すそ」という語が難しかったと推測できる。(『2008年』Ⅰ-(2))

- (9) 受験者全体の40%以上が選択枝3を選んでいるわけだが、なぜ選択枝3が魅力的だったのか考えてみたい。まず「角も1本しかない」とあるが、すべてのイラストの鬼の角は1本であり、正答を得るためのヒントとはなっていない。しかし、角が日常的な語ではないため、正しく理解できない受験者が多かっただろう。さらに、選択枝1と4は牙が2本、選択枝2と3は牙が1本であるため、「角」ではなく「牙」を指していると考えた受験者も多かったのではないだろうか。そのように考えた受験者は、牙が1本の選択枝2と3を正答候補と考えるであろう。(『2008年』Ⅰ-(4))

- (10) 「ひざを曲げて、手をかかるとに添えましょう」とあるので選択枝1が正答となる。しかし、正答よりも誤答選択枝3が多く選ばれている。このことから、「手をかかるとに添えましょう」の「かかと」を「肩」と間違えた受験者が多かったことがわかる。「かかと」は出題基準では1級の語であるが、「かかと」を理解できない受験者が多かったと言える。(『2008年』Ⅰ-(1))

(3)の「振動」と「ゆれ」の言い換え、(4)の「正午」、(5)の「胴」「瞳」、(6)の「愚痴」、「…なあ」、(7)の「塔」、(8)の「すそ」、(9)の「角(つの)」、「牙」、(10)の「かかと」という言葉が日常馴染みのない言葉と言えるかどうかは本稿では抽出にとどめ、検証は今後行うこととするが、今後検証す

る必要があることは指摘しておく。

(3)が指摘する言葉の言い換えは、正答にたどり着くために理解できないことがあることによって、それを補うようなストラテジーを使った結果の指摘として考えると、楊が指摘する「『背景知識などによる判断』を多用するのは、プロトコルデータから示されたように、あまりにもたくさんの単語・文が分からないので、聞き取れた情報で解答へ結ぶことができる、ただ『背景知識』でテキストを理解しようとしているのではないか」(楊 2010: 72)と一致する。『2002年』が指摘する、「推測」が働いたことによる誤答の可能性も示唆も、音声の知覚の問題で聞き取れなかった、もしくは語彙知識の問題で理解できなかったという指摘に結びつく。(8)では国内外の差が少ないことが特筆されている。これは、「すそ」という語が、生活圏がどこであれ、触れる機会が少ない語である可能性を示唆する。

推測に関わるものとして、トピックに関するものを次に挙げる。

2.2 トピック

ここでは、2.1の(3)に加え、推測や背景知識などが影響するトピックが問題となって識別力もしくは正答率に問題があると考えられる問いの分析文を取り上げる。

(11) これは、キーワード「平行な線」「直角に交わる線」は聞き取れたものの、他の線との関係を発話から聞き取れなかったためと考えられる。単純に助詞の使い方を瞬時に理解できなかった場合もありうるが、発話の最初の部分「初めに線A Bに平行な線を書きます」から、男性の指示が線A Bがあらかじめ引いてあるところから始まっているということを理解できなかったケースの可能性が高い。(『2002年』I-(12))

(12) 得点段階が低い受験者でも正答した者が多いのは、真に内容を理解していなくても、冒頭の「全員が英語を週8時間勉強しなくてはなりません」と最後の「日本語ではなくて英語を8時間勉強します」のヒントから正答を得ることができたためだと考えられる。また、国内、国外別に見ると(表5)、国内の識別力は決して低くなく、国外の低さが全体の識別力に影響を及ぼしていることがわかる。この談話の内容では、留学生が英語話者であるということは想定外である。国外受験者には、この状況が理解しにくかった可能性がある。(『2004年』I-(11))

(13) 「信号機のトラブルで、一時運転を見合わせます」という表現は、日本(東京)ではよく聞く表現であるが、海外受験者には難しかっただろう。また、電車に乗り馴れている人にとってはわかりやすい設定だが、そうでない者また海外受験者にとってはわかりにくい設定であろう。経験の有無が影響した可能性も考えられる。(『2006年』II-(6))

- (14) 問題を難しくした要因としては、テキストのトピックが「企業の採用について」とあまり受験者に馴染みのないものであること、また音声で聞くテキストとしては一文が長く、名詞修飾などの文構造が複雑で、選択枝の違いを読み取りながら、音声テキストを聞き取り、記憶にとどめておくには、かなり負担が大きかったことがあげられる。(『2007年』Ⅰ-(15))

(11)の場面は、図形の描写をしているが、実際の日常生活の中で図形の描写を言語的に行う場面がどの程度あるのか考える必要がある。

(12)に関して、「留学生」の立場を自分と同じ国においた場合は、英語母語話者以外は英語以外を母語とするものを、英語母語話者は英語話者を「留学生」として考える傾向があるということを指摘していると取れる。その逆に、国内の受験者、つまり留学してきている学習者にとっては、柔軟な推測、場面理解が可能である可能性がある。

(13)の分析文の指摘については、文中にもあるように、国内であるかどうかよりも、利用する交通機関によるものも影響する可能性もある。留学している国内受験者にとっては、出題されている表現自体を耳にする機会があるという点で有利に働く可能性もある。

(14)の企業の採用というトピックが受験者に馴染みがないという指摘は事実であろうか。検証する際には、受験者の年齢や進学率などの状況を考慮して行う。

(11), (14)は文構造のり解凍を要因としてあげていることから、今後の検証に際して(12), (13)について優先的に行うこととしたい。

これら文脈とは少し異なる視点で、話者の意図の理解が解答に影響を及ぼしたという指摘もある。これらについて次に示す。

2.3 発話意図

発話の意図は、場面やトピックの理解の他、イントネーションや速度、声色などが示すものに関する理解も求められる。分析文で発話意図に関する理解が指摘されているものを以下に示す。

- (15) 一般に聴解問題においては正答にいたるキーワードが公判にて維持されるほどやさしい問題になる傾向があるといわれているが、この問題も会話の後半部分、

F: 来年は、世界一を狙いますか。

M: そのつもりです。

F: 本当におめでとうございます。

だけ聞き取ることができれば、前半は理解していなくても正答選択肢を選ぶことができる。前半部の女性の発話「引退するんじゃないか…」や男性の発話「来年はコーチになったら…」の意図を深読みしようとした受験者が正答を得られなかったのだろうか。(『2003年』Ⅱ-(6))

(16) 日常生活で、日程（または曜日）を間違えて伝えてしまうことはままあることで、場面設定はわかりやすい。ただ、問い合わせに対する男性の返答の意図がはっきりしない。男性は何の根拠もなく個人的（直感的）な判断で、問い合わせに返答しているようだ。聞いていて発話の意図がわからずとまどった受験者もいたのではないだろうか。男性の発話「曜日が正しい」の意図がわからず、受験者の多くが「8日の正しい曜日は火曜日」と勘違いし誤答選択枝4を選んだことが、この項目の識別力を下げたのではないだろうか。（『2007年』Ⅱ-(9)）

(15)と(16)は、文脈や場面を理解した上で、発話を聞き取りその意図をくみ取ることが難しかったという分析である。これらについては、同様の場面が国内外を含め、学習者の生活環境の中で起こりうるかが否かを調査し、その結果を踏まえて、それぞれの環境にいる学習者に対する試験などの実験的手法で検証を行うことが必要となる。

3. まとめ

報告書が挙げる誤答の要因をまとめた結果、国内受験者のほうが高い正答率を示すものは「馴染みのない語」「馴染みのないトピック」、「意図の理解」などがキーワードとして浮かび上がる。国内受験者を留学している学習者（日本在住者）と見なし、留学と結びつけて考えると、語彙や文法などの知識量ではなく、学習者の環境と経験が影響していると推測できる。ここで取り上げた、正答率や識別力に特徴的な傾向が現れた問題に対する分析文から、具体的には以下のものを今後の検証課題として取り上げる。

①語彙：「振動」と「ゆれ」の言い換え、「正午」、「胴」、「瞳」、「愚痴」、「塔」、「すそ」、「角（つの）」、「牙」、「かかと」、②拍数：「塔」に関して拍数についてもして指摘がなされている。ここに挙げた11語の内、7語が2拍の語である。拍数についても検証の項目として挙げる。トピックに関しては、③交通機関の利用状況と解答の関係、④「留学生」という言葉で連想する人物の属性と解答の関係を検証課題として挙げる。意図に関する理解については、トピックや場面等と深い関係があることから、③、④に関する検証の結果を受け、全問題についての分析文を調査した後に今後の研究の中で検討する。

4. 今後の課題

聴解指導のシラバスとして、宮城（2005: 51）では、レベルごとの設定とは別に聴解行動に関わる要素として1) 知覚のレベル、2) 知識のレベル、3) 情報処理レベル、4) ストラテジーのレベルの4つを立てている。これらを参考にしながら、問題を解くために用いられる能力について『日本語能力試験の分析評価に関する報告書』の記述について検証をすすめたい。分析評価に関する報告書は、統計的な処理の上で、経験的な推測を交えた分析文が記載されている。そこで書かれるように、留学が言語習得上のなにがしかの利点となることは経験的に言われていることであるが、それを明

らかにすることで今後の教育方法の発展に活かす研究へとつなげたい。まず、留学の利点として生活環境および目標言語使用環境での経験が考えられる。この経験が指すものが、目標言語の音声との接触量で海外での学習でも補うことが可能なものであるのか、実際に母語話者と接触する経験、インタラクションを伴うコミュニケーションの経験が必要なものであるかを明らかにすることが今後の課題である。

参考文献

- 青山眞子・廣利正代・野口浩之 (2003)「日本語能力試験の因子分析的検討」『日本語国際センター紀要 第13号』国際交流基金 pp.19-28
- 市嶋典子 (2013)「日本語教育に大躍る評価研究の変遷と課題 制度が規定する評価から、実践を起点とした評価、思想としての評価へ」『言語文化教育研究 第11巻 特集号「言語文化教育の思想」』早稲田大学 日本語教育センター 言語文化教育研究会 pp.112-133
- 許 羅莎 (2003)「中国人日本語学習者の日本語聴解能力(初級)について:言語テストデータ分析に基づいて」『神戸女学院大学論集 50(2)』神戸女学院大学 pp.31-50
- 三門 準 (1995)「日本語聴解試験の項目分析」『亜細亜大学教養部紀要 51号』亜細亜大学 pp.113-138
- 森 篤嗣 (2012)「日本語能力試験による小中学校生の聞き取り能力調査—重回帰分析から見た聞き取りテストの持つ意味—」『帝塚山大学現代生活学部紀要第8号』帝塚山大学現代生活学部 pp.101-111
- 宮城幸枝 (2005)「音声言語能力向上を目指した聴解指導シラバス」『東海大学紀要 留学生教育センター25』東海大学留学生教育センター pp.47-55
- 山本富美子 (2004)「日本語談話の聴解力と破裂音の知覚との関係—中国北方方言話者と上海語方言話者に対する比較調査より—」『音声研究 第8巻3号』日本音声学会 pp.67-79
- 楊 元 (2010)「聴解テストにおける問題解答に見られるストラテジー—中国語母語話者国内外学習者の比較を通して—」『日本語教育方法研究会 17(1)』日本語教育方法研究会 pp.72-73

資料

- 日本語教育学会編 (2004)『平成14年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』国際交流基金
 ————— (2005)『平成15年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』国際交流基金
 ————— (2006)『平成16年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』国際交流基金
 ————— (2007)『平成17年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』国際交流基金
 ————— (2008)『平成18年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』国際交流基金

〈論 文〉

第二言語喪失における「do + NP」使用のケース・スタディ

—グーグル・エヌグラム・ビューワーを活用した一考察—

A case study analysis, using Google Ngram viewer, of “do+ NP” usage
in Second Language Attrition

平 井 清 子

キーワード：第二言語，言語喪失，言語転移，簡略化，グーグル・エヌグラム・ビューワー，「do+NP」

1. はじめに

これまでに，第一・第二言語における言語喪失についての研究は様々な見地からなされている。以前は認められた言語力が喪失する理由とその経緯については，大別すると二つの考え方がある。前者は，言語知識に何らかの変化が起こると考えるものである (Kaufman & Aronoff, 1991; Seliger, 1991; De Bot et al, 1991)。後者は，言語知識は以前と変わらず脳に保持されているが，心理学でいう「検索」がうまくいかず，知識へのアクセスがうまくいかないことから，思い出すことができない「検索失敗説」と言われるものである (Sharwood Shith, 1983a, 1983b; Cohen, 1989; De Bot, & Weltens, 1995)。

喪失が言語知識の再構成の経緯をたどるとする考え方もまた，大きく二つに分けられる。一つが，言語知識そのものが変化し，喪失過程にある言語がより例外の少ない簡略化された規則に基づき再構成されるとするもので，他方が，もう一つの現在主要な言語から何らかの影響を受けて変化すると仮定するものである。これらを Seliger & Vago (1991) はそれぞれを *internal driving forces*, *external driving forces* と呼び，分別している。本稿では，この二つの説について第二言語（この場合は英語）の喪失における検証を試みる。

まず，簡略化は，これまでに第一・第二言語の習得，フォリナートーク，ピジン化，クレオール化，そして言語喪失において研究報告がなされている。喪失の場合，格標示や時制等の細かな規則が簡略化されたり，一つの形式（音韻構造，統語構造）が規則を緩めながら，その使用範囲を広げて多くのコンテキストで使われるなど，規則の一般化を伴ったり，秩序ある規則を再構成する複雑なプロセスを指す (Andersen, 1983, 1989; Hoenigswold, 1989)。これまで言語喪失研究の中で報告されている簡略化は，第一言語 (L1) がハンガリー語，第二言語 (L2) がイスラエル語の研究協力者が，ハンガリー語の複雑な語尾変化を喪失する過程で，自分が覚えているハンガリー語の語尾変化の規則に基づいて，新たに秩序ある規則を再構成して使用しているというものがある (Vago, 1991)。た

だし、簡略化についてはいまだ議論の余地があり、その研究がすすめられている (Dorian, 1989)。

次に「もう一つの言語からの影響を受けての言語喪失」については、言語喪失が、一つの言語の知識体系そのものが変化することによって喪失が起るのでなく、もう一つの主要な言語からの影響(干渉、転移)をうけて言語知識が変化し、言語喪失が起ることが、これまでの研究から考えられている。この現象を cross-linguistic effects という (Sharwood Smith, 1983a, 1983b)。言語喪失過程における言語転移については、語彙、音韻、形態構造、そして統語上において、これまでに多くの研究報告がなされている (Sharwood Smith, 1983 b; Berman & Olshtain, 1983; Laleko, 2007)。たとえば、ある言語がその言語使用者のもう一方の言語と文法上の類似点がある場合、喪失過程においてその規則が他に比べて残りやすく、すなわち誤りが起こりにくい。一方、文構造が違う場合は、主要な言語の規則が喪失過程にある言語の規則に影響し、誤りが生じる (Seliger & Vago, 1992; Weltens & Grandel, 1993)。これまでの言語喪失研究の中で、言語喪失は、簡略化に起因する場合もあるし、言語転移に起因するものもあり、さらにそれら両方の組み合わせによるものもあると考えられている (Andersen, 1989; Bavian, 1989)。

本研究では、社会的長期的変化を見ることに効力のあるグーグル・エヌグラム・ビューワー (Google Ngram viewer) を使用して、言語喪失において、言語知識そのものが変化し、喪失過程にある言語がより例外の少ない簡略化された規則に基づき再構成されるために起こるのか、あるいは、もう一つの主要な言語から何らかの影響を受けて変化するのかを考察するものである。上記における個人の言語喪失と、グーグル・エヌグラム・ビューワーによる社会的長期的変化に、何らかの関係性がないかという観点から考察を試みる。このような研究方法によって、社会言語学的なアプローチから言語を広く一般化することによって、新しい捉え方ができないかを検証するものである。

2. 研究の目的

本研究では、L1 が日本語で L2 が英語である研究協力者 N の英語の言語喪失を「書く」ことに焦点をおき、統語面から分析を試みる。研究協力者 N は、7 歳 1 カ月から 9 歳 5 ヶ月までの 3 年間でアメリカで日本人の両親と暮らした。日誌は日本に帰国した 9 歳 6 カ月から 11 歳 9 カ月までの 2 年 4 ヶ月 (28 カ月) に N が英語で記述したものである。

言語喪失のプロセスにおいて、N の記述には、英語においては一般的な使用からは逸脱した「do+NP」の表現がみられた。英語では “I play soccer.” や “We had a party.” などのように、“do” 以外の別の特定の意味を表す一般動詞を用いる。しかしながら、帰国後の N の表現に、“I did soccer.” “We did a party with my friends.” のように表現された例がいくつか認められた。このような「do + NP」の表現は、帰国後 9 か月後から目立ちはじめ、その後、帰国後 11 か月後以降に増えている。

この変化は、言語知識そのものが変化し、喪失過程にある言語が、より例外の少ない簡略化された規則に基づき再構成されたためであろうか。あるいは、もう一つの主要な言語から、何らかの影響を受けて変化したためであろうか。日本語ではこの場合、一般に「サッカーをする」、「パーティをした」など「～する」という動詞を共通して使用する。N のこれらの表現において、日本語から

英語への「言語転移の影響」“cross-linguistic effects”が支持できるか。これを明らかにするために、ここではグーグル・エヌグラム・ビューワーを使用した。さらにこれによって、個人の言語喪失のプロセスに起こる現象が、社会的長期的な言語使用に見られる変化と何らかの共通性がないかを探ることを試みた。

3. 研究方法

本研究では、以下の二つ（3-1と3-2）の方法で調査・研究を行った。

3-1 研究協力者Nが「書いた」日誌を使い、その喪失の過程を調査する

3-1-1 研究協力者

本研究の研究協力者Nは、日本人の両親を持つ男子である。米国で誕生し、1歳2カ月で日本に帰国した。その後は日本で普通幼稚園、そして公立の小学校1年生に7月まで在籍した。7歳1カ月で再度渡米し、9歳5カ月まで2年4カ月間を米国で過ごし、日本に帰国した。帰国後は東京の公立小学校の普通学級4年生に編入した。

3-1-2 研究期間

研究協力者Nが9歳6月から11歳9カ月までの2年4ヶ月（28カ月）間とする。

3-1-3 データ収集

本研究で利用した研究協力者によるデータ収集は以下のようになる。

英語でのデータ収集

本人による日誌（ジャーナル：毎回次の面接日までの間に本人に任意で書いてもらったもの）と面接日に書いたエッセイ

3-1-4 データの分析方法

日誌（ジャーナル）とエッセイに書かれた英文を、そこで使用されている統語面での変化に着目し、時系列的に調査し、喪失・維持の過程を考察する。一度習得した言語知識がどのように変化して喪失が起るのかを明らかにするため、ここでは、日誌に見られた「do+NP」の使用に注意し、関わる動詞と名詞句を3-2のグーグル・エヌグラム・ビューワーを使用して分析する。

3-2 グーグル・エヌグラム・ビューワーによる調査

研究協力者Nから得た「do+NP」の表現のデータを、グーグル・エヌグラム・ビューワーを用いて分析した。これは、Google社がスキャンした書籍（本、雑誌）500万冊をもとに構築された、5,000億語からなるデータベースにより、現在から過去200年間の用語・用法の推移を検索し、その歴史的变化を見ることができるものである。ミシェルら(Michel, et al. 2010)によってその使用が可能と

なった。井上（2013年2月）はいち早くそれを活用し、社会言語学において、長期的言語変化の規則性を論じる上での有用性について述べている。

本研究では、Nが使用した「do+NP」の表現と、文法上正しい表現とされている特定の一般動詞（play, have など）に置き換えた表現を共に検索し、両方の使用状況を把握し、それらを比較することを試みる。そして、その結果から、研究協力者Nの表現が特異なものといえるかどうか、研究協力者Nの表現と、グーグル・エヌグラム・ビューワーにより把握された社会的長期的な言語の変化との間にどのような関係があるかを明らかにしようとするものである。

このときの検索は、原則としてNが日誌で表現したとおりの形で入力したが、明らかなスペルミスは修正し、動詞は原形を用いた。例えば、“I did a party with my friends.”と書かれたものの場合は、“do a party”で入力し、同時にこの意味での一般動詞を使用した“have a party”の両方を入力して検索した。冠詞に関しては、たとえNの表現が文法的には修正が必要であっても、冠詞の用法から、不定冠詞“a”，定冠詞“the”，または無冠詞について、それらを替えたり、冠詞を加えたり、削除して検索すると、その件数は大幅に異なることから、研究協力者Nが使用したとおりのもので検索した。

4. 結果

4-1 研究協力者Nの「do+NP」用法

Nの帰国後の日誌に表れた「do+NP」の表現には以下のようなものが認められた。その使用総数は本調査期間中に24回であり、20種の表現が認められた。帰国直後にはほとんど認められなかった表現を帰国後9カ月ごろから使用し始めた。全体で使用された動詞のうち「do」の使用頻度数（特定の一般動詞の代用として用いられた「do」の使用総数 / 特定の一般動詞の代用として用いられた「do」の使用総数 + それ以外の一般動詞の使用総数）は6.7%であった（24/359）。

Nが調査期間中に用いた「do+ NP」用法には以下のものがある。

「do+ NP」用法： Nの日誌から抜粋（原文のまま、筆者訂正は〔 〕内に記述）

帰国後9カ月

・ We did body language games. (僕たちはボディランゲージゲームをした。)

帰国後11カ月

・ 2nd ~6th grade does a shop. (2年生から6年生まではお店をした。)

帰国後15カ月

・ At there, we did trout catching. (そこで、僕たちはマス釣りをした。)

帰国後17カ月

・ I did a party with my friends. (僕は友達とパーティをした。)

帰国後18カ月

・ It was doing a Hokkaido food fair. (北海道食品市をしていた。)

帰国後 24 カ月

- ・ Today my family did a free[flea] market. (今日、僕の家族はフリーマーケットをした。)

帰国後 24 カ月

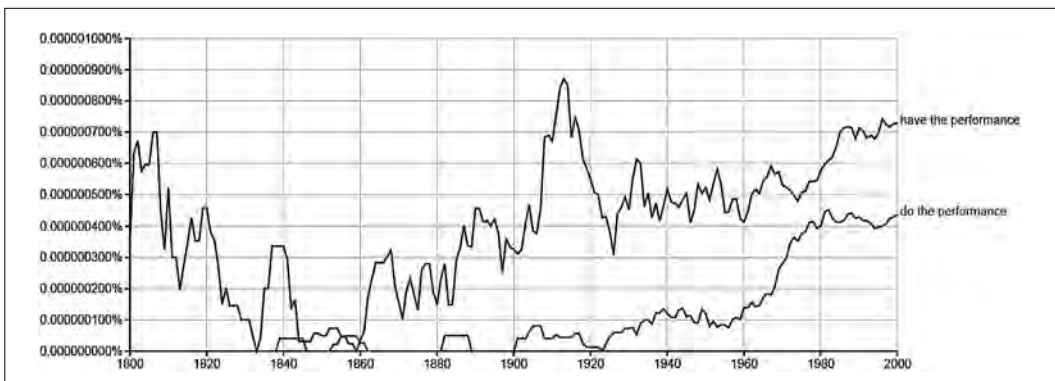
- ・ Japan don't [doesn't] do the war anymore. (日本はもう戦争はしない。)

4.2 グーグル・エヌグラム・ビューワーにおける検索結果

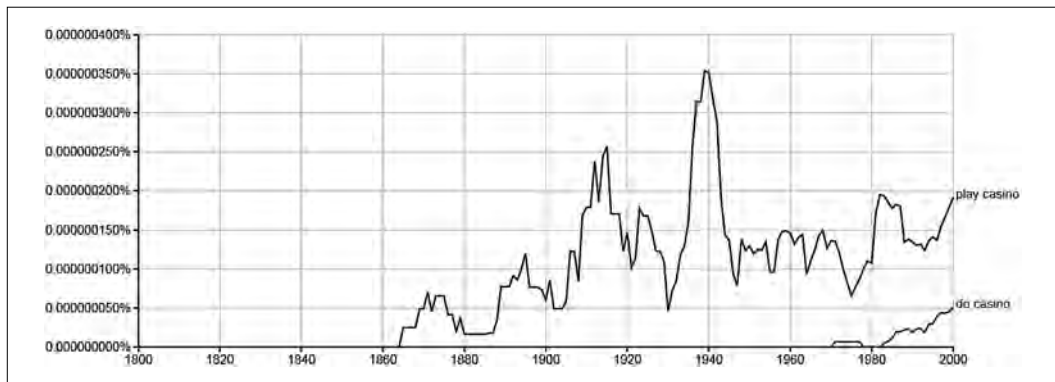
グーグル・エヌグラム・ビューワー (Google Ngram viewer) で検索した結果は、以下のようになった (グラフ 1~8)。N が使用した「do+NP」の表現の使用総数 24 回のうち、繰り返しの表現を除いた表現は 20 種類であった。そのうち明らかに「do」の使用が認められるものは 7 個で、10 個は「do」の使用が全くかほとんど認められないもの、そして 3 個はその判断が難しいものであった。注目すべきは、「do」の使用が認められるものにおいては、その使用頻度は年代が上がるにつれて増えており、特に最近の過去 100 年の間に増えることが認められたことである。全体 (20 種) のうち 7 種 (35%) が、それぞれの一般動詞の使用頻度までには及ばないが、ある程度の使用頻度が認められ、それが近年になるごとに急速に増加している。

具体的にはグラフ 1 からグラフ 8 に示されるとおりである。それぞれ、①「特定の一般動詞」の使用が多いものの、「do」の使用が認められるもの、② (①, ③) のどちらとも判断の難しいもの ③「特定の一般動詞」の使用が圧倒的に多く、「do」の使用が全くかほとんど認められないもの、の三つに大別された。まず、① (グラフ 1~3 参照) を示し、次に②を示す (グラフ 4, 5 参照)。最後に③ (グラフ 6~8 参照) を示した。

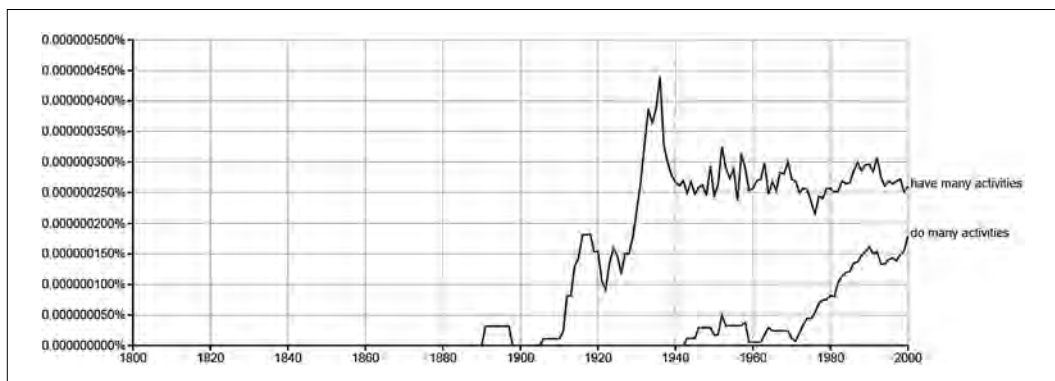
- ① 「特定の一般動詞」の使用が多いものの、「do」の使用が認められるもの (“do the performance”, “do casino”, “do many activities” など: グラフ 1~3 参照)



グラフ 1: do the performance, have the performance

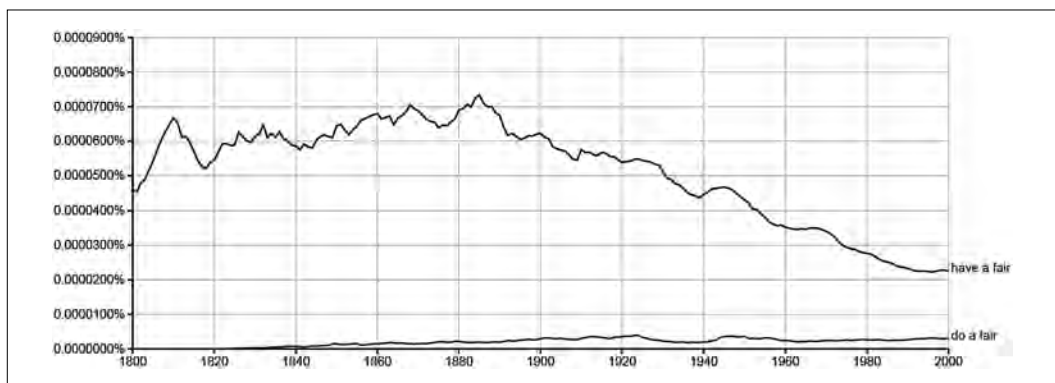


グラフ 2 : do casino, play casino

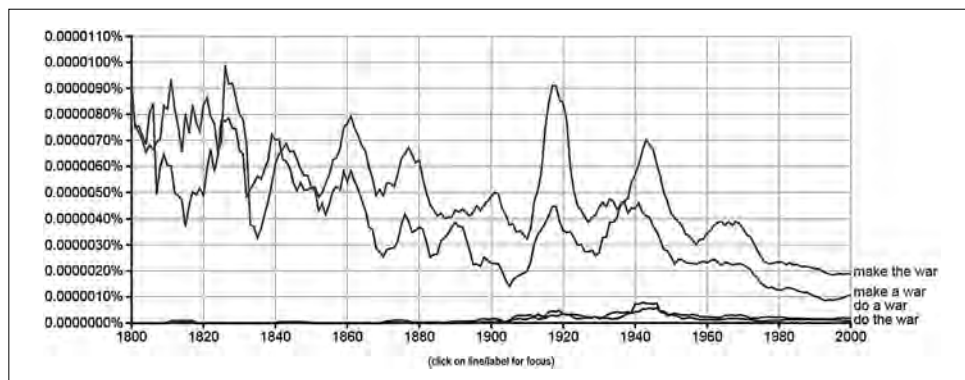


グラフ 3 : do many activities, have many activities

② どちらも判断の難しいもの (“do a fair”, “do a war”, “do the war”, など : グラフ 4, 5 参照)

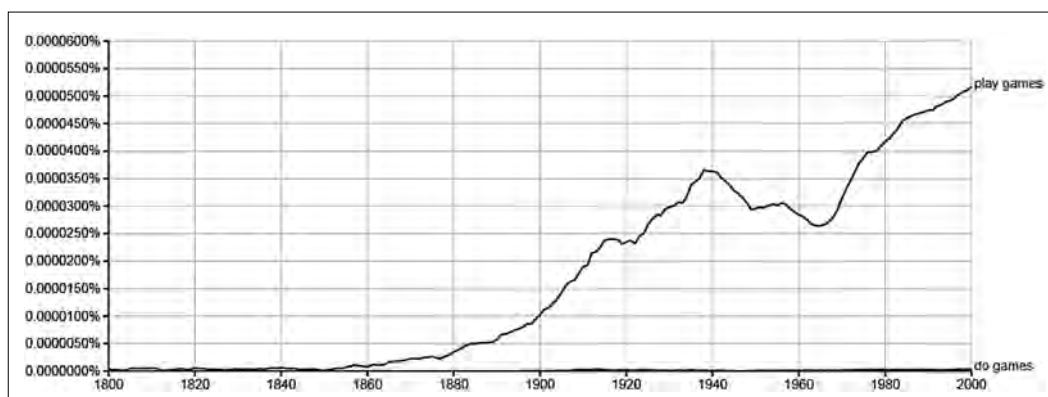


グラフ 4 : do a fair, have a fair

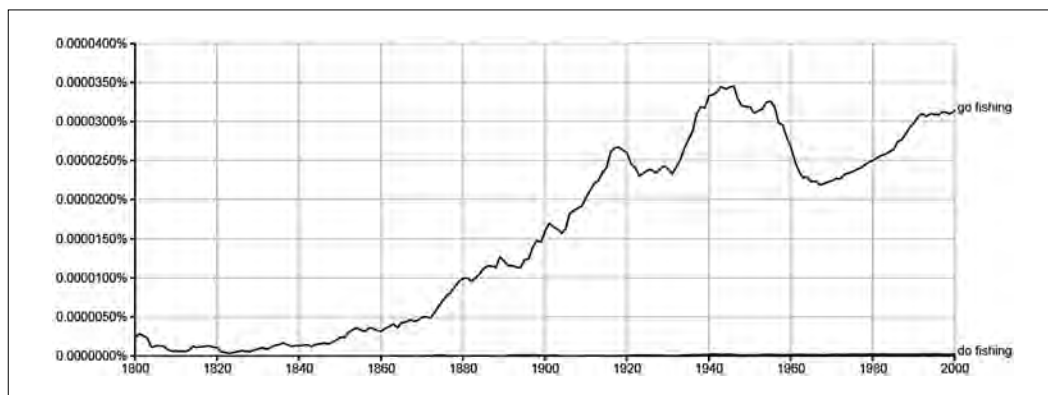


グラフ5：do a war, do the war, make a war, make the war

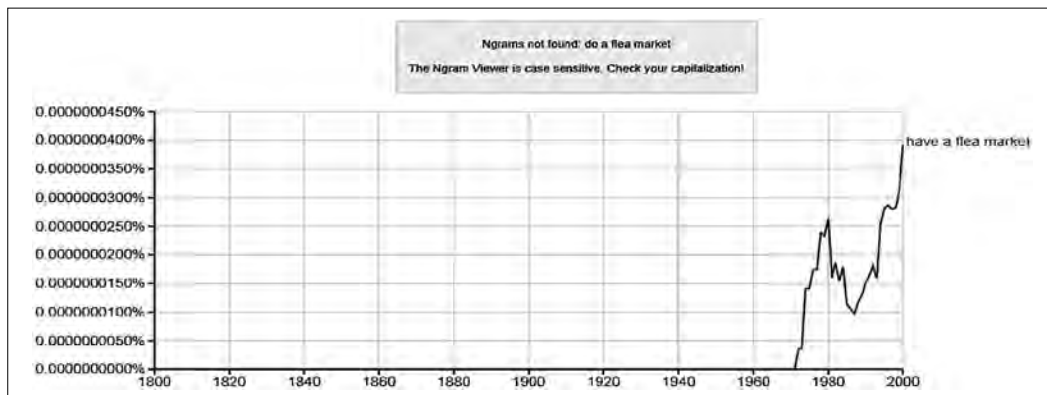
- ③ 「特定の一般動詞」の使用が圧倒的に多く、「do」の使用が全くかほとんど認められないもの
 (“do games”, “do fishing(do trout catching)”, “do a flea market” など：グラフ6～8参照)



グラフ6：do games, play games



グラフ7：do fishing, go fishing



グラフ 8 : do a flea market, have a flea market

(すべての検索は 2013 年 12 月 26 日に最終確認したものである)

5. 考察とまとめ

5-1 研究協力者 N

5-1-1 言語知識そのものが変化し、簡略化された規則に基づいた再構成

“do” の使用については、一般動詞の他動詞として使われる “do” の後に目的語になる名詞を置く「do+ the + 名詞」の用法に代表される表現 (“do the dishes” 皿洗いをする, “do the garden” 庭仕事をする) などを含め, “do” が一般動詞として使用される範囲は広い。しかしながら, 研究協力者 N が使用した表現がこれらの表現にとどまらない。

N はもともとその使用範囲が広い “do” を, 一般動詞の中でも特に “have”, “make”, “get” などの軽動詞や “play” などを使用するときに使っている。これは特定の一般動詞や特に軽動詞を個々に使用する代わりに, 代用可能である “do” を使用し始めた, 代動詞としての “do” (I think as you do [=think]. 私はあなたがお考えのように考えております) の使用が, 一般動詞の他動詞として使われる “do” の後に目的語になる名詞を置く「do+ the + 名詞」の表現に影響されながら, 徐々にその使用範囲が大きくなっていった簡略化と解釈できないであろうか。つまり, 代用している動詞が軽動詞や “play” をはじめとするいくつかの動詞を中心としていることから, 簡単に代用できる “do” を N 自身が認めたある種の範囲の動詞へ適用させるうちに, とっさに思い出せなくなった特定の一般動詞に代わって使用し始め, その使用範囲が喪失過程において広がってきた補償方略の一つとして考えられるのではないか。これは, 先行研究 (Vago, 1991) でも上げられているように, 忘れた部分について自分の覚えている規則をあてはめて自分なりの秩序のある規則を再編成し, 埋め合わせをするという意味で, 言語喪失が何らかの説明可能なメカニズムに基づいて選択的に変化していることを示しており, 大変興味深い。

次に 5-2 にて, グーグル・エヌグラム・ビューワーにおける調査結果 (4-2) と, 上記の個人の喪失の過程と比較し, その関係性を考察する。

5-1-2 もう一つの主要な言語から影響を受けて変化

N の日誌における、「do+NP」の表現は、日本語から英語への負の言語転移と指摘できる可能性はあるだろうか。調査期間中にNが英語で使用している「do+NP」のすべての表現は、日本語に訳すと「～する」になるものであった。しかしながら、日本語からの転移であることを明らかにするためには、先行研究 (Seliger, 1991) にもあるように、英語母語話者の中ではこのような事象が起こらないということを検証する必要がある、そのためには、「do+NP」の表現が、英語母語話者の「書きことば」の表現にみられるかどうかを確認する必要があるであろう。

そこで5-2にて、グーグル・エヌグラム・ビューワーにおける調査結果 (4-2) から考察する。

5-2 グーグル・エヌグラム・ビューワーにおける検索結果

本研究のグーグル・エヌグラム・ビューワーにおける検索結果において、特に注目できるのは、検索したいくつかの項目において、最近の100年の間、それも特にこの50年間の間に、個々の特有の一般動詞を使用する代わりに“do”を使用することが共通して増える傾向が認められたことである。具体的には、“do the performance” (劇をする：劇に出るの意)、“do casino” (カジノをする)、“do many activities” (沢山の活動をする) など全体 (20種) のうち、7種 (35%) の表現が増えている。これらの表現において、共通した“do”を使用することが、それぞれの一般動詞の使用には及ばないまでも、近年、社会的長期的な使用が増えていることが分かる (グラフ1, 2, 3参照)。これらの表現については様々な角度から解釈を試みることができるであろう。ここでは一つの可能性として以下のものを上げる。すなわち、これらの表現は、“do”の「仕事、家の仕事をする：do the shopping」，“do”の「行為、仕事をする：do a hauling job」の用法に影響されたものか、あるいは“play”、“have”の軽動詞において代用し、使用範囲が広がった可能性はないであろうか。つまりこれは、“do”の様々な用法におけるそれぞれの規則の中で、代用可能な範囲を広げ、新たな規則に従って、その使用の幅を広げている単純化、簡略化していく傾向と捉えることはできないであろうか。

社会的長期的な言語変化の理由については、経済的理由により、話し手や書き手が時間と労力を節約しようとして言語の簡略化が起こることは広く知られている。また、多民族国家における移民が社会に及ぼす影響はもとより、国際化も言語の変遷、簡素化の要因となっている (中尾他, 1997; 井上, 2001; 2007)。さらには、移民が新しい言語を学ぶ、第二言語の習得過程 (中間言語) において、言語の簡略化、単純化が起こることも知られている (Richards, 1974)。以上のように、これは、5-1-1で述べた個人の言語喪失における簡略化と類似の可能性が指摘できる。もちろんここで別の解釈としては、Nがアメリカ滞在中にすでにこのような「do+NP」の表現に慣れていた、とするものもあるが、研究協力者Nが、日本に帰国した直後から5カ月後までは、全くこのような「do+NP」の表現は見られていない。この表現が帰国後7カ月ごろから見られ始め、11カ月ごろから多く使用されるようになってきたことから考慮すると、その可能性は低いように思われる。

研究協力者Nが日本に帰国してから英語との接触が極めて少なくなったことから英語の喪失が起こり、上記のような「do+NP」の表現が起こったと考えると、グーグル・エヌグラム・ビューワー

にみる長期にわたる社会言語学的変化と似た傾向を示すことは一見不一致に思われるかもしれない。すなわち、もしNがアメリカ滞在中にこのような表現をしたならば、Nが周りの母語話者のように振る舞い、その文化の中にいて、変化する英語の中でその影響を受けたと考えられるからである。しかし、ここでは、英語の言語環境にいた個人が、英語との接触が極めて低い環境へ移動し英語を喪失する過程で、忘れてしまった英語の語彙の補償方略として、代用可能な語を使用し、ルールを再構築して使用していく過程が、社会的で長期的な言語の変遷、この場合は言語の簡素化としておこる言語的变化と似た傾向にあることを意味すると考えると大変興味深い。言語習得と言語喪失との鏡像関係とも関係して、今後、さらに研究を深めたいところである。

次に他の言語からの転移の可能性についてNのデータを比較検討したい。他の言語からの影響を受けて言語知識の再構成が起こったとする先行研究 (Seliger & Vago, 1991) では、6歳の時にアメリカからイスラエルに移住した10歳の研究協力者が、ヘブライ語の言語環境の中で、次第に母語の英語を失う過程を観察した。ここでは、研究協力者が使用した誤りが英語では正しくないがヘブライ語では正しいものを英語にもあてはめている、転移による誤りと判断し、この誤りの例が、英語の母語話者にとって極めて使用頻度が低いとことが述べられている。

グーグル・エヌグラム・ビューワーの検索結果から得たNが使用した20種類の表現のうち、明らかに「do」の使用が認められないものは10種であった。従って、N特有の「do+NP」と思われる表現は、全体（20種類）の半数（50%）は認められたことになる。しかしながら、半数ではN特有の表現と考えるには決定的な数値とは言い難い。限られたデータからではあるが、本研究においては、Nの日記における、「do+NP」の表現は、研究協力者の英語の言語能力が喪失する過程において、日本語に訳すと「～する」となるルールを英語に当てはめていったものであるとする「言語転移の影響」“cross-linguistic effects”を支持するには十分な論拠があるとは言えないであろう。

以上のように5-1、そしてグーグル・エヌグラム・ビューワーの検索結果を分析すると、研究協力者Nの日記に「do+NP」表現が起こった理由については、限られたデータからではあるが、日本語からの言語転移の影響のため (external driving forces) であることを十分に支持することは難しく、むしろ、言語知識そのものが変化し、簡略化された規則に基づき再構成された (internal driving forces) ことに起因する可能性が大きいことが示された。あるいは、簡略化に言語転移が加わり、それらが組み合わせられて変化したと可能性もまだ否定はできないものである。

グーグル・エヌグラム・ビューワーという極めて新しい手法による限られた結果ではあるが、社会言語学的にみた社会的長期的な言語使用の変化が、個人の言語喪失のプロセスと類似した傾向にある可能性が示されたことは意義のあることではあるまいか。これまでの研究からは、社会言語学的にみた社会的長期的言語使用の変化が、個人の言語学習者に見られる変化との類似性が指摘されるものは多くあるが、個人の言語喪失のプロセスとの類似性がこのような方法で検証されたものは、筆者が知る限りではまだないと思われる。

6. おわりに

本研究では、研究協力者Nの第二言語喪失過程において、英語での一般的な使用を逸脱する「do+NP」表現が起こった理由について、1) 言語喪失の過程において、その言語そのものが変化し、簡略化が起こった可能性が大きいことが示された。Nは的確に使用すべき種々の一般動詞を忘れる過程で、代用可能な“do”を使用し、「do+NP」の表現を自分なりに新たにルールを構築しその使用範囲を広げている可能性と考えられないであろうか。限られたデータによるものではあるが、「do+NP」表現が起こった理由については、日本語からの言語転移の影響からを支持するには十分なものを得ることができなかった。むしろ、言語知識そのものが変化し、簡略化された規則に基づき再構成が起こったことによる可能性が大きいことが示された。また、このように、Nが的確に使用すべきそれぞれの一般動詞を忘れる過程で、代用可能な“do”を使用し、「do+NP」の表現を自分なりに規則を構築しながらその使用範囲を広げている可能性が指摘されたことにより、言語喪失が、言語習得やピジン、クレオールと同様に、何らかの説明可能なメカニズムに基づいて選択的に変化していることを提示する可能性が示された。

最後に、2) 個人の第二言語（英語）の喪失における簡略化が、社会言語学的に見られる言語の変化における簡素化と類似した傾向があることが位置づけられた。つまり、社会言語学的にみた社会的長期的言語使用の変化が、個人の言語喪失のプロセスと類似した傾向がある可能性が示されたのである。これまではその調査が大変困難であった、世界における一般的な言語使用（書きことば）状況の変遷を、グーグル・エヌグラム・ビューワーを活用することで、具体的な数値で確認することが可能となったわけである。

本研究においては、今後はグーグル・エヌグラム・ビューワーと同様のシステムである、現代アメリカ英語コーパス(COCA)などを使用すれば、さらにその信頼性は高まるであろう。

また、グーグル・エヌグラム・ビューワーの活用法においては、アメリカ合衆国、イギリスなどの英語圏に細分し検索するなど、地域的に絞り込んだり、将来的には年齢層別に検索する方法ができるようになれば、その考察に新たな可能性を広げるであろう。最後に、今後は言語習得の過程と言語喪失の過程が鏡像関係をなすかどうかについて、その研究を深める価値は大いにあると考える。

参考文献

- Andersen, R. (1983). *Pidginization and creolization as language acquisition*. Rowley, MA; Newbury House.
- Andersen, R. (1989). The “up” and “down” staircase in secondary language development. In Nancy C. Dorian (Ed.), *Investigating obsolescence: Studies in language contraction and death*. Cambridge university press.
- Bavin, E., (1989). Some lexical and morphological change in Warlpiri. In Nancy C. Dorian (Ed.), *Investigating obsolescence: Studies in language contraction and death*. New York: Cambridge university press.
- Berman, R. and Olshtain, E. (1983). Features of first language transfer in second language attrition, *Applied Linguistics* 4(3), 222-234.
- Cohen, A. (1989). Attrition in the productive lexicon of two Portuguese third language speakers. *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 2, 135-50.

- De Bot et al. (1991). L1 loss in an L2 environment: Dutch immigrants in France. In H. W. Seliger & R. M. Vago (Eds.), *First language attrition*. New York: Cambridge University Press.
- De Bot, K. & Weltens, V. (1995). Foreign language attrition. *Annual Review of Applied Linguistics*, 15, 151-164.
- Hoenigswald, H.(1989). Language obsolescence and language history: Matters of linearity, leveling, loss, and the like. In Nancy C. Dorian (Ed.), *Investigating obsolescence: Studies in language contraction and death*. New York: Cambridge university press.
- Kaufman, D.& Aronoff, M. (1991). Morphological disintegration and reconstruction in first language attrition. In H. W. Seliger & R. M. Vago (Eds.), *First language attrition*. New York: Cambridge University Press.
- Laleko, O. (2007). A study of language attrition: American Russian in Minnesota Texas Linguistic Forum 51: 103-112, Proceeding of the Fifteenth Annual Symposium About Language and Society-Austin.
- Michel, J.B. et al. (2010). Quantitative analysis of culture using millions of digitized books, *Science express*, Downloaded from www.sciencemag.org on December 19, 2010.
- Richards, J.(1974). *Error Analysis: Perspectives on second language acquisition*. London: Longman.
- Seliger, H. (1991). Language attrition, reduced, redundancy, and creativity. In H. W. Seliger & R. M. Vago (Eds.), *First language attrition*. New York: Cambridge University Press.
- Seliger, H. W. and Vago, R. M. (Eds.) (1991). *First language attrition*. New York: Cambridge University Press.
- Sharwood Smith, M. (1983 a). On first language loss in the second language acquirer: problems of Transfer. In Gass, S., and Selinker, L. (Eds.), *Language transfer in language learning: Series on Issues in Second language Research*, pp.222-231. Rowley, MA: Newbury House.
- Sharwood Smith, M. (1983 b). On explaining language loss. In Feliz, S. W. and Wode, H. (eds.), *Language development at the crossroads*, pp.49-69. Tübingen, Germany: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Stern, H. H. (1983). *Fundamental concepts of language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Vago, R. M. (1991). Paradigmatic regularity in first language attrition. In H. W. Seliger & R. M. Vago (Eds.), *First language attrition*. New York: Cambridge University Press.
- Weltens, B., & Grandel, M. (1993). Attrition of vocabulary knowledge. *Studies in Bilingualism* 6. [Also in R. Schreuder & B. Weltens (Eds.), *The bilingual lexicon*.]
- 井上史雄 (2001) 『日本語は生き残れるか』 PHP 新書
- 井上史雄 (2007) 『変わる方言動く標準語』 筑摩書房
- 井上史雄 (2012) 「日本語の世界進出—グーグルでみる外来語—」 陣内他編 『外来語研究の新展開』 おうふう
- 井上史雄 (2013) 「社会言語学と法則性—変異と変化と規則性—」 公開講座. 東京言語研究所主催. 東京言語研究所: 東京. 2013年2月23日
- 中尾俊夫, 日比谷潤子, 服部範子 (1997) 『社会学概論』 くろしお出版

〈論文〉

「確信犯」の意味・用法の変遷について

—誤用から意味変化へ—

佐々木 文彦

キーワード：誤用、意味変化、確信犯、コーパス

はじめに

次のような記事がある。

「△△は何も分かっていないくせにえらそうだ」などと、会議でのやりとりをツイッターで公開しているのです。社内の人間であれば、誰が会議に出ていて、どんな話がなされたか、一目瞭然です。もちろん確信犯で、中身も他人の批判が多いのですが、本人は「正論をソーシャルに発言している」と思っているようです。（2011.08.06 朝日新聞朝刊）（下線筆者以下同）

『広辞苑』（第六版）によると、「確信犯」は

①道徳的・宗教的または政治的確信に基づいて行われる犯罪。思想犯・政治犯・国事犯などに見られる。②俗に、それが悪いことと知りつつ、あえて行う行為。

とされ、本来の意味①は「道徳・宗教・政治」的確信に基づく「犯罪」であるが、この記事のような社内の内部情報や批判をツイッターで発信することはこの意味から外れるから②の「俗」な用法であると考えられるのであるが、はたして本来の①の意味と俗な②の意味と、どちらがよく使われるか、日常よく耳にするのはどちらであろうか、という疑問がこの研究の出発点である。

「文化庁月報 平成24年5月号（No.524）」^{（注1）}によると平成14年度の「国語に関する世論調査」で「確信犯」という言葉を「本来の使い方とは違う」意味で理解していた人は57.6%であり、「本来の使い方」の意味で理解している人（16.4%）の3倍以上という結果であった。

いわゆる誤用の使用率が正用を上回っていることを示唆する調査結果と言えるが、これほどまでに「誤用」の使用率が高いのであれば、これは既に「誤用」と呼ぶべき範囲を超え、「変化」と認めてもよいのではないだろうか。

本研究は、この言葉がなぜ誤用されるのかを検討し、言葉の意味・用法の変化の方向性を探ろうとするものである。

1. 「正用」と「誤用」——「国語に関する世論調査」より

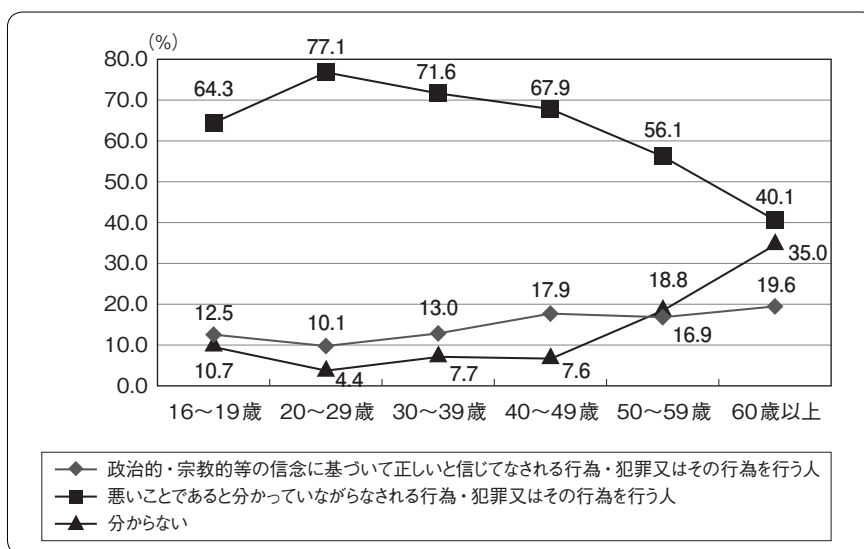
まず、「確信犯」という語において、何が正用で何が誤用かを確認しておくことにする。平成14年度の「国語に関する世論調査」では「確信犯」の意味について、「本来の意味」を、

政治的・宗教的等の信念に基づいて正しいと信じてなされる行為・犯罪又はその行為を行う人

とし、次の5つの選択肢から選ぶ形で調査がなされている。

- (ア) 政治的・宗教的等の信念に基づいて正しいと信じてなされる行為・犯罪又はその行為を行う人
- (イ) 悪いことであるとわかっていながらなされる行為・犯罪又はその行為を行う人
- (ウ) (ア)と(イ)の両方
- (エ) (ア)、(イ)とは全く別の意味
- (オ) 分からない

このうち、(ア)と(イ)と(オ)をグラフにしたのが次のグラフ1である。



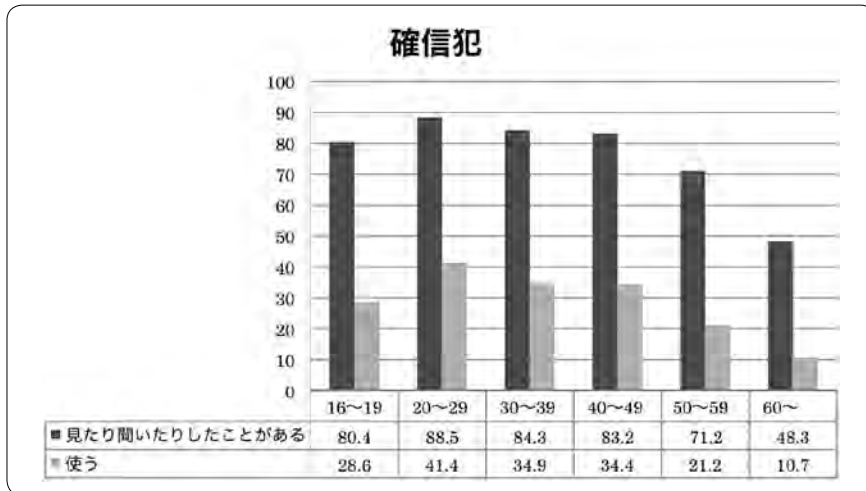
グラフ1 「確信犯」の意味の理解（世代別）

文化庁HP「平成14年度「国語に関する世論調査」の結果について」より転載

文化庁の言う「本来の意味」を「正用」、そうでない意味を「誤用」と呼ぶことにすると、「正用」で理解している人の割合は年齢が上がるにつれてわずかながら上昇しているのに対して、「誤用」をしている人の割合は20代をピークに次第に減少し、60歳以上ではピークの約半分程度になっている。また、この語の意味について「分からない」と答えている人は年齢が上がるにつれて増えている。

平成14年度の調査では、「この言葉の意味をどう理解しているか」について問う調査のほかに、「この言葉を聞いたり見たりしたことがあるか」を問う調査も行っている。「見たり聞いたりしたこ

とがある」か「使うか使わないか」を聞いているのであるが、「見たり聞いたりしたことがある」人と、「使う」人の世代別の構成をグラフにしたのが下記である。

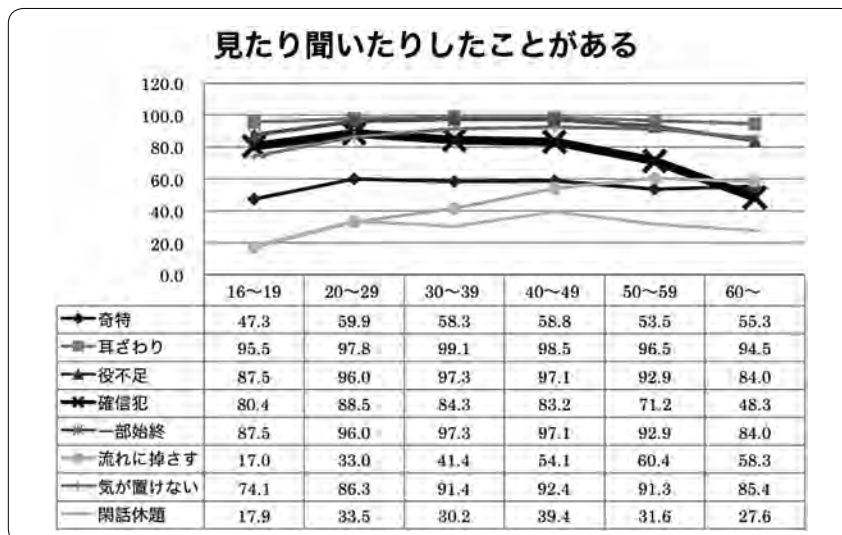


グラフ2 「確信犯」の認知率と使用率（世代別）

文化庁『世論調査報告書 平成14年度 国語に関する世論調査』（p.39）を元に作成

「グラフ2」を見ると、「確信犯」という言葉の認知率は20代の88.5%をピークに年齢が上がるにつれて減少し、60歳以上では48.3%すなわち半数以下となる。さらに「使う」人の割合を比べると、ピークである20代の41.4%に対して60歳以上は10.7%、つまり約四分の一である。

同じ調査のなかで行われたほかの言葉についての認知率・使用率を比較したのが次の「グラフ3」「グラフ4」である。



グラフ3 「確信犯」の世代別認知率比較

文化庁『世論調査報告書 平成14年度 国語に関する世論調査』（pp.36～43）を元に作成

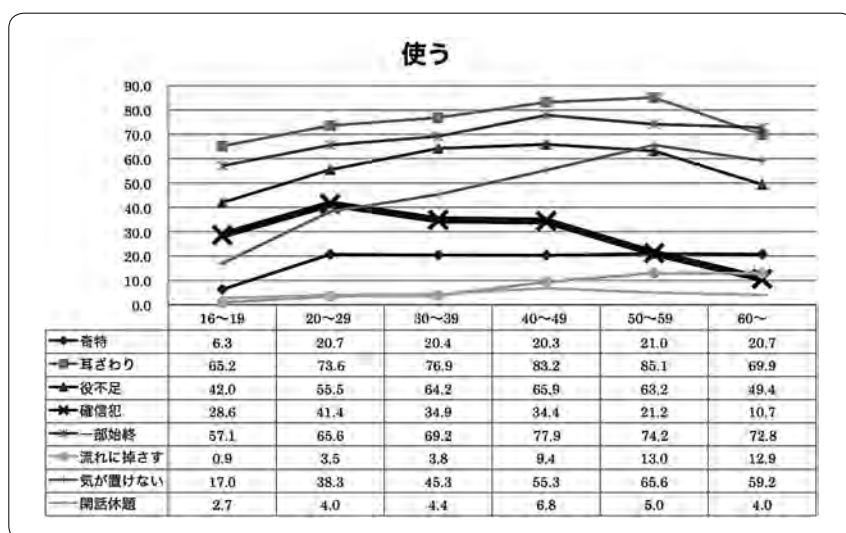
グラフ3の認知率を見ると、「耳ざわり」「一部始終」「役不足」「気が置けない」はすべての世代においてほぼ80%以上である。一方、「奇特」「流れに掉さす」「閑話休題」は20%～60%の間で推移している。前者を「高認知率群」、後者を「低認知率群」と呼ぶことにすると、「確信犯」は40代までは高認知率群に属しているが、50代・60歳以上と年齢が上がるにつれて低認知率群に向けて下降している。

グラフ4の使用率についても同様に二つの群に分けるとすると「高使用率群」は「耳ざわり」「一部始終」「役不足」,「低使用率群」に属するのは「奇特」「流れに掉さす」「閑話休題」であり,以上6語の所属は認知率と同じであるが,「気が置けない」は年齢が上がるにつれて「低」から「高」へと移行している。「確信犯」は認知率と同様「高」から「低」へと移行している。

この二つのグラフを言語変化の側面から読むならば,グラフを右から左に読むべきであろう。グラフ4の解釈は,

「確信犯」を除く全ての語において,高い年代から低い年代へ(つまりグラフを右から左へ)見ていくと,使用率は概ね下がっている。つまり,高齢の世代の人たちに比べて若年の世代の人たちはこれらの語を使わなくなってきている。特に「気が置けない」において使用率の減少が著しい。これに対して,「確信犯」だけは使用率が上昇している。

となる。要するに「確信犯」だけは以前よりも認知度も使用頻度も上がってきているのに,誤用率が上がっているのである。言葉の意味の経年変化について考えた場合,



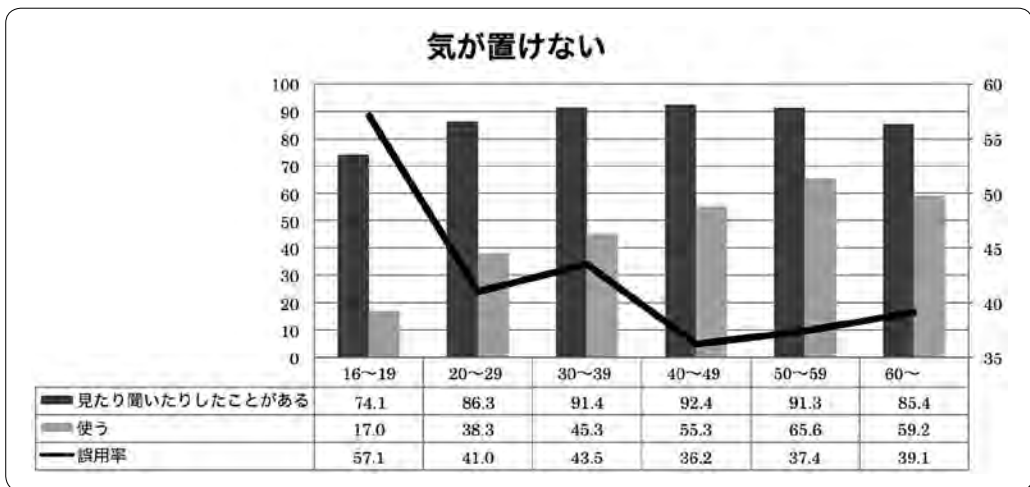
グラフ4 「確信犯」の世代別使用率比較

※文化庁『世論調査報告書 平成14年度 国語に関する世論調査』(pp.36~43)を元に作成

ある言葉が時代が下るにつれて次第に使われなくなり、高齢者はよくその言葉を知っていて正しく使うことが出来るが、若い人にはなじみがなく、誤解されて使われるようになる

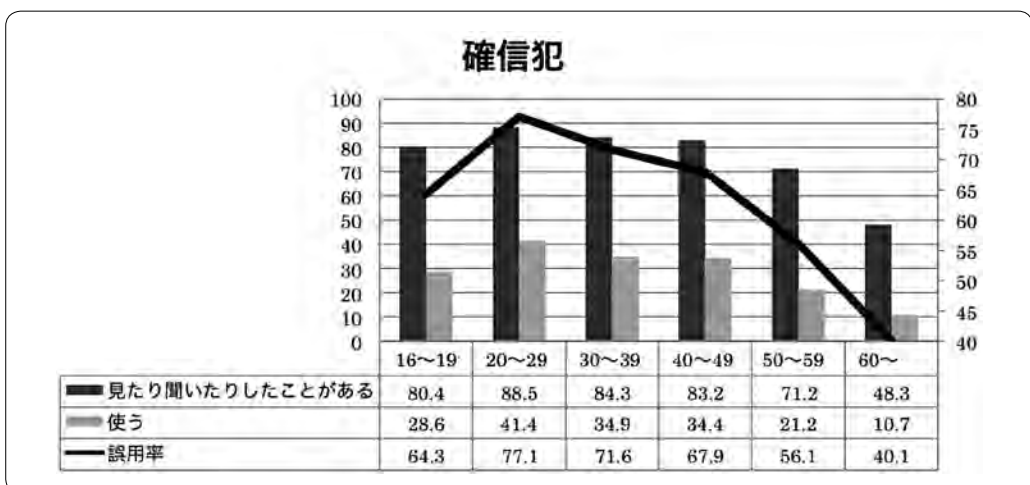
という説明が、「確信犯」以外の語についてはあてはまる。

さらに「確信犯」「気が置けない」の認知率・使用率・誤用率を比較したのが、次に掲げるグラフ5・6である。「気が置けない」に関しては高齢の世代から若年の世代へと使用率が下がり、誤用率が上がっている。つまり、



グラフ5 「気が置けない」の世代別認知率・使用率と誤用率の比較

※文化庁『世論調査報告書 平成14年度 国語に関する世論調査』（pp.36～43）を元に作成



グラフ6 「確信犯」の世代別認知率・使用率と誤用率の比較

※文化庁『世論調査報告書 平成14年度 国語に関する世論調査』（pp.36～43）を元に作成

認知率と使用率が下がるにつれて誤用率が上がる

と言える。使われなくなれば正しく理解されなくなり、正しく理解されないよくわからない言葉はしだいに使われなくなる、という説明が当てはまりそうである。

ところが「確信犯」についてはこの説明は成り立たない。「確信犯」という言葉そのものが60代以上の人にとってはそれほど認知されても使用されてもいない言葉であるのに対して、20代から40代の人にとってはよく知られている（三世代全体で84.9%）言葉であり、多くの人（三世代全体で71.6%）が「誤用」（イ）の意味で理解していることがわかる。つまり、「確信犯」については認知度と使用率が上がれば上がるほど、誤用率も上がっていると言うことができる。

そもそも「確信犯」という言葉は高齢の世代の人たちにはあまり認識されておらず、つまり、以前はあまり使われていなかった言葉であったものが、新しい用法（＝「誤用」）を持つ語として浸透してきた語と言えるのではないだろうか。とすれば、なぜこの新しい用法が20代～40代の人々の間に浸透してきたのかを考える必要がある。

次節ではこの「新しい用法」とはどのような意味と表現価値を持った用法なのかを考える。

2. 「正用」と「誤用」―国語辞典や日本語本、ウェブサイトでの記述―

「国語に関する世論調査」ではこの「誤用」の意味を

（イ）悪いことであるとわかっていながらなされる行為・犯罪又はその行為を行う人

と記述しているのであるが、国語辞典やいわゆる日本語本の類ではこの言葉の意味をどのようにに記述しているだろうか。以下、辞書等における「確信犯」の意味記述を参照する。^{（注2）}

『日本国語大辞典』（第二版）ジャパンナレッジ <<http://www.japanknowledge.com>>

- （1）法律で、政治的、道義的、思想的、宗教的な確信に基づく義務感または使命感によって行なわれる犯行。政治犯、思想犯などと呼ばれるものがこれに当たる。
- （2）俗に、トラブルなどをひきおこす結果になるとわかっていて、何事かを行なうこと。また、その人。

『広辞苑』（第六版）（2008/1/11）

- ①道徳的・宗教的または政治的確信に基づいて行われる犯罪。思想犯・政治犯・国事犯などに見られる。
- ②俗に、それが悪いことと知りつつ、あえて行う行為。

『岩波国語辞典』（第七版 新版）（2011/11/18）

政治的・思想的または宗教的信念に発して、それが（罪になるにせよ）正しい事だと確信して

行う犯罪。▽一九九〇年ごろから、悪いとは知りつつ（気軽く）ついしてしまう行為の意に使うのは、全くの誤用。

『明鏡国語辞典』（第二版）（2011/4/1）

①政治的・思想的・宗教的な信念に基づいてなされる犯罪。また、その人。自らの行為を正しいと確信してなされる思想犯・政治犯・国事犯など。②〔俗〕悪いこととわかっていながら、わざと行う発言や行為。また、それを行う人。「一時的発言で大臣が辞任する」▼①と同様、その背後には最終的に自らが正しいという確信がある。

学研『現代新国語辞典』（改訂第五版）（2012/12/11）

①自分の信念に基づき、正当な行為と確信して行われる犯罪。政治犯・思想犯などにみられる。
②〔俗〕悪いことだとわかっていながら、あえてその行為を行う・こと（人）。また、結果を予想した上で、その行為を行う・こと（人）。

『デジタル大辞泉』 ジャパンナレッジ<<http://www.japanknowledge.com>>

- 1 道徳的、宗教的または政治的信念に基づき、本人が悪いことでないと確信してなされる犯罪。思想犯・政治犯・国事犯など。
- 2 《1から転じて》悪いことだとわかっていながら行われた犯罪や行為。また、その行為を行った人。「違法コピーを行っている大多数の利用者が一だといえる」
[補説]「時間を聞きちがえて遅れたと言っているが、あれは一だよね」などのように、犯罪というほど重大な行為でない場合にも用いる。2の意はもともと誤用とされていたが、文化庁が発表した平成14年度「国語に関する世論調査」では、50パーセント以上の人が1ではなく2の意で用いると回答した。

いわゆる「日本語本」から、『日本語どっち!?』（2006 北原保雄著・金の星社）の例を見る。

「確信犯」という言葉の、正しい意味はどちらでしょう？

A 悪いとわかっていながら犯罪を行うこと。

B 自分の信念にもとづいて、正しいことだと信じて行う犯罪のこと。

正解B [解説]「確信犯」は、政治的・思想的・宗教的な信念にもとづいて、自らの行為を正しいと確信して行う犯罪のことで、政治犯や思想犯に対して使われることが多い言葉です。これを悪いとわかっていながら犯罪を行うという意味で使うのはまちがいです。悪いとわかっているのではなく、正しいという強い信念、確信をもっておこす犯罪が「確信犯」なのです。（pp.15-16）

インターネットのサイト「ジャパンナレッジ」のエッセー「日本語、どうでしょう?」(第56回「確信犯」, 間違って使ってませんか? 2011年5月9日)

「電車が遅れて会議に出られなかったと言っているけど、あれは確信犯だね」という言い方をすることがある。だが、この場合の「確信犯」は本来の意味の使い方ではないということをご存じだろうか。

「確信犯」のもともとの意味は、政治的、思想的、宗教的な確信に基づいた義務感や使命感によってなされる犯行のことで、たとえば、思想犯・政治犯などと呼ばれるものがこれにあたる。そもそも「確信犯」とはドイツの法哲学者ラートブルフ(1878-1949)が提唱したもので、日本でも戦前から論議の対象となっている法律的な概念なのである。

ところが、最近ではその正しい意味が忘れ去られてしまい、冒頭の例文のような、犯罪というほど重大な行為とはいえない場合でも用いられるようになってしまったというわけである。平成14(2002)年度の「国語に関する世論調査」でも、50パーセント以上の人が重大な犯罪とはいえない行為についても使うと答えている。

そのため国語辞典でも、本来の意味の他に、悪いことだとわかっていながらあえて行う悪事という意味を付け加えたものも出始めている。

ことばは長い間に本来の意味とは違う意味で使われてしまうことが決してないわけではない。だが、ことばの規範という観点からすればやはり誤用といえるので、辞書をしっかりと読んで正しい意味をちゃんと理解したうえで使うようにしたい。——神永暁(小学館国語辞典編集部)

http://club.japanknowledge.com/jk_blog/nihongo/20110509_056.html

以上、いわゆる「誤用」としての「確信犯」の理解として多くの記述に共通するのは、

悪いことだとわかっていて行う犯罪や行為

というものである。この前提で、「確信犯」のいわゆる誤用に対する各記述の立場を分類して整理すると次の四つの立場にまとめることができる。

1) [俗語として扱う立場]

『日本国語大辞典』『広辞苑』『明鏡国語辞典』『現代新国語辞典』では[俗]あることを断わってこの意味を載せている。

2) [新用法として認める立場]

『デジタル大辞泉』は《1から転じて》としてこの意味・用法を認める立場を取っており、[補説]に平成14年度の「国語に関する世論調査」を引いて、新しい用法は「もともと誤用とされていたが」「50パーセント以上の人」が選んだとして、事実上容認する立場に立っている。

3) 「誤用とし、認めない立場」

『岩波国語辞典』は「全くの誤用」としてこの意味・用法を認めない立場を取っている。『日本語どっち!?』を含め、いわゆる日本語本も管見の範囲ではすべて誤用とし、この用法を認めない立場である。

4) 「誤用ということを理解した上で用いることをすすめる立場」

「日本語、どうでしょう？」では「ことばは長い間に本来の意味とは違う意味で使われてしまうことが決してないわけではない」としながらも、「やはり誤用」であるから「正しい意味をちゃんと理解したうえで使う」ことを推奨している。

さて、以上に見た辞書や日本語本、エッセーでは「誤用」の存在を認めた上で、それぞれの立場で扱っているのであるが、例えば『日本語どっち!?』が示す、

A 悪いとわかっていながら犯罪を行うこと。

B 自分の信念にもとづいて、正しいことだと信じて行う犯罪のこと。

について、Bの「正用」からどうしてAの「誤用」が生じたのか。この経緯について触れたものは管見の範囲では見当たらない。また、正用から外れた用法の意味として「悪いと分かっているながら犯罪（悪事）を行う」という解釈は、はたして妥当なのだろうか。

次節では、小説や新聞の用例で「確信犯」がどのように用いられているかを観察することによって、「正用」と「誤用」の違い、「正用」からどのようにして「誤用」が生じたのかを考えてみる。

3. 「正用」と「誤用」—小説や新聞の用例—

「確信犯」の用例を「青空文庫」「明治の文豪」「新潮文庫の100冊」「カッパ・ノベルス」等の手元にある電子ファイルの小説で探してみたところ、見つかったのは次の例だけであった。

「あなたの狙いはなんなの、永田先生？」

自分も立ったままコーヒーをすすりながら、涼子は尋ねた。

「そうよ」

と、奈津が頷く。

「永田先生がひかるくんの手術をしたから？」

「ええ」

あまりにもあっさり認められて、涼子のほうが戸惑った。完全な確信犯だ。狂っているとは思えないが、普通人のような罪の意識はない。

山崎 洋子『聖母の牙』（光文社 カッパ・ノベルス）（1987/11）

聖母のような女性「奈津」が三人もの人間を惨殺したという設定である。政治的・宗教的信念に基づいて行われた犯罪ではないが、何らかの信条のために必然性があるという犯行に及んだという意味を想像させる文脈である。会話をしている「涼子」が「奈津」に対して「完全な確信犯だ」と判断したのは「普通人のような罪の意識はない」ということが根拠となっている。

このような例は「正用」なのだろうか「誤用」なのだろうか。政治犯や思想犯でないという点で、辞書が説明するような正用ではないと考える。しかし、犯行に及んだのには本人なりの何らかの明確な動機があって、成り行きや衝動で犯行に及んだのではないという点では政治犯や思想犯に共通するものがあると考えてよい。

小説では十分な分量の用例を観察することが出来そうにないので、新聞記事のデータベースを利用して検索してみた。

まず、朝日新聞の記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」を利用して1879年～1984年の記事を「見出し+キーワード」で検索したところ、次の記事が最も古い記事であった。(注3)

1935/06/28 (昭和10) p.13

[上告の理由なしと検事棄却を希望 大川博士らの上告審]

本件のごとき確信犯は本人に對する科刑は殆んどその用をなさぬ この科刑は一般警戒のための刑の量定である

※五一五事件に民間側従犯として関与した大川周明博士らの裁判

この後も次のようないくつかの記事に「確信犯」の語が見えるが、いずれも政治犯・思想犯の場合のみに用いられている。

1952/06/11 (昭和27) 夕刊 p.3

[新たな課題 少年思想犯 サジ投げる家裁 メーデー騒擾の場合]

C少年(一八)を観察所に収容したが心身テストを拒み同罪の少年たちに思想教育をはじめた、隔離施設もないので、もてあまし地検に逆送、結局これらの確信犯人(自己の信念を絶対正しいと信じ込んで曲げない)に近い思想少年には従来の矯正教育では歯がたたないことがわかった

1955/04/28 (昭和30) p.1

[社説 死刑廃止運動の問題点]

一級凶悪犯に死刑を課すべきか否かは、実証的、科学的立場から決定されるべきである。が、確信犯の場合はどうするか。(中略)が、それだけにその政治運動化を警戒すべきことを警告するとともに、その運動が確信犯に対して、いったいどのような見解をもっているかを、ハッキリ知りたいと思うものである。

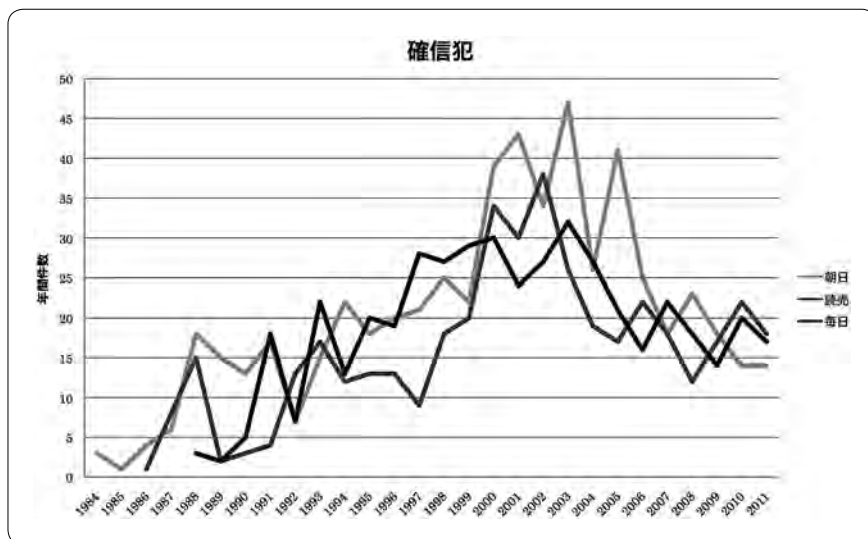
家庭と仕事を両立させようとしている時に、どうしても家事に手が回らなければ「やろうと思ったのにできなかった」と考えるのがAさんの考え方であるが、「確信犯」の考え方は「無理にやろうとしなくても大丈夫。それよりも無理をしないで長い目で両立を心掛けた方がよい」というものである。完璧にこなせないことは最初から覚悟している、というのが確信犯的考え方である。このあたりから、誤用である「悪いことであるとわかっていながらなされる行為」の用法が始まったと言えるのではないか。家事に手が回らないことは犯罪でも何でもないが、「主婦が家事を放棄する」という捉え方をすれば「罪悪感」を抱き自己嫌悪に陥ることになる。けれども、適度に手抜きをする（＝完璧を目指さない）ことによって家庭と仕事が両立できるという大義名分が果たせるのだから、むしろその方が理にかなっていると見ることもできる。

「確信犯」は一見過失や罪悪に見えることが、実は本人の意図によって計算されて起きていることであり、それが目の前の失敗や罪よりも価値のあるものを生み出すと本人が確信していることから生じるものである。

「確信+犯」と分解したときに「確信」が政治や宗教以外の個人的な価値にも適用されるようになり、「犯」が犯罪だけでなく、一見失敗やミスに見えるような事柄についても用いられるようになって生じたのが新しい用法なのである。

4. 新聞の用例の推移

1984年以降の新聞記事データベースを利用して「確信犯」を検索し、1年間のヒット件数の推移を示したのが、次のグラフである。^(注4)



グラフ7 新聞の全文検索によるヒット数

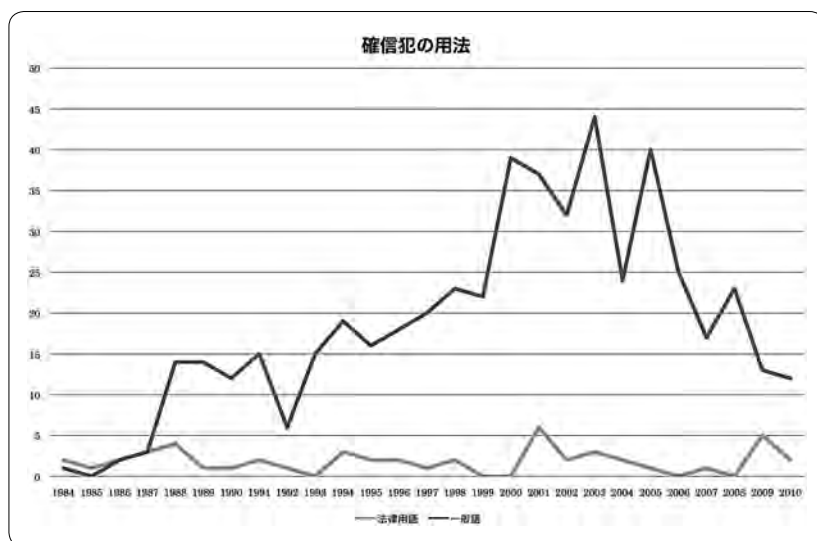
データベースで検索可能になるのは、朝日新聞が1984年から、読売が1986年から、毎日が1988

年からであるが、概ね90年ごろから増え始め、2002年（平成14年）ごろがピークとなり、少しずつ減少しているのがわかる。現時点では1984年以前の用例を定量的に収集することができないので、新聞紙面において注釈が必要であった1960年から25年間の用例数の推移を観察することができないが、前掲のKDDの例（1980年）あたりから徐々にこの語が法律用語としてではなく一般語として、少しずつ意味をずらして使われるようになったのではないかと推測される。

そして、1984年以降の朝日新聞の記事に出現する「確信犯」について、いわゆる思想犯を指している「法律用語」としての用法と、

決勝点を決めたMFイニエスタ選手はユニホームを脱ぎ、「いつも我々と共に」と記したアンダーシャツを見せ、警告を受けた。確信犯の行動は、亡き親友へのメッセージ。「勝利を彼にさげたかった」と語った。(2010/07/14)

のような「一般語」としての例がそれぞれ何例あるかを折れ線グラフにして示したのが次のグラフ8である。新聞の用例を見る限り、いわゆる「誤用」としての用法が「正用」を大きく上回っていることがわかる。



グラフ8 朝日新聞における用法別出現数

5. まとめ

1960年ごろまでは馴染みの薄かった「確信犯」という語が1980年ごろから政治犯以外の犯罪でも使われるようになり、80年代からは犯罪以外の文脈で用いられるようになって、2000年ごろに向けて盛んに使用されるようになった。平成14年度の「国語に関する世論調査」当時の60代以上の人たちにとって、「確信犯」という語はそれほど馴染みのある言葉ではなかったが、1980年代半ばご

ろからこの言葉が犯罪以外の日常の場面で、

「うっかり悪いことをしたり失敗したりしているように見えて、実は隠れた目的のために本人がその価値を確信して意図的に行っている」

という意味を持つ言葉として若い世代を中心に用法を広げ、「本来の意味」を上回るようになったと考えられる。これは世論調査における意識の変化だけでなく、現段階では「新聞の用例数調査に関しては」という限定つきではあるが、本来の法律用語としての用法はごく一部に限られ、誤用とされる一般語としての用法の方がむしろよく用いられると言える。

本来は思想犯や政治犯を意味する法律用語であった「確信犯」という語が、「うっかりではなく意図的に行っているのだ」ということを表すのに便利な語として用法を確立させたものであり、もはや誤用と呼ぶべきではなく新用法であると考ええる。

今後、これに類する語について調査を重ね、「誤用ではなく新用法である」と判断する基準や根拠について検討していく所存である。

(注1) 文化庁のウェブサイト http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h14/kekka.html による。

(注2) 下記2点については誤用に関する言及なし。『新明解国語辞典』（第七版）（2011/12/1）、『集英社 国語辞典』（第三版）（2012/12/14）

(注3) これより古く「京大滝川教授と論戦を交え「教育刑と確信犯人」に関して相争い、他方マルキシズム刑伝理論を批判して余蘊がない」（時事新報1931.11.30-1932.1.7連載記事）という例があることを橋本行洋氏（花園大学）よりご教示賜った。

(注4) 「確信犯」という語の誤用の問題などに言及したいいわゆるメタ言語的な記事は除外した。グラフ8も同様。

参考文献

北原保雄（2006）『日本語どっち!?』金の星社

文化庁文化庁国語科（2003）『日本人の国語力——国語に関する世論調査〈平成14年度（平成14年11月調査）〉（世論調査報告書）

付記1：本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」（代表：新野直哉）の共同研究発表会（2012.12.27国立国語研究所）において行った口頭発表「誤用から見た言語変化の方向性—“確信犯”“敷居が低い”を例に一—」を元に作成したものである。プロジェクトリーダーである新野氏をはじめ、当日の質疑応答において有益なご意見と情報を賜った参加者の皆さまに御礼申し上げます。

付記2：本稿は2013年度宮田研究奨励金特別研究「日本語の意味・用法の歴史的研究」の研究成果の一部である。

〈研究ノート〉

日中バイリンガル幼児の
コードスイッチングについての考察

高 源

キーワード：バイリンガル，コードスイッチング，会話機能分析

1. はじめに

国際経済の発展に伴い、海外から日本へ移住する家庭や日本における国際結婚、または仕事で海外に行ったり、戻ったりする日本人家庭が増えてきた。親と外国に住み、家庭内は母語を使い、家庭外は現地語を使い、2つの言語を同時に使用することも可能である。しかし、言語発達の途中段階のバイリンガル幼児の発話において、話し相手、会話の状況によって、2つの言語が交互に現れることがある。この現象を「コードスイッチング」(以下、CSと略称する)と呼び、バイリンガル幼児における言語発達の問題の1つとなっている、と述べている。

今まで、バイリンガル幼児においてCSの研究は、それぞれの語彙不足が原因とされ、取り上げたものが多い。しかし、Gumperz(1982)は言語習得途中段階の幼児の場合、周りの環境や話し相手に大きく影響されるので、会話の場面や話し相手の言語能力を考慮しなければならないと述べている。本研究では、バイリンガル幼児におけるCSについて考察する。幼児から両親への発話におけるCSや両親から幼児への発話における幼児のCSの割合を対比し、コミュニケーション・ストラテジー相互行為的アプローチを明らかにする。

2. 先行研究

Bentahila&Davies (1992)は「言語の優勢」という概念を使い、言語能力とCSのタイプの関連を示した。言語の優勢とは、話し手の有する2言語のうち、能力が高い言語が優先的に使われる状況を指す。しかし、2言語能力の相違に注目し、CSのタイプを分類した研究は、産出されたCSのみを分析するだけでなく、その能力と関連を示し、社会的背景や、言語の役割、参加者の立場なども含め、様々な要因を考慮する必要があると田崎 (2006) は述べている。Fantini (1978) はバイリンガル幼児は3歳頃までに、語形を変化させることができるようになるが、言語システムに関しては1つであるとしている。第3段階に到達する4歳頃まで、語彙混合率が前段階より減少し、文法的な文の生成が可能になる。

3. 研究方法

3.1 研究対象

本研究の対象児 A は、両親は中国人であり、日本（東京）で生まれた。日本育ち 5 歳 2 ヶ月（録音資料を取り初めた年齢は 4 歳 8 ヶ月）の女兒である。家庭は、父親（31 歳）、母親（28 歳）母親方の祖母（54 歳）が同居している。

3.2 幼児の言語環境

①同居中家族の母語	父親：中国語（標準語，以下同様） 母親：中国語 祖母：中国語
②家族間コミュニケーションにおける言語	中国語と日本語
③幼児の言語生活	家庭：中国語と日本語
	社会：（主に保育園）日本語
	友人：（父親の義兄のこども，8 歳，日本生まれ，日本育ち，中国語，日本語両方話せる）中国語と日本語

3.3 分析方法

本研究は 2012 年 6 月 1 日から 2013 年 3 月 30 日にかけて、週 2 回、毎回 10 分程度の家族会話（主に母親との会話）を収録した。会話中行った幼児のコードスイッチングを中心に考察する。最初の録音は無意識的で、夕食中のこどもと家族の自然会話（主に母親との会話）であるが、3 ヶ月後に同じ場面に出てくる言葉を対比しやすくするため、筆者は会話環境を設定した。「絵を描くこと」、「テレビを見ながら話をする事」を主な場面とした。

4. 結果と分析

- 1) 日本語能力が相対的に低い祖母に対する会話で、幼児の CS はもっとも多く発生することが観察された。幼児は会話の参加者の言語能力によって言語選択を行なうことがわかった。これは Tarone (1977) の相互行為的アプローチにおけるコミュニケーション・ストラテジーを支持するものである。つまり、やりとりの中で話し手と聞き手が言語知識、文化知識の不足を補充し、互いに理解できるようにしていたのだと考えられる。
- 2) Genesse (1989) の研究では、年齢に伴って、CS の発生率が減っていくと述べているが、本データの分析結果にはあてはまらないことがわかった。しかしながら、年齢の増加につれ、「文中」CS は減っていく。その一方で、「文間」CS は増えていく傾向が見られた。それは (Fantini, 1978) の「統一言語仮説による第 3 段階に到達する 4 歳頃まで、語彙混合率が前段階より減少」という先行研究にあてはまるのである。

参考文献

- Bentahila & Davies (1992) Code-switching and language dominance In R. J. Harris (Ed.), *Cognitive processing in bilinguals*, North-Holland: Elsevier Science Publishers B.V., pp. 443-459
- Fantini, A. E. (1978) Language acquisition of a bilingual child: A Sociolinguistic Perspective to Age 10. Clevedon: Multilingual Matters.
- Genesee, F & Nicoladis, E & Paradis, J (1995) Language differentiation in early bilingual development pp. 611-631
- 田崎敦子(2006)「コードスイッチング研究の概観—多言語社会のコミュニケーション分析に向けて—」『日本文化と日本語教育』増刊特集号 pp. 54-84

〈研究ノート〉

ポライトネスの普遍性に関する日西比較

—日常会話における依頼を中心に—

Miguel Ortega Pereira

キーワード：ポライトネス，依頼，フェイス，日本語，スペイン語

1. 先行研究と課題

語用論の中で強調される分野は対人関係に関連する“Politeness”（以下「ポライトネス」と称する）である。Brown&Levinson (1978, 1987) は初めて英語，タミル語及びツェルタル語という本質的に無関係な言語の対照研究を行い，多種多様な場面における使用言語を分析し「ポライトネス—言語使用における，ある普遍現象—」を主張した。

しかし，現在は逆の捉え方として能動的に普遍性に対立しているコミュニケーション・ストラテジー選定に影響を及ぼす文化的要素に基づく理論がすでに注目されている。Wierzbicka (1991), Hernández Flores (1999) 及びMatsumoto (1988) は様々な文化に絡む概念を提唱し，Brown&Levinsonのモデルに強固に反対した。反対派の概念は自己エートスよりも主に家族及び集団エートスのほうが重要されている社会の中で運用されている。西洋諸国におけるポライトネスと東洋諸国におけるポライトネス（特に敬語体系がある言語）は著しく相違する。

本稿では，まだ詳しく対照されていないラテン語派に属するスペイン語（スペイン王国領域のみ）と日本語における依頼表現を中心に比較研究を行い，ポライトネス・ストラテジー及び依頼選定における類似点と相違点にフォーカスする。

2. 先行研究と調査概要

Blum-Kulka (1982)によるDCTに基づきスペイン語と日本語の調査を行い，収集したデータをBrown&Levinson (1978) が提唱したポライトネス・モデルを通じて分析する。DCTとは，特定の発話行為を分析するために研究者があらかじめ設定した多様な場面に応じて対象者が記入する会話テストである。また，Brown&Levinsonが提供しているフェイス威嚇発話行為の深刻度つまり重さの公式における変数の働きを操り，負担(Rx)を除いて，異なる社会的距離(D)と力(P)の値を持つ4つの会話場面を設定する。

会話1 自分の家で（①家族・兄弟） $W_x = \downarrow D(S,H) + \downarrow P(H,S) + Rx$ 場面：新車貸し

会話2 大学の食堂で（②友人同士） $W_x = \downarrow D(S,H) + \uparrow P(H,S) + Rx$ 場面：科目相談

会話3 電話で (③相手が目上との会話) $W_x = \uparrow D(S,H) + \uparrow P(H,S) + R_x$ 場面: 予約時間の変更

会話4 家の玄関で (④相手が目下との会話) $W_x = \uparrow D(S,H) + \downarrow P(H,S) + R_x$ 場面: ボヤ避難

3. 結果と考察

平成25年5月中旬から12月下旬まで日本とスペインで調査を実施した。対象者数はスペイン語母語話者130人と日本語母語話者130人である。男女や教育や職業のような属性を問わず無作為抽出を行った。ただし、性別(男女区別)と年齢を三種類に区分した。定めた年齢層及び各会話のストラテジーとその合計人数は以下の通りである。

年齢層1: 18歳から25歳迄 年齢層2: 26歳から49歳迄 年齢層3: 50歳以上

会話1 各言語合計		
ストラテジー	日本語	スペイン語
BALD ON RECORD	23	15
POSITIVE POLITENESS	77	85
NEGATIVE POLITENESS	28	17
OFF RECORD	2	13
NO FTA	0	0

会話2 各言語合計		
ストラテジー	日本語	スペイン語
BALD ON RECORD	22	9
POSITIVE POLITENESS	5	38
NEGATIVE POLITENESS	80	78
OFF RECORD	23	5
NO FTA	0	0

会話3 各言語合計		
ストラテジー	日本語	スペイン語
BALD ON RECORD	6	11
POSITIVE POLITENESS	0	3
NEGATIVE POLITENESS	118	114
OFF RECORD	6	2
NO FTA	0	0

会話4 各言語合計		
ストラテジー	日本語	スペイン語
BALD ON RECORD	95	93
POSITIVE POLITENESS	4	4
NEGATIVE POLITENESS	27	32
OFF RECORD	1	0
NO FTA	3	1

両言語による小規模のストラテジー差異以外、特に「会話②科目相談」、フェイス威嚇発話行為の深刻度つまり重さの公式の社会的距離(D)と力(P)という変数を操っても、両言語のポライトネス・ストラテジーの傾向はほとんど一致していることがわかった。

会話① 新車貸しと・「ポジティブ・ポライトネス」は全体の62%を占めている。

会話② 科目相談・「ネガティブ・ポライトネス」は全体の61%を占めている。

会話③ 予約時間の変更・「ネガティブ・ポライトネス」は全体の89%を占めている。

会話④ ボヤ避難・「オン・レコード」は全体の72%を占めている。

Brown&Levisonのポライトネス・モデルを用いて、DCTを通して日本語とスペイン語における依頼表現ストラテジーが一致することが証明できた。また、「会話②」における相違点は、社会的距

離(D)と繋がっており, Brown&Levinsonのモデルの下で考察できる。つまり, Brown&Levinsonのモデルは西洋あるいはアングロサクソン偏見で構成されているとは言えず, 実際に文化的要素の働きをモデルに具現できる枠組みだと考えられる。

参考文献

- Brown, P. & Levinson, Stephen C. (1978, 1987) Politeness. Some universals in language usage. Cambridge University Press.
- Blum-Kulka, S., House, J. and Gabriele, K.(1989) Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies. Ablex Publishing Corporation.
- Wierzbicka, A. (1991) Cross-Cultural Pragmatics: the semantics of human interaction. Mouton de Gruyter.
- Hernández Flores, N. (1999) Politeness Ideology in Spanish Colloquial Conversation: The Case of Advice. International Pragmatics Association, Pragmatics 9-1.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. Journal of Pragmatics 12, 403-426.

2013年度卒業研究（論文）題目一覧

11100001 秋本 将也

「高齢化社会と介護ビジネス」

11100003 秋元絵葉里

「宮沢賢治作品における『銀河鉄道の夜』の位置付け」

11100004 伊藤 理沙

「漫画・アニメのメディア化におけるファンの在り方」

11100005 井上 美希

「人と心とクラシック」

11100007 殷 勤イ

「現代の変化する女ことば」

11100008 于 慧慧

「異文化における言葉から生まれる誤解—日中対照の観点から—」

11100009 于 揚

「中国の日本企業と人材」

11100010 植田明輝人

「ら抜き言葉から見た若者言葉と言葉の揺れ」

11100011 宇田川 透

「明治期以降の日本における新漢語の生成について」

11100012 内田 祐二

「日本における多言語状況の実態」

- 11100013 遠藤 一眞
「流行語の変遷—消えていく言葉と残る言葉—」
- 11100015 王 佳
「ヒンドゥー教の成立とインド」
- 11100016 王 佳興
「北京語の儿化現象について」
- 1100017 翁 小春
「中国の閩方言について」
- 11100018 王 耀琪
「気から始まる慣用句について」
- 11100019 王 蘭英
「異文化コミュニケーション—言語による異文化コミュニケーション—」
- 11100020 大粒来沙織
「係り結びの衰退と消失に関する研究」
- 11100023 小川 伸明
「若者が使用する省略語について」
- 11100025 甲斐知恵子
「語彙調査による“ことば”からみたジブリとディズニーの世界」
- 11100027 川島 智己
「ゆとり世代が考える脱ゆとり」
- 11100029 韓 平
「在日外国人の子どもの母語教育」
- 11100030 咸 明花
「現代人の神経症」

11100031 邱 晶晶

「日本語教育における理解しやすい文法説明」

11100035 倪 聖愛

「日本語における外来語の発展」

11100036 崔 ラン

「中国観光客の誘致とインバウンド観光の発展」

11100037 齋藤 斐斗

「国語教科書における漢語語彙の需要について」

11100039 重山 直哉

「2ちゃんねる用語の浸透」

11100040 芝山 稜大

「日米比較研究—野球とベースボールの違い—」

11100041 清水 龍介

「人間関係におけるコミュニケーションの心理と必要性」

11100042 謝 敏

「日本語における曖昧さ」

11100044 庄 海英

「日中の諺の意味変化について」

11100045 徐 進勇

「日本語教育における教育漢字の日中対照研究」

11100048 須田 勇大

「現代の日本語における『ちょっと』の考察とその教育」

11100049 ソン ガギ

「中国における日本語教育研究」

11100052 武田 未来

「役割語から見たお嬢様像の変化」

11100053 大洞 昂太

「南総里見八犬伝の内容から考察する作者の考え」

11100054 沈 云峰

「呉語（上海話）（蘇州話）と日本語の対照研究」

11100055 陳 毅凡

「デジタル一眼レフカメラの現状と展望」

11100056 陳 健

「日本のプロサッカーの現状と未来」

11100057 陳 梅英

「日中言語行動文化の対照研究」

11100063 トラン ティン タン チャン

「日本語とベトナム語の慣用句の比較分析―目に対する概念に注目して―」

11100064 ナスプキナ エレナ

「日本語とロシア語の自称詞と他称詞」

11100065 成田 哲弥

「芥川龍之介『羅生門』と『今昔物語集』の比較分析」

11100066 二宮 千尋

「『古事記』からみる日本の神々の話し言葉の歴史」

11100067 白 露

「場面に相応しい話し方―日本語母語話者と中国語母語話者の比較―」

11100068 範 弘宇

「要求表現の使い分けについて―ポライトネス理論に基づく間接度に関する考察―」

11100069 費 曉薇

「日本人と中国人の価値観の相違点—映画に対する感想から—」

11100070 付 媛芝

「中国河北省方言と標準語の対照研究」

11100073 藤谷 航平

「スポーツ語彙の時代的変遷について」

11100074 星谷奈緒香

「日本で使用されているジェスチャーについての留学生の認知度」

11100075 馬 琳

「中国人日本語学習者のための日本語と中国語の複合語の比較」

11100076 松岡 諒

「『舞姫』太田豊太郎に対する明治の人と現代の人の反応」

11100077 松本 翔太

「現代のコミュニケーションにおけるSNSの重要性」

11100079 村田 大河

「FPSの中毒性からくる衝動について」

11100080 山口 清隆

「オノマトペとは何か」

11100081 山下 未来

「大学生の敬語使用に関する難しさの傾向」

11100084 吉水 水斗

「教育やサブカルチャー、慣例から考察する『現代の若者は甘やかされている』」

11100086 林 燕

「日本における教育格差—親の所得によって子供の将来—」

11100087 林 麗

「キリスト教が日本に与えた影響」

11100088 渡辺 和樹

「日本食からみる日本文化について—伝統的なコメ文化の歴史と日本食の海外進出—」

11100089 渡辺 将吾

「新しい音楽ジャンルの分類試案—曖昧さの解消を目指して—」

11100090 有銘 一子

「民俗学的見地からみる琉球言語について」

11100091 生田 桃子

「化粧品と化粧文化」

11100092 石川 光穂

「アパレル業界における今後の課題と挑戦」

11100093 柴田 星羅

「日本人の名前の変化と実態」

11100094 須藤 千晶

「ラヴェルとドビュッシーの人生から曲を考察する」

11100901 侯 文舒

「『断り』表現についての日中対照研究」

11100902 鈴木 歩美

「やわらかさを表すオノマトペについてのクオリア分析」

11100903 孫 亜男

「ことわざから見る中国と日本の違い」

11100904 張 春利

「非言語コミュニケーションにおける顔の表情、視線、姿勢と身体動作の役割」

11100905 パン ヨンイン

「日本の少子高齢化社会について」

11100906 武 傑

「日本語から現れる文化—中国語との対照研究から—」

11100907 柳 相旭

「現代韓国語における『日本語の表記法』の改訂案」

11100908 劉 思キ

「日本語音声教育における中国人学習者の発音指導研究」

11090076 大井麻祐子

「現在の若者語の特徴」

11090077 宮原 佑太

「パンクロックの歌詞から見る—日・英・米の年代別社会批判の動向—」

編集後記

『明海日本語』は、明海大学日本語学科の機関誌として発行され、今回が第19号となる。

10, 11 合併号 (2006) 以来、研究を活性化するため、大学院生の論文の掲載に門戸を開いた。また、13号 (2008) 以来、「研究ノート」を設けて、教員・院生・学生の研究エッセンスを要約して伝えられるよう配慮した。

昨年は、18号の臨時増刊号の発行も行った。明海日本語学会から今後もより多くの発信の機会を提供していきたい。現在はWeb上での閲覧ができるようになっている。

提出された論文と研究ノートは、日本語学科専任教員が審査し、場合によっては書き直しを命じ、あるいは掲載を認めないこともある。教員の投稿論文も、相互に審査し、採否については院生と同様の措置をとった。つまり本誌掲載の論文は、レフリー付きの、学術雑誌並みの価値を持つ。なお大学院生の投稿に関しては、これまでと同様、相互に原稿を交換して書き直しをした。

19号での論考の配列は、論文テーマ相互の関連によった。また、日本語学科学生の卒業研究の題目を掲載する。大学での学びの成果として、卒業記念、思い出となることを期待したい。

本号の編集には、大学院博士後期課程の上村健太郎・新妻奈緒美があたった。特に、上村健太郎氏は、院生間での原稿の調整、印刷会社との連絡等、多岐にわたり尽力してくれた。

また、本学教員の荻原稚佳子が卒業研究題目の整理にあたった。

2014年2月
西川寛之

「明海日本語」編集規定

- (1) 本誌は、明海大学外国語学部日本語学会内の編集委員会によって編集される。
- (2) 掲載論文は、明海大学外国語学部日本語学会会員および学术交流提携校の教員ならびに明海大学大学院応用言語学研究科関係者によるものとする。
- (3) 論文は、未公刊の学術論文に限る。
- (4) 論文の分量は、ワープロ打ちで、学術論文 A4 判 10 枚（12,000 字程度）、研究ノート A4 判 2 枚（2,400 字程度）以内とする。
- (5) 論文の採否は、編集委員会が決定する。
- (6) 論文の提出方法は、電子メール送信又はフロッピー郵送に限る。
- (7) 原則として、毎年 1 回、学年度末に発行する。

（平成 26（2014）年 2 月 15 日修正）

明海日本語ホームページ

<http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/>

電子メールアドレス“明海日本語”〈meikai_nihongo@yahoo.co.jp〉

「明海日本語」第 19 号

2014 年 2 月 26 日 印刷

2014 年 2 月 26 日 発行

編集者 明海大学日本語学会

発行者 代表者 柳澤 好昭

発行所 明海大学日本語学会

〒279-8550 千葉県浦安市明海 1

電話 047-355-5120

印刷所 (株) 外為印刷

〒111-0032 東京都台東区浅草 2-29-6

電話 03-3844-3855

MEIKAI NIHONGO

Meikai Japanese Language Journal

No. 19

2014

CONTENTS

Articles

Historical Geography of Politeness

Word History by Google Ngram Viewer and Google Trends... INOUE, Fumio (1)

A Study of Change in Use of New Words and Vogue Words

– In using Google Trends and Newspaper Article Databases –

..... KAMIMURA, Kentaro (11)

Current State and Considerations Concerning Language Usage at Public Facilities

– The Case in the 23 Wards in Tokyo – ZHANG, Hai Yan (21)

A Study of Teaching Methods for Japanese Synonyms

– “The Basic Japanese Dictionary,” An Example of Printing Verbs

for a Japanese Dictionary – IWASA, Yasuo (33)

The Advantages of Study Abroad for Japanese Language Learners

– The Factors Behind Wrong Answers in JLPT Listening Sections –

..... NISHIKAWA, Hiroyuki (45)

A Case Study Analysis, Using Google Ngram Viewer, of “do+ NP”

Usage in Second Language Attrition HIRAI, Seiko (53)

The Change of Meaning and Usage of “Kakushinhan” SASAKI, Fumihiko (65)

Study Notes

A Study of Code-Switching in a Japanese-Chinese Bilingual Child

..... GAO, Yuan (81)

Politeness Phenomena Between Japanese and Spanish

– The Case of Request in Colloquial Conversation – MIGUEL ORTEGA PEREIRA (85)

2013 Graduation Study List OGIWARA, Chikako (89)

Editor’s Postscript NISHIKAWA, Hiroyuki (96)

MEIKAI NIHONGO GAKKAI

Meikai Japanese Language Study Society

Akemi 1 Urayasu-Shi, Chiba, Japan